

はじめに

城北中学・高等学校地理部では、中学生・高校生の垣根なく一体となって活動し、様々な都市で巡検や合宿を行ってその地域の自然、歴史、文化、産業等を調査した。この「ちりレポ」はその内容を報告するための機関紙である。

第21号を迎える今回は、2022年11月の横浜、同12月の鎌倉・江の島、2023年2月の大宮、同6月の上野・浅草で行った4回の巡検、そして新型コロナウイルス感染症による規制が緩和されて行えるようになった春の箱根合宿、夏の仙台・松島・石巻合宿において、我々が学び、感じたことなどをまとめている。

読みやすくありながらも部員の個性や各地の魅力が詰まっている文章で、普段地理に馴染みのない方でも満足していただける内容となっている。地理部部長として、これを機に地理に興味をもってもらえると嬉しく思う。

また、読んだ後は是非、実際に自身の五感を使ってこれらの土地を歩いてもらいたい。文字からは分からないことは往々にしてあるからだ。想像や、過去とのギャップも含めて楽しんでいただきたい。

それでは第21号、最後までお楽しみください。

2023年9月30日

城北中学・高等学校地理部部長 長谷山 悠斗

ちりレポ第 21 号 目次

はじめに	1
ちりレポ第 21 号 目次	2
第一章：夏合宿～仙台・松島・石巻	
.....	3
第二章：春合宿～箱根	
.....	33
第三章：横浜はじめて物語	
.....	45
第四章：鎌倉と江の島の自然	
.....	67
第五章：大宮の地域性	
.....	90
第六章：上野・浅草を巡る	
.....	109
第七章：付記	
部員紹介	124
春合宿と夏合宿の実施要項	125
おわりに	128

第一章

夏合宿～仙台・松島・石巻 (2023年8月2～4日)



1. 夏合宿 第1日目

文責：長 遙人

僕たち高校二年にとっての最後の活動となる今回の合宿は、東京駅の「銀の鈴」広場から始まった。集合時間の7時20分には遅刻常習(?)の部長も含めほとんどの部員が集まっており、少し後に残りの1, 2人も合流し、ようやく全員がそろったところで今回の合宿がスタートした。個人的に、東北地方初上陸となる今回の合宿はとても楽しみにしていた。



【写真：東京駅】



【写真：本塩釜駅のパネル】

撮影：長 遙人

新幹線「やまびこ」に乗って東京→埼玉→福島→宮城と、窓から様々な景色を眺めて過ごすこと約2時間半。さらにそこから仙台駅で仙石線に乗り換えて30分。合計で3時間ほどかけて最初の目的地である本塩釜駅に着いた。ここでは、まず船に乗って松島湾の語り部クルーズを体験した後、昼食+松島の自由散策を行うという流れになっている。



【写真：「みなとオアシス・マリングート塩釜」の様子】

撮影：長 遙人

〈松島湾 語り部クルーズ〉 本塩釜駅に着いて若干の休憩をはさんだ後、船に乗ってクルーズに出発した。クルーズの前半は、ガイドとともに松島湾の様子を観察した。



【写真：松島湾の様子】

撮影：長 遙人

ガイドの音声が見えてくる島々についての名前や情報を教えてくれてとても面白かった。中でも、各小島に生えていた松が、いつも見る松よりも細く印象的だった。（島には栄養がないので松が細く成長するらしい）

クルーズの後半は、語り部の方による東日本大震災についてのお話を聞いた。震災の前日、いつもと同じ日が明日も来ると思っていた（むしろ、明日がどうなるかなんて誰も考えていなかった）のに、震災によって当たり前の日々は崩れてしまった。身の回りに当たり前のようになっている家族や友人など、多くの人が亡くなった。実際に起こるなんて考えもしなかった、漫画の中のような出来事が実際に起こった。など、震災を実際に経験した人からの話はとても生々しく恐怖も感じたが、実際に起こったことである以上（しかも自分が住む国で）、知らずに生きていくことはできないなと思った。とても貴重な経験だったので、これからの人生で生かしていきたいとも思った。

〈昼食+松島自由散策〉 クルーズが終わって松島につき、自由散策を始めた。その場で集合写真を撮ってから、解散して昼食を食べるところを探した。仙台といえど！ということで、牛タン屋「利休」で食べることにした。



【写真：松島】



【写真：牛タン定食】

撮影：長 遙人

普段の生活で牛タンを食べる機会もあまりないため、慣れない牛タンではあったが、高いだけあってとてもおいしかった。（この合宿中に結局2回牛タンを食べ、合計6000円弱払いました 痛い）

みんなで仲良く美味しく牛タンを食べた後、松島の中にある瑞巖寺に行った……が時間の関係上入場することはできなかった。



【写真：瑞巖寺】

撮影：長 遙人

瑞巖寺の門までの道は杉並木となっており、両側に巨大な杉の木が並んでいて圧巻だった。そうこうしているうちに時間になり、今度は電車で松島海岸駅から仙石線で野蒜駅まで行き、送迎バスで宿「かみの家」さんまで送っていただいた。

〈かみの家〉 今回の合宿では民宿「かみの家」さんに泊まらせていただいた。(しかも貸し切り!) 宿に着いてからの予定は残り夕食だけになっていたのですが、みんなでトランプやUNOなどをして楽しんだ。1～2時間してから、入浴を済ませ、夕食をいただいた。

【写真：夕食 めっちゃ豪華!】

撮影：長 遙人



夕食は海鮮系がメインで、とても豪華だった。このようなウニやカニなどは食べたことがなかったので、食べる前からとてもテンションが上がった。見た目の通り、もちろんおいしかった。この後に30分ほどのミーティングをして、この日の活動はすべて終了した。翌日は早起きしてからの漁体験の予定なので、それに備えて予定の就寝時間の夜10時には布団に入って寝た。

このような感じで合宿の初日は終了した。感想としては初日からとても暑く、体力をかなり消耗したが、東北初上陸というだけあってテンションが上がってとても楽しかった。2日目からもとても楽しみで、良い一日になったと思う。

2. 夏合宿 第2日目

文責：吉田 駿平

今日は朝3時に部屋のメンバーの動く音で目が覚めた。どうやら日の出を撮るためらしい。さすがに早すぎたため寝ようとしたが彼が準備のために動く音や日の光が差し始めてきたため寝付くことができなかった。結局4時になり、寝るのは諦めて宿の周りを歩くことにした。周辺はほとんどが林であり、建物などはあまり見られなかった。



【写真：宿の周辺の様子】

撮影：吉田 駿平

これも震災による影響なのだろうか。宿には震災直後の宿周辺の様子を撮った写真がある。テレビなどでよく使われているがれきの山とあったがまさにその通りだった。浜辺にも行きそこで朝日を眺めながらラジオ体操をした。そんなことをしていたらちょうどいい時間になったので部屋に戻り全員起きたので今日の準備をした。今日は漁師さんのご厚意によりかご漁をさせてもらうことになった。ありがたい限りである。学年別に3つのグループに分かれて漁

船に乗せてもらうこととなった。

かご漁は沿岸漁業の一つであり籠の中に餌を入れ放置し中に入った魚を引き上げる漁法である。それぞれ一つかごをあげた。皆カニがほとんどの中長がタコを二匹あげて大いに盛り上がった。ポイントは三つありそれぞれのポイントに三つのかごが設置されていた。一つ目は出てすぐの場所にあり波が少々立っていた。皆はあまり舟に乗ったことが無い様で波に揺られるたびリアクションがあった。ここでは長がタコを上げたことのほかにも魚が上がった。そのほかはカニであった。



【写真：タコをつかむ長】

撮影：吉田 駿平

2,3 つ目のポイントは島に囲まれた波のない穏やかな状態だった。しかし波がないせいか魚やタコは一切上がらずカニオンリーであった。漁師さんの話によるとここ最近不漁が続いているらしい。かご漁を体験した後ウミネコの餌やりをさせてもらった。食いつきがすさまじい。

しばらくするとかなりの量のウミネコが集まってきて漁師さんに言われたようにえびせんを持って手を挙げたところウミネコが飛んできてえびせんだけを器用にとっていった。ほかにも飛んでいるウミネコの口あたりに投げると飛んだまま食べた。器用な

ものである。皆船にも慣れたようで誰一人酔うことなく各々ウミネコとの触れ合いを楽しみ、戻ってきた。我々は最後に到着したようで船から上がると後輩たちの成果とグロッキーになった後輩たちがいた。後輩たちはタコや魚はもちろんアナゴまであげていたようで、長のタコ以外大した成果がなかった我々からするとうらやましい限りである。そんな感じで朝のかご漁は終わった。



【写真：海の様子】

撮影：吉田 駿平

今回とれたものは今晚料理してもらえようだ。漁も終わり朝食の時間となった、佐々木が卵の割り方を知らず縦に握り割ろうとしたり長にダブルタコニキと言うあだ名が付けられたりとなかなか濃い朝食であった。

その後はバスに乗り移動、大川小学校へと行くこととなった。道中で昼食やお土産を買ったりとしていたがバス移動の間は3時に起こされて寝不足であったことやカゴ漁の疲れもあってかずっと眠ってしまった。その間高二的の皆は地名縛りでしりとりをして盛り上がっていた。そんなこんなで大川小学校に着いたが、周りには何もない。大川小学校がポツンとあるだけであった。囲いがあたり何かしらの手加えられているかと思ったが思った以上にそのまま何も手加えられていなかった。

【写真：裏山から眺める大川小学校】

撮影：吉田 駿平



震災発生前は住宅が並んでいたらしい。語り部さんに当時の状況や何故大川小学校の事件が起こったのかを説明された。全体で百名ほどの小学生が実際に通っていたことなど目の前の建物からは想像もつかなかった。元の状態の写真なども貼られていたが、まるで別の場所を写したかのようだった。語り部さんの話では津波による被害は川より来たものによるものでありすぐ近くにあった橋が第一波で流されてきたものを堰き止めてしまったことにより第二波が直撃したと聞いた。

【写真：がれきをせき止めてしまった橋(わかりにくいですが奥の部分の橋の色が濃くなっておりその部分が第一波で流された)】

撮影：吉田 駿平



地震発生から津波到着まで 45 分ほどの時間があつたこと学校の避難が校庭に集まるまででその後のことが決められていなかったこと、教師たちがその場でどこに逃げるかで橋の近くの小高い部分を目指したこと、生徒の中に裏山に避難することを進言していたものがいたこと、裏山に避難することを強く言っていた教師が危険がないかルートの確認のため裏山に一人上っていた時に津波が来たこと、避難している時間は1分程だったもののその時間内に安全な場所であつた裏山に行くことができたこと、スクールバスの運転手が会社からの避難命令に対して子供たちを連れて避難しようとしていたこと等々、多くのことを語り部さんから聞いた。資料館では手前にある遺族の方たちが集めた資料があり奥が市が作ったものであつた。この大川小学校での出来事を市が事実を伝えず情報を隠ぺいしたと語り部さんは言った。裏山に通れぬ道はなかつたにもかかわら

ず、木が倒れており危険で裏山に行けなかったと報道していたそうだ。事実よりも保身を選んだのだと語り部さんは言った。上のものが非常事態に保身に走ることはまああるがこのような事態に対して起こってしまったことは非常に悲しいことである。訪れる前から大川小学校の件は知っていたが実際に行ってみると写真などでは感じにくい、本当に現実で起こったことであると強く感じた。今後このようなことの起こることのないように我々は津波が来るときは垂直方向に避難することを最低限のこととして覚えておかねばならない。重い内容ではあったが忘れてはならないことだと思う。

その後バスに乗り、宿についた。案の定移動中寝てしまいまたもや地名しりとりには参加できなかった。宿に戻り晩御飯を待つ間、河合の九州ローカルルールの出せるカードがないとき出せるカードが出てくるまで永遠に引き続ける、一度に出せるカードが1枚のみという絶対に終わらせる気がない地獄のUNOが始まった。そのルールで行われたUNOは恐ろしいことに1時間半もの時間を要した。(河合はこれを一般的なものと考えていたらしい。そんなことあってたまるか) さすがに長すぎたので1枚しか出せないルールは封印された。それがなくなるとちょうどいい長さになり楽しむことができた。

晩御飯は今朝取れたカニを使ったみそ汁とタコのから揚げが出た。どちらも絶品であった。また食べたい。そんな感じで一日が終わった。漁も大川小学校もどちらも貴重な経験だった。



【写真：(上) 晩御飯 (右) かご漁で獲ったタコの唐揚げとワタリガニのみそ汁(写せていないだけで他にもフライなどもあった)】

撮影：吉田 駿平

石巻市震災遺構 大川小学校 文責:榎本 眞鑑

① 概要

石巻市立大川小学校では、大震災後の津波により児童 108 名中 74 名・教員 10 名が亡くなった。海からは 3.7km 内陸に位置しており、津波は到達しないと思われていたが、未曾有の地震による大津波は川を遡上し、大川小を襲った。また、その後、海からの津波が到達した。



【写真：被害前の大川小学校（展示資料を再撮影）】

撮影：榎本 眞鑑

② 語り部さんのお話

私たち地理部は、大川小学校での震災の被害や震災からの教訓を学ぶために語り部の三條さんから話を伺った。

まず始めに校門から順に案内された。校門は左下の写真から分かるように大川小学校と書かれた表札と中央の道で段差が生じている。この段差は地震の際の地盤沈下によって生じたもので地震の威力を物語っている。



【写真：大川小学校校門】



【写真：現在の大川小学校周辺】

撮影：榎本 眞鑑

また、先ほど話した校門の前の通りは津波の被害を受ける前は色々な建物が並んでおり賑わっていたが被害を受けた後は前頁の右の写真のように更地となっており建物などは一切見られなかった。



【写真：現在の大川小の様子】

撮影：榎本 眞鑑

地震が発生した時刻は、生徒が帰りの会をしている最中だった。地震が発生した時、生徒たちは真っ先に校庭に集められ、教員たちは避難先について議論した。一部の生徒は、泣きながら日常的に課外活動を行っている裏山に逃げるよう訴え、避難しようとしたが教員に引き止められた。議論も校長がいないことから裏山へ逃げるのか近くにある三角地帯に逃げるのかで意見が対立し、まとまらなかった。教頭は「裏山に逃げるべきだと」主張したが釜谷地区の区長は「ここまで津波が来るはずない」と言い三角地帯へ避難すべきだと主張した。

最終的に地震発生から 50 分が経ち、三角地帯へ避難するために県道へ出たがすでに目の前まで川を遡上してきた津波が押し寄せていた。そこで生徒と教員たちは裏山へ続くであろう道を走って登って行ったが裏山の手前で行き止まりとなっており、そこで三

次に被害を受けた校舎を訪れた。大川小学校はとてもモダンな雰囲気の学校で中庭などがありのびのびとした感じだった。しかし校舎も周辺一帯と同様に津波の被害を受けていた。

左の写真は実際に被害を受けた教室の写真だ。教室の天井まで剥がれ落ちており、実際の津波の威力が凄まじいものだったとわかる。また、壊れている壁は津波の被害ではなく校舎に取り残された人を救出するために取り壊されたものである。

次に案内されたのは校舎と体育館を結ぶ渡り廊下だ。この渡り廊下は、河津波の被害を受けた。河津波は海からの津波より早く大川小学校に到達し、学校の裏手から海の方に向かって校舎を襲った。剥き出しになっている鉄筋からも河津波の威力の凄まじさが窺えた。また、体育館は大部分が津波に飲み込まれて壇上の端にある柱のみが残った状態だった。最後に伺った話は地震発生直後の話だ。

角地帯に残った人を含め、何十人もの人が亡くなった。その一方で、自力で裏山を登った生徒や教員もおり、波に何十mも打ち上げられ怪我をした状態で発見された。これらのことは避難を開始してから1分以内に起きたことである。

その後、地震の際、大川小学校で起こった全容が明らかになり避難にあまりにも長い時間を要したことや二次避難への対応の杜撰さに疑念が湧いた。実際、学校には登下校用の45人乗りのスクールバスが地震発生時にも停車しており、それに乗って避難できたのではないかという声や裏山へは多少急で危険でありながらも避難できたのではないかという声も上がっていた。実際に遺族が検証したら1分以内に裏山へ避難できたという。しかし、市は地震発生の際、倒木があり避難が困難だと説明した。対して、実際に避難していた人の証言では、「木は大きく揺れたが一切倒れていなかった」と証言しており、市の対応にも落胆したようだ。



【写真：(左) 学校の裏山 (右) 裏山への道(少し険しかったが楽に登れた)】



【写真：(左) 三角地帯と北上川に架かる橋 (右) 北上川(ここを津波が遡上した)】



【写真：裏山をすぐ登った所にあるコンクリート帯(地割れは地震の影響によってできた)】

撮影：榎本 眞鑑 (5枚全て)



③ 大川小学校・大川震災伝承館

この施設では市が、実際に震災で起こったことを文章にまとめ展示してある。また待合室では遺族によってまとめられた文章や展示品もあり、実際何が起こったのかがより深く分かるものとなっている。

【写真：大川震災伝承館】

撮影：榎本 眞鑑

④ 感想

私は語り部さんの話を伺って、地震に対する知識の欠落が命取りとなり、昔からの経験を重んじることが大切にしていくべきだと思う。私自身も、津波が川を遡上するということを知らず、実際この場にいたら適切な判断ができず命を落とす可能性も考えられるので、防災への正しい知識を得ることが非常に重要だ。また、避難経路を示す「ハザードマップ」を実際に辿ることも重要だと感じた。なぜなら、この地震の時もハザードマップの改訂が必要であると地震発生前から言われていたがそれが不十分であったことも多くの命を失った原因と考えられるからだ。

今回の訪問を通じて、学んだことを今後の糧にしていき二度とこのようなことが起こらないよう伝えていきたい。

3. 夏合宿 第3日目

文責：市川 洸太

こんにちは、地理部副部長の市川洸太です。ここでは2泊3日の仙台合宿のうち、3日目に行われた班ごとでの仙台散策を、部員の目線から記録していきます。ちりレポをもらったものの、小難しいことはねこだからわかんない！という方は、こちらの旅行記から読んでみるととっつきやすいかもしれません。なお3日目については、主に仙台の中心部を見学する「仙台市内班」、笹かまの手作り体験をする「笹かま班」、そしてかつての日本の北方に対する重要な防衛拠点であった多賀城を見学する「多賀城班」の3つの班に分かれて散策を行っています。当旅行記はその中の「多賀城班」のものとなっていますので、是非他の班の旅行記も読んでみてください！それでは本編をどうぞ！

今日は合宿最終日ということで、3日間お世話になった民宿の「かみの家」さんともお別れ。



【写真：眺め(かみの家さんは、部屋から太平洋を望むことのできる場所にある)】

写真：市川 洸太

朝からボリューム満点のご飯をいただき、送迎バスで野蒜(のびる)駅まで送ってもらったところでしっかりとお礼をした。ここからは前述の通り班ごとの行動になる。我々が多賀城班は早速多賀城を目指す!……のだが、ここで気を付けなければいけないのが、多賀城の最寄り駅は仙石線の「多賀城駅」ではなく、仙石東北ラインの「国府多賀城駅」であるということ。この2つの駅は似た名前ながらも直線距離で1 km 以上も離れており、その上、野蒜駅には仙石線と仙石東北ラインの両方が停車する。しかも仙台から松島方面には東北本線という電車も走っており、例えば「松島駅」は東北本線、「松島海岸駅」は仙石線になっていたり、「塩釜駅」は東北本線と仙石東北ライン、「本塩釜駅」は仙石線だったり、もう意味が分からない。どうしてこんなにややこしいことになっているのか……。調べてみたところ、それにも複雑な事情があるらしいのだが、「なんかすごそう」ということしか理解できなかった。とにかく、今回は「野蒜駅」から「国府多賀城駅」まで「仙石東北ライン」に乗ればいいらしい。余計なことを考えるとまたこんがらがりそうなので、最低限のことだけ確認して電車に乗ると……この電車ハイブリッドらしいぞ!ハイブリッドってことは、基本はエンジンで走ってるのかな。ちなみになんでハイブリッドにする必要があるのかも調べたら出てきたけど、案の定何言ってるのか分かんなかった。いずれにせよ珍しそうな電車に乗れて嬉しい。……そんなこんなで無事に国府多賀城駅に到着!それじゃあまずは「東北歴史博物館」を見学するぞ!ここでは、旧石器時代から近現代にかけての東北地方の歴史や文化が学べるらしい。早速展示を見に行く……前に、併設されている今野家住宅を覗いてみよう。

【写真：今野家住宅中門(物置や馬屋も兼ねていた)】

撮影：市川 洸太

この歴史を感じさせる建物は、江戸時代に肝入（村の責任者）を代々務めていた今野家の住宅を移設・復元したものだそう。やはり偉い立場の人の家だけあって立派な造りをしている。そして肝心の建物の中は、若干薄暗いもののかかなり涼しい！



この日は歩いているだけで汗が噴き出してくるような酷暑だったのだが、そんな中でもクーラーや扇風機なしでこんなに涼しいのは凄い。その分冬は相当寒さが厳しかったのだろうが、寒さは着ればなんとかなるから……。暑いので脱いだところでどうにもならんよね……と、このうだるような暑さを嘆きながら今野家住宅を後にし、博物館の常設展示を見学しに行く。えーと、入館料はいくらなんですか……ってえ！？常設展示だけなら高校生以下は無料なんですか！？マジ！？ありがてえ……。っと、それじゃあ気を取り直して展示を見に行くぞ！ここはどうやら旧石器時代から現代に向かって展示がされてるみたい。まずは古いところから。……へー、縄文時代の貝塚からマグロの骨が見つかるんだ～。……えっ！？縄文時代から人とイヌと一緒に暮らしてたんだ……。イヌを埋葬した跡も発見されてるのね～。……といった感じで弥生時代くらいまで見学し、いよいよ多賀城についての説明が。7世紀後半の日本では中央に権力を集中させる国づくりを行おうという動きがあったが、そんな中、政府に従おうとしない東北北部の人々は「エミシ(蝦夷)」と呼ばれ、政府とたびたび武力を用いた衝突を繰り返していた……ってというのが背景。そこで政府は東北各地に「城柵(じょうさく)」という施設を置き、東北の北部まで支配を広げようとした。その中の1つに仙台市郡山遺跡があり、それを前身として作られたのが「多賀城」ってことらしい。この多賀城は、現在の福島県、宮城県、岩手県、青森県などを含む陸奥国(むつのくに)の国府(今で言う県庁の役割の施設)でもあり、古代における東北地方の中心的な場所であったことが伺える。

博物館はその後、奥州藤原氏が興隆した中世、徳川家康によって諸藩が置かれた近世、そして近現代と展示がされていたが、完全にペース配分を間違ったせいで後半は駆け足での見学となってしまった。できればもう少しじっくり見たかったけどしょうがない！



【写真:展示された多賀城の復元模型(現在でも当時の礎石の一部が残っている)】

撮影:市川 洗太

次はいよいよ実際に多賀城へ向かいます！……それにしても本当に暑い。とにかく日差しが……あの刺すような日差しが……！

——暑さの玉手箱や——

あっ！「極暑（きょくしょ）の彦摩呂」だ！

——アツすぎだろ～？——

「酷熱（こくねつ）のすぎちゃん」も！？

——あんな、暑さって200種類あんねん——

「焦熱地獄（しょうねつじごく）のアンミカ」まで……！？これはヤバいぞ……！！こうなったらあの人に頼むしかない！「涼（りょう）のねづっち」に……！すみません！涼しげななぞかけをお願いします！

——……整いました！——

お！それではどうぞ！

——金魚とかけまして、かつらと解きます。——

その心は？

——どちらも紙で掬う（髪で救う）でしょう！——

お～！夏祭りの定番である金魚すくいを絡めることで爽やかさも演出するとは……！これには「ふかわ涼（りょう）」もびっくり！そんなこんなで「涼」を感じながらやっとこさ多賀城に到着。



【写真:前頁の模型では奥側にあたる後殿から撮った写真
(一段高くなっているのはメインの建物である正殿)】

撮影：市川 洗太

今は自然に取り囲まれた閑静な空き地とでもいうような雰囲気だが、その静けさが一層、この場所で積み重ねられてきた歴史の重みを感じさせる。ちなみに多賀城の創建について記されている多賀城碑には724年に設置されたとあり、来年でちょうど創建から1300年の節目だということで、当時の南門や城前官衙(じょうまえかなが)という役所などを復元する一大プロジェクトが目下進行中とのこと。遠目でもわかる立派な

建物が造られていたの
で、完成の折には皆さん
もぜひ訪れてみてはいか
が？



【写真：牛タンづくし膳
(2200円)。(付け合わせ
の香の物を一気に食べた
ところ、めちゃくちゃ辛
くてしばらく悶絶した)】

撮影：市川 洗太

……それでは多賀城を見学したところで、国府多賀城駅に戻って電車で仙台駅へ。ここで1時間ほどお昼休憩をとります！でも、せっかく仙台来たんだからねえ……。食べるならアレしかないっしょ！やっぱ牛タンですわね。今回は仙台駅の「伊勢屋」さんでいただくことに。この牛タンづくし膳は定番の牛タン焼きとテールスープの他にコロッケやシチューもあって大満足。ちなみに牛タンが仙台名物になったのは戦後の話だそう。戦後の食糧難の中で、当時は食べる習慣のなかった牛タンを安く仕入れて牛タン焼きを開発した人がいたとのこと。テールスープがセットになっていることが多いのも同様の理由らしい。また一つ賢くなったところで、仙台の名物もう一個食べちゃおうかな～。……ということでこれまた仙台駅の中にある「ずんだ茶寮(さりょう)」さんへ。ここでは名物のずんだシェイクを飲んでみるぞ！(写真は次のページ)かねてから噂は耳にしていたずんだシェイク……。実際飲んでみると、ずんだとバニラシェイクのバランスがちょうど良くて飲みやすい！ずんだのクセがないのに粒の食感は楽しめてめっちゃいいな！しかも片手で持てるから飲み歩きができて、ついでにそれが他の人に対する宣伝にもなると……。これは完全に発想の勝利ですね……。ちなみにずんだは江戸時代以前から食べられていたと考えられているけど、昔は砂糖が貴重だったため、今のように甘いずんだの記録が残っているのは幕末からのことらしい。そもそも「ずんだ」って名前は、豆を打つという意味の「豆打(づだ)」から来ているという説や、「じんだ」と呼ばれていたぬかみそと見た目が似ていたことが由来だという説など、諸説あるみたい。でも昔の人はまさかずんだが飲み物になるとは夢にも思わなかつただろうな……。姿を色々変えながらも未だに愛され続けるずんだ……。時代の波に吞まれずに人々には飲まれているなんて凄い食べ物だ……。



【写真:ずんだシェイク(仙台駅周辺では至る所にずんだシェイクを持っている人がいるので、否が応でもその存在を知ることになる)】

撮影:市川 洸太

その後はおみやげを物色し、集合場所へ。……しかし時間になっても齋藤と部長の長谷山が集合場所に現れない。何やってんだあいつら……。待てど暮らせど姿が見えない

ので、先に行ってるから後から追いついてと連絡を入れて出発した。オイオイオイ死ぬわアイツら……と思いつながらエスカレーターに乗っていたその時！突然例の二人が現れた！いつの間に！？……まあとにかく、全員揃ったならヨシ！それじゃあ次は地下鉄東西線で大町西公園駅に向かって、そこから歩いて瑞鳳殿（ずいほうでん）に行きます！……でもね、何度も言うようだけど本当に暑いよ……。暑いとどうなるか。無性にイライラする。と思うも、結局この暑さは誰のせいでもない。全員均等に被害者なのよね……。ということで仙台を貫流する広瀬川を渡り、



【写真：広瀬川(仙台は「杜の都」の名に違わず、市街地の中にも自然が多く残る)】

撮影：市川 洸太

瑞鳳殿付近までやってくると……駐車場の優しいおじさんがコインロッカーの存在を教えてくれた！ありがとうございます！そのおかげで瑞鳳殿までの長い階段を身軽な状態で上ることが出来た。それじゃあ早速見学タイムだ！……というか、そもそも瑞鳳殿って何なの？という誌面の前のあなた！詳しい説明は該当のちりレポを読んでほしいんですが、ここでもかいつまんで説明します。仙台の有名な武将といえばやっぱり伊達政宗だけど、独眼竜として戦国時代から江戸時代にかけて活躍した後 1636 年に 70 歳で没すると、遺言に従って今の場所に造られた霊屋（たまや/死者の魂を祭る堂）がこの瑞鳳殿。1931 年には国宝に指定されたものの、1945 年の戦災によって一度は焼失したそう。現在の建物は 1979 年に再建されたもので、2001 年の大改修を経て今に至る。ちなみに一口に「瑞鳳殿」と言っても、これは有名な本殿の他に、拝殿や、この世とあの世を隔てる涅槃門（ねはんもん）などの総称であるため、厳密には本殿だけではなく周りの建物も瑞鳳殿に含まれるらしい。この本殿実はよく見てみると「瑞鳳殿」の名に

もある通り鳳凰が彫られている。この鳳凰は優れた統治者による平和な世に現れるとされ、「鳳」が雄を「凰」が雌を表しているそう。よって、雄である「鳳」の字を用いた「瑞鳳殿」の名前は政宗が男性であることから来ていると考えられているらしい。



【写真:おそらく一番有名な本殿(内部には政宗の尊像が安置されており、年に数回御開帳されるのだとか)】 撮影:市川 洸太

ちなみにこの本殿には様々な生き物が彫られているのだが、それらは全て二匹ずつ配置されており、片方は口を開けて「阿(あ)」、もう一方は口を閉じて「吽(うん)」と阿吽の姿をしている。阿吽とは仏教用語で始まりと終わりの事を指し、この瑞鳳殿も仏教的な価値観に基づいて作られていることがわかる。この阿吽という考え方は社寺の狛犬や仁王像にも影響を与えており、多くの場合口を開けた像と閉じた像の二つが置いてあるそうなので、お寺や神社に行く機会があったら口の形に注目してみるのも面白いかも。……そんな感じで瑞鳳殿を見た後は併設されている資料館へ。ここには伊達家ゆかりのものが展示されていたり、最新技術を駆使して復元された政宗の顔が飾ってあったりと、見て歩くだけでかなり面白い。そうして夢中になっていると……えっ!?もう全然時間ないじゃん!やべ〜!まだ順路続いているのに〜!実はこの後にも二代目藩主の伊達忠宗の霊屋である「感仙殿(かんせんでん)」や、三代目藩主の伊達綱宗の霊屋である「善応殿(ぜんのおでん)」などの見所があったのにも関わらず、その存在を知らなかったのと、資料館が想像以上に面白かったってので全く時間を割くことができなかった。……くそ〜!もったいないことしたな〜!でも悔やんでも仕方がない……というか他の部員を待たせてしまっているのだから、来た道を急いで引き返す。コインロッカーから荷物を取り出して(このロッカーを教えてくれたおじさんが、返ってきた100円玉忘れずに取ってけよ〜!と言ってくれてめっちゃありがたかった)、また大町西公園駅に戻る!行きと同じように東西線で仙台駅に戻り、集合場所を確認したら、残りの時間はお土産タイム!……しかしお昼休憩の時間に前もってお土産の目星をつけておいたので、あとは買うだけ。萩の月と……ずんだ餅と……牛タンせんべい!まあこんなもんかな。それじゃあ時間もあるし、行きますか……ポケモンセンタートウホクに!やっぱせっかくなら

行っておかないとね。ここのポケセンは仙台駅から歩いて3分の仙台パルコの中に入っているの、アクセスも良好で素晴らしい。



【写真:ポケモンセンタートウホク】

撮影：市川 洸太

それと今回仙台に来たことで、東日本のポケセンで行ってないのは船橋のトウキョーベイだけになったので、そういう意味でもちょっと嬉しい。てなわけで、仙台なだけあってジラーチが前面に押し出されている店内を見て回る。うーん、ぬいぐるみはめっちゃくちゃ欲しいんだけど、もう家にいっぱいいるからな……。あ〜、お金と時間と場所さえあれば全部買うんだけどな……。ということで色々見た挙句、パルデアのポケモンが描かれたコップを買って帰ることに。以前札幌のポケセンで買った袋にお土産とコップを詰め込んで、そろそろ集合場所に向かいます！……。無事地理部の集団とも合流できたので、あとは新幹線で帰るだけ！……。なんだけど、ホームで電車を待っていたら、ずっと「黄色い線の内側にお下がりください！」ってアナウンスしている駅員さんがいてちょっと不憫だった。何回言っても聞かない輩がいるのか、挙句の果てにはその人の服装を指摘し始めていて凄い。駅員さん、くじけないで……。あなたのような人達のおかげで日本の交通は成り立っているから……。そんなわけで、きちんと黄色い線の内側に並んでから新幹線に乗り込み、これで仙台ともお別れ……。あっという間に遠ざかっていく仙台を背に、隣の河合君からある提案が。帰りの新幹線は窓側の席に他のお客さんが乗ってくる予定だったのだが、今はまだ誰もいないのでおそらくこの先の駅で乗ってくるだろうということで、どこの駅でこの人が乗り込んでくるのか当てるとい、ちょっ

とした暇つぶし。今乗っているのは「やまびこ」なので、停車駅は白石蔵王、福島、郡山、宇都宮、大宮、上野、そして東京となっている。河合君は福島駅、僕は宇都宮駅だと予想。……さてどうなるのか。白石蔵王駅を過ぎ、福島駅へ。……お！結構多くの人が並んで待ってるけど……う～ん、この中にはいないっぽい？ただこの福島駅では山形からやってきた「つばさ」との連結をするので、他の駅より停車時間が少し長い。

戻ったら隣の人も乗ってるかもと思いつつ、滅多に見られない連結を見に行く。……お～！普段時速数百 km で走ってる新幹線がこんな風に慎重に動いてるのを見るとなんか不思議な気分。いや～、面白かった～！



【写真:つばさ号との連結】

撮影：市川 洸太

……でも窓側の席は依然空いたまま。どうやらこの駅ではないみたい。これは宇都宮の可能性が高まってきたぞ……！その後は郡山で今（2023/8/4）話題のビッグモーターを見つけて勝手に盛り上がったりなんだりしつつ（ここのビッグモーターもストリートビューで確認したらちゃんと街路樹が枯れていた）、宇都宮駅へ。隣の人はさっきの郡山駅でも乗ってこなかったの、これは宇都宮の可能性大。……ただもう一つ考えられるのが、キャンセルしているってパターン。宇都宮を過ぎると大宮と上野にしか停まらないので、実質宇都宮が最後のチャンスになる。さあ……どうか……！？ホームにはそれなりにお客さんが待ってるけど……。……う～ん、結局隣の人はいなかったみたい。そうすると大宮の可能性も微レ存……。……なはずもなく、あえなく大宮を発車した新幹線。これは上野説が急浮上か！？……違いました。やっぱりキャンセルしてたのかな？まあいずれにせよ二人とも不正解ということで……。ちなみに当の河合君は、新横浜駅から東京駅まで東海道新幹線で帰ったことがあるそうです。隣の人は相当驚いただろうな。……そんなことを言ってるうちに東京駅に到着。そこで解散となった。いや～、なんだかんだあつという間だったな～。今回の合宿は松島行ったり、漁業体験をさせてもらったり、震災について勉強したり、コオロギアイスを食べたり（ゲテモノかと思いきや、普通に美味しかった）、そして最終日はここまで書いてきたように多賀城と仙台を見学したりと、明るい話題ばかりではなかったけど、そういうことも全部ひっくるめて「仙台・松島」のことを深く知れたと思う！惜しむらくは仙台城に行けなかったことと、瑞

鳳殿を全て見て回れなかったことかな～（時間があれば仙台のポケふたも見ておきたかったけど）。それで今回来てみて思ったのは、何食べても美味いってのと、松島綺麗すぎてこと。やっぱり海の近くの民宿に泊まらせていただいたので、そこで出してもらったご飯はちょっとした小鉢一つ一つも新鮮でめちゃめちゃ美味しかった。あと、松島は見る場所によって景色が移り変わっていくのが凄く素敵だった。こりゃ芭蕉も詠むわ。ただ、再三書いてるように超暑い……。今年の夏が災害レベルに暑いってのもあるけど、東京よりは北にあんだから多少は涼しいだろ！と思って行ったら、全くそんなことなかった。こんなに暑かったら芭蕉も詠まなかったかもね……。もしもう一度来る機会があっても、少なくとも真夏には来ません。皆様方におかれましても、暑さには十分お気をつけあそばせ……。ということで、最後は「捨てられたスイカ」の写真でこの旅行記を終わりにしたいと思います！それでは、ここまで読んでいただき本当にありがとうございました！ 感謝のアダム・スミス 「アザス・スミス」



東北歴史博物館 文責:佐々木 秀真

東北歴史博物館は宮城県多賀市高崎にあり、昭和 49 年（1974）に開館した東北歴史資料館を継承している。宮城県を中心としながらも、東北地方の歴史や文化を日本国内にとどまらず世界に広く発信することを大きな目的にして平成 11 年（1999）に開館した。旧石器時代から近現代までの、東北地方の歴史や文化が展示の中心となっており、日本の歴史を旧石器、縄文、弥生、古墳、古代、中世、近世、近代、近現代に分類し分かりやすく説明する展示がなされている。東北歴史博物館という名の通り、館内には東北の歴史として、蝦夷や城柵である多賀城、奥州藤原氏などの展示がされている。



【写真：東北歴史博物館外観】

撮影：佐々木 秀真

仙台城跡（青葉城跡） 文責：鈴木 統介

仙台城跡は、仙台市の中心市街地の西方に位置する青葉山丘陵が広瀬川に突き出した場所に立地する60万石余を領した仙台藩主伊達政宗の居城跡である。城跡は、標高115mほどの丘陵の突端に本丸が位置し、北側に二の丸、東側に三の丸を配している。仙台城本丸は、東側が広瀬川に臨む断崖であり、西側を「御裏林（おうらばやし）」と呼ばれる山林、南側を竜ノ口溪谷（たつのくちけいこく）が囲むという自然の地形を巧みに利用した「山城」である。東と南を断崖が固める天然の要害に築かれたこの城は、將軍家康の警戒を避けるためにあ敢えて天守閣は設けなかったと言われている。また、平成9年から始まった本丸の石垣改修工事や大広間跡の発掘調査成果などを通して、その歴史的価値が高まり、平成15年8月に国史跡に指定された。



【写真：仙台城跡の石垣】

撮影：顧問 齋藤

なぜ現在には城跡だけで城は残っていないのか、その理由は約150年前にある。まず仙台城本丸は、明治6年の『廃城令』によってお取り壊されてしまった。そしてその9年後、二の丸は明治15年の火事によってほとんどが消失してしまった。大手門と脇櫓（わきやぐら）、また三の丸の巽門（たつみもん）も1945年7月10日未明の仙台空襲で焼失してしまっている。このようなことから現在は城跡しか残っていない。なので今では城は消失してしまっているが、政宗公騎馬

【写真：仙台城跡の碑】

撮影：鈴木 統介



像の前に立てば、天下取りの野望に燃えた政宗公と同じ視線で、市街を展望できる。また、現地では青葉城資料展示館にて、コンピューターグラフィックス (VR) による青葉城復元映像などを見ることができる。

【写真：仙台城跡の伊達政宗像】

撮影：顧問 齋藤



瑞鳳殿 文責：犬島 伸遥

瑞鳳殿は、伊達政宗の霊廟、つまり墓があるところだ。瑞鳳殿の歴史は、政宗の死後、あとを継いだ忠宗が遺言に従って経ヶ峰に霊廟を建立し、「瑞鳳殿」と命名したのが始まりだ。その後、瑞鳳殿は国宝に指定されたが、戦時中に空襲によって消失し、戦後に仙台市が伊達家から瑞鳳殿一帯の土地の所有権を得て、再建された。席地内には伊達家一族と家臣の墓や戊辰戦争で亡くなった仙台藩士の慰霊碑、資料館がある。政宗が死去した際にあとを追って殉死した家臣の供養塔が瑞鳳殿の両脇に建ち並んでいて、当時の「殉死」という文化を感じることもできた。

資料館では歴代仙台藩主の頭蓋骨や遺髪などが展示されていて、一般的な資料館と一線を画した展示を見ることができた。

瑞鳳殿までの道のりは長い上、階段もかなりの距離があり、合宿の最終日で疲弊していた我々にはかなりキツかった。合宿ということで、荷物もかなり重かったのだが、駐車場の係の人が親切にコインロッカーの場所を教えてくれたのでそこに預けて瑞鳳殿へ向かうことができた。



【写真：瑞鳳殿】



【写真：殉死者の慰霊碑】

撮影：犬島 伸遥

仙台大観音 文責：薛 文森

① 概要

大観密寺は智積院が本山の真言宗智山派に属する密教寺院。境内に仙台市市制 100周年を記念して高さ 100m、21 世紀を記念して地下 21m の 1990 年に建てられた。

② 沿革

仙台大観音及び大観密寺は、実業家の菅原萬氏が日頃の信仰心と、名所を仙台につくりたいという想いから立願し、1991 年に個人の所有物として建立した。創建当初は全国から参拝者も数多く集まっていたが、現在の境内は静寂な佇まいを見せ、創建時とは違う地域信仰のよりどころとなっている。計画発表後、周辺住民が反対運動を起し建設後も不気味に見られていたが、現在では信仰対象のみならず待ち合わせスポットとして利用されるなど地元に着している。

③ 仙台大観音

正式名称は仙台天道白衣大観音。胎内は 12 層に分かれており、60m に及ぶ吹き抜けになっている。12 層には大観音の腹側と背側に展望窓が設置されていて、都心側は天気が良好であれば牡鹿半島まで見渡せます。また、両肩付近に航空障害灯が設置されて、正面は仙台駅に向いています。内部の各層には三十三観音などが収められ、直接内拝ができる。また、エレベーターが設置されているため、直接 12 層へ昇ることもできる。2020 年ごろから表面にひびが目立つようになり、2023 年 6 月から工事が行われている。また、この大観音により地上アナログテレビ放送における電波障害が発生したため、その対策としてニューワールド中山中継局が設置されていた(2012 年に廃止)。

【写真：青葉城から望む仙台大観音】

撮影：薛 文森



④ 油掛大黒天

大観密寺に「仙台大観音」の建立以前から鎮座している。そのため、寺院の中に鳥居が立っているという珍しい状態になっている。油を掛けて参拝を行うご尊像であり、全国でも非常に珍しい。

⑤ 感想

今回は猛暑と時間の都合により間近で見ることや内部を見ることができなかったが、青葉城からでも十分に大きく見えた。また仙台空港からでも見えるようなので、仙台に行った時には是非一度観音像の大きさだけでも実感してほしい。

笹かま 文責：池田 鴻平

笹かまは播潰、成形、加熱、冷却、包装の5つの工程で作られている。播潰では保存料やデンプン、卵白を使わずにすり身を作り、成形をする際には天然の独自調味料を使用している。冷却ではスパイラル（螺線構造）というレーンを用いている。また最後にはX線を用いて異物混入を防ぎ、包装を行っている。笹かまは売ることのできない白身魚を加工して作られている。昔はヒラメが主な材料だったが、今では300mまでの浅い海の砂底部をヒレで歩いて生息している金頭（カナガシラ）と呼ばれる魚が主な材料になっている。



【写真：(左) 加熱後の笹かま (右) 成形後の笹かま】

撮影：池田 鴻平

鐘崎笹かま館 文責：野口 琉也

① 概要

宮城県仙台市若林区にある鐘崎笹かま館は、「ここでしか見られない」「ここでしか体験できない」「ここでしか味わえない」をテーマにした、訪れた人全員が楽しめるアミューズメントパークである。笹かま作り体験や工場見学など、笹かまのことについて学ぶことができるのはもちろん、宮城の食や文化も満喫することができる。



【写真：鐘崎総本店(笹かま館)】

撮影：野口 琉也

② 鐘崎の笹かまに関する取り組み

笹かまは弾力のよいすり身としてトビウオやマダイ、フグ類などの白身魚が使われ、

固まりやすいすり身としてクロカジキやニベが使われている。その中で鐘崎は未利用魚をおいしく加工して笹かまにする取り組みをしている。フードロス削減のために漁の際に海洋廃棄される魚を利用したり、家庭での調理が難しいカナガシラを利用したりすることで未利用魚に新たな価値を見いだしている。



【写真：鐘崎の取り組み】

撮影：野口 琉也

③ 一階 鐘崎ショップ、鐘崎屋
 <鐘崎ショップ> 笹かま館に隣接している工場で製造された作りたての笹かまが販売されている。販売されている笹かまには様々な種類がある。とうもろこし入りの笹かま

や、揚げ笹かまなどの珍しい笹かまがたくさん販売されている。

<鐘崎屋> 鐘崎ショップの隣には鐘崎屋という笹かまをじっくりと味わえる店がある。鐘崎総本店では、元祖ぷっくら揚げや炙り笹かまなどが堪能できる。



【写真：笹かま館一階】

撮影：野口 琉也



【写真：笹かまを焼くようす】

撮影：野口 琉也

④ 二階 笹かまづくり体験、工場見学

<笹かまづくり体験> 二階では笹かまを手作りすることができる。白身魚の練り物を笹かまの形に整形して300度にもなる電機焼物器で焼き上げる。スタッフの人がわかりやすく映像とともに説明してくれるので子どもでも楽しむことができる。焼き上がった笹かまは袋に入れて持ち帰ることができる。焼きたての笹かまは外の皮がパリパリで中がふわふわでおいしい。

<工場見学> 隣接している鐘崎笹かま工場の見学もできる。ここでは実際の製造ライン

や職人の仕事の様子を間近で見ることができるため、笹かまの原料魚の特徴や製造工程などを知ることができる。

七夕ミュージアム 文責：遠藤 壮一郎

七夕ミュージアムは日本で初めて七夕まつりの七夕飾りを常設展示した施設である。仙台七夕は、古くは藩祖伊達政宗公の時代から続く伝統行事として受け継がれ、今日では日本古来の星祭りの優雅さと飾りの豪華絢爛さを併せ持つお祭りとして全国に名を馳せている。七夕まつりは本来、旧暦 7 月 7 日の行事として全国各地に広まっていた。仙台七夕まつりでは、その季節感に合わせるため、新暦の 1 カ月遅れの暦である中暦を用い、現在の 8 月 6 日から 8 日に開催されている。仙台駅前から中央道りや一番街のアーケード街にかけて豪華な七夕飾りを、また周辺の地域商店街でも素朴な笹飾りを見ることができる。



【写真：七夕まつり当日の様子（2018 年撮影）】

撮影：顧問 齋藤

ここ 100 年の仙台七夕まつりの移り変わりをみると、まず大正期には 1923（大正 12）年におきた関東大震災後の不景気を乗り切るために、商店街で連合大売り出しが企画され、従来にはなかった『商店街の七夕』が登場してきた。

昭和初年頃では 1928（昭和 3）年、不景気で衰微に傾く七夕の復興を目指して「第一回全市七夕飾り付けコンクール」が行われ、その後、七夕は年毎に盛大になっていった。

昭和 10 年頃には七夕祭競技会は年々参加数が増え『観光としての七夕』がクローズアップされるようになり、飾り付けにボリューム感が出てきて、提灯など様々な形の飾り付けが見られる。この頃からくす玉型の飾りが登場する。

戦後、1946（昭和 21）年に竹飾り 52 本が立てられて七夕が復興し、昭和 35 年にはす

でに170万人もの人出で賑わった。飾り付け、配色ともにさらに華やかになり、絢爛豪華な『一大イベントの七夕』となった。

そして現在では竹飾りの規模と華やかさは、まさに全国随一のものとなっている。飾り付けにも時流にあったテーマが登場するが、仙台伝統の手作りの良さや七夕飾りがどの竹飾りにも下げられるなど、400年間続く仙台七夕の良き伝統が現代にも受け継がれている。



【写真：仙台七夕の笹飾り】



【写真：仙台七夕の七つ飾りの一部】

撮影：遠藤 壮一郎

クリスロード商店街・三瀧山不動院 文責：田畑 裕理

クリスロード商店街とは仙台駅前から歩いて数分のところにある大規模な商店街である。またその歴史は古く、1670～80年代の仙台北下絵図では「新伝馬町」として栄えていたことがわかります。また、「クリスロード商店街振興組合」の発足は昨年で50周年を迎えており、長く人々に親しまれている。

三瀧山不動院はそんなクリスロード商店街の丁度中央に位置しているのは真言宗智山派のお寺である。このお寺は約250年前にできたとされていて、今は地元住民から『みたきさん』という愛称で親しまれている。実際に足を運んでみると一つのお店かのようにソフトクリームの置き物などが置いてあり、堅苦しいお寺のイメージとはかけ離れており驚いた。しかし、昔からこの周りに商店などが並び人々が集まってくるとこのように周りに合わせるのはむしろ普通かもしれない。また、中は意外と暗く表の雰囲気とは打って変わって厳かで厳粛な雰囲気だった。

このようにクリスロード商店街と三瀧山不動院は切っても切れない関係にあり、これからも多くの人に親しまれていく場所となるのである。



【写真：商店街の様子】

撮影：顧問 齋藤



【写真：三瀧不動院の入口】

撮影：田畑 裕理

<参考資料>

<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00447/092100002/>

https://www.bengo4.com/c_1018/n_5918/

<https://kahoku.news/articles/20180209kho000000136000c.html>

<https://diamond.jp/articles/-/27043>

<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00447/092100002/>

https://www.tohokukanko.jp/manabi/attractions/detail_1009463.html

<https://daikannon.com/>

<https://gogo-miyagi.com/navi/8003>

<https://blog.japan-videography.com/sendai-kannon/>

<https://www.kanezaki.co.jp/>

七夕ミュージアム展示資料

<https://www.sendaitanabata.com/about>

<https://www.sendaitanabata.com/outline/history>

https://www.kanezaki.co.jp/shop/belle_factory/tanabata_museum.html

クリスロード商店街 HP <https://www.clisroad.jp/>

第二章

春合宿～箱根 (2023年3月30～31日)



1. 箱根湯本

文責：市川 洸太

箱根湯本は、1200年の歴史を持つ箱根の玄関口となる存在で、奈良時代の757年に開かれた箱根温泉郷の中で最も古い温泉地である。新宿駅から小田急線で1時間半ほどというアクセスの良さや、1200年という歴史の長さから、現在も多くの温泉旅館や土産物店が立ち並び、賑わいを見せている。また、箱根の温泉は同じ箱根の中でも場所によって泉質が異なっており、地理部が今回宿泊した湖尻温泉は中性で炭酸を含んでいるという特長があるのに対し、箱根湯本の温泉はアルカリ性のものが多いという特長がある。実際に、地理部が箱根湯本で入った温泉は弱アルカリ性のものだった。また、箱根湯本は温泉だけでなく飲食店や土産物店も豊富で、駅前には多くの観光客で賑わっていた。



【写真：箱根湯本の駅前】

撮影：市川 洸太

2. 箱根の交通手段

文責：田畑 裕理

箱根湯本。ここは新宿から小田急ロマンスカーで、約1時間半で行くことができる箱根の玄関口である。またここから登山電車で箱根の急な山道を登ることができる。この際、登山電車に使われている技法が「スイッチバック」と呼ばれる特殊な手段である。スイッチバックとは進行方向を切り替えて違う上り坂を登ることで急な坂を限られた範囲で登ることができる物である。また、車内から見える景色は絶景そのもので箱の湯本の街並みから秋には山々の紅葉などを見ることができる。

しばらく電車で揺られていると終点の強羅までいき大涌谷まで行くにはケーブルカーに乗り換える必要がある。ケーブルカーは登山電車と違い列車が斜めに作られておりスイッチバックをせずとも斜面を登ることができる。

ケーブルカーに揺られて終点[早雲山]まで行くとロープウェイに乗り換えて大涌谷まで行く。大涌谷は現在進行中で火山活動を続けているためロープウェイから煙の出ている様子などが見える（写真左参照）。また大涌谷の絶景を眺めていると乗換駅である[大涌谷]まで着くことができる。ここで芦ノ湖方面のロープウェイに乗り換えると桃源台駅に行くことができる。

桃源台駅につくと一際目を引くのがすぐ外にある海賊船である（写真右参照）。この海賊船は遊覧船としての魅力だけではなく芦ノ湖を端から端まで最短で結んでいる。また、優美な外観は外国人観光客にも人気が高く、乗船前に写真撮影する人も跡を絶たない。また、遊覧船に乗り箱根関所のある急雨東海道付近まで行くとバスに乗ることができ、これに乗るとスタート地点である、箱根湯本に帰ってくることができる。

以上のように箱根はその地形に特化したさまざまな交通手段が発展しており、今のように観光客の足となっている。



【写真：（左）ロープウェイから見た大涌谷の様子 （右）富士山と海賊船】

撮影：田畑 裕理

3. 旧東海道

文責：塚崎 瑛登

旧東海道は江戸の日本橋から京の三条大橋までの約 492km を結んでいた五街道のひとつだ。箱根にも旧東海道が通っており、箱根は古くから交通の要衝となってきた。今では箱根の旧東海道は目立たないほど細い道になっているが、昔は多くの旅人がここを利用していた。この旧東海道は、今の箱根湯本駅から芦ノ湖の湖頭にある箱根町港にかけて通っていた。箱根町港周辺は箱根駅伝の折り返し地点になる場所として有名になっている。



【写真：現在の旧東海道】

撮影：塚崎 瑛登

4. 宮城野早川堤の桜

文責：安藤 隼太郎

宮城野早川堤の桜は、箱根町宮城野・木賀の早川沿い約 600m にわたり、120 本もの桜並木が続く桜の名所である。その中で、ソメイヨシノの並木が約 450 メートル続き、近くの国道 138 号線沿いの仙石原までの間には 40 本ほどのシダレザクラ(枝垂桜)の並木が見られる。また、例年 4 月 1 日から 21 日の間、夜にライトアップが行われ、夜桜も堪能できる。

宮城野、強羅地区は標高が 400、500m を越え、周囲が山に囲まれていることから、冬の冷え込みが厳しいためか、関東地方の他の地域に比べて開花、満開の時期が 1 週間近く遅くなっている。また、この地域は地形の起伏が激しいため強羅駅から桜を見に訪れる際には長く急な階段を降りる必要がある。



【写真：宮城野早川堤の桜】

撮影：安藤 隼太郎

5. 大涌谷

文責：池田 鴻平

大涌谷は、箱根にある温泉の源泉地の一つである。大涌谷は蒸気井温泉と揚湯泉温泉と呼ばれる温泉を供給している。蒸気井温泉の温泉用水は、水井戸によりイタリ湿原に位置するイタリ池という場所に一度貯められる。貯められた水は、マイクロストレーナーという装置によって浮遊物質を除去される。その後水は、総延長 2961m、高低差 350.80 m の大涌谷山頂の 3 号貯水池と 2 号貯水池へ一度貯められ、造成装置で高温の蒸気と混ざり合い多種の成分を含んだ温泉に変わる。

造成装置は、大きく分けて 2 種類ありタンク型と塔型に分かれる。タンク型は、タンクに溜めた水に上から 高温の蒸気を吹き付け、温泉を生成する。塔型は、下から蒸気を入れ、上から水を入れ途中の隔板によって拡散された水と高温の蒸気が混ざり合い温泉が出来る。塔型の造成装置は、内側の側面に硫黄が付着してしまうため週に 1～3 回外側からついて硫黄を落とされる。また造成装置からの配管も、1 日 2 回竹を割って数十mつないだ掃除用具（払い棒）で、管内を掃除する。

揚湯泉温泉は、エアーリフト（地上から空気を送り、温泉を汲み上げるポンプ）と呼ばれるポンプで温泉を汲み上げ、不純物などを除去し、供給される。



【写真：黒たまごのオブジェ】

撮影：池田鴻平

6. 箱根湿生花園

文責：水谷 颯

箱根湿生花園は、小田原から直線距離 14km、箱根ロープウェイの終点である桃源台港から直線距離 3km ほどで、芦ノ湖の北にある。湿原をはじめとして川や湖沼などの水湿地に生育している植物を中心にした植物園だ。園内には低地から高山まで、日本の各地に点在している湿地帯の植物 200 種のほか、草原や林、高山植物 1100 種が集められ、その他、珍しい外国の山草も含め、約 1700 種の植物が四季折々に花を咲かせている。園路は低地から高山へ初期の湿原から発達した湿原へと順に植物を見てまわるようになっている。この植物園は日本で初めての湿生植物園として 1976（昭和 51）年に開園した。箱根の仙石原の自然や湿原環境保護などの目的から開園された。箱根湿生花園では季節に合わせた企画展が開催されており、その季節の植物を植物園の職員から詳しい説

明を聞くことができる。12月から3月は休館となっており、新年として開園する春にはザゼンソウ、フクジュソウ、ミズバショウ、マメザクラなど、夏にはニッコウキスゲ、ショウブ、オミナエシなど、秋にはホトトギス、アキチョウジ、ワレモコウなどが見られる。6月に一番花が多くそろい、およそ100種類の草花を見ることができる。



【写真：展示されていた地上の植物】

撮影：水谷 颯



【写真：園内に咲いていた桜】

撮影：水谷 颯

7. 箱根関所

文責：遠藤 壮一郎

箱根関所が設置されたのは江戸時代初期の1619年頃で、箱根関所は江戸時代第一の主要道路である東海道を監視するために設置された重要な関所である。徳川幕府は箱根の山そのものを、江戸を守る要害の地と考えていたため、幕府は関所を破られないように関所周辺の山々を要害山と定め、村人さえ登るのを禁止した。幕府は全国53ヶ所余りに関所を設けたが、その中でも中山道の木曾福島（長野県）、碓氷（群馬県）、東海道の新居（静岡県）、そして箱根（神奈川県）を重要な関所と位置付けた。

関所では特に「出女」（人質として江戸に移住させている大名の妻子が国許へ逃亡するのを防止）・「入鉄砲」（江戸を攻めるための鉄砲の流入の防止）を厳しく取り締まることになっていた。しかし箱根関所では「入鉄砲」の取締は行われてはおらず、「出女」を厳しく取り締まった関所としての特徴を持っている。江戸から関西方面へ向かう「出女」が関所を通るためには、江戸城にいる御留守居役という役人が発行した「関所交通手形」を必ず所持しなければならなかった。「関所交通手形」には、旅する女性の素性或旅の目的、行先をはじめ、髪型、顔・手足の特徴などが記載されていてこの記載内容と一致しなければ、関所を通ることができなかった。

箱根関所は、屏風山から続く急な崖と芦ノ湖の江の間を通る東海道を遮るようにたつ江戸口、京口の両御門や道を挟むように配置された関所の建物、周囲に張り巡らされた

木柵など立地を巧みに利用しながら 250 年間に亘り、防衛・治安維持の役割を果たしてきた。



【写真：箱根関所の江戸口御門】

撮影：遠藤 壮一郎

【写真：箱根関所】

撮影：遠藤 壮一郎

8. 彫刻の森美術館

文責：野口 琉也

彫刻の森美術館は自然と芸術の調和を目指して造られた日本最初の野外美術館である。最大の特徴は野外展示の多さで、七万平方キロメートルの広大な敷地には至る所にアート作品が展示され、時には空を見上げ、時にはアート作品の内部でその世界観を体感しながら鑑賞ができる美術館である。歩き、体験しながら見て回る美術館のため、子供から大人まで楽しむことができる。

これは藤隆伊道さんの作品で「16本の開店する曲がった棒」というものである。整列した集団が美しく、光と動きをテーマにした作品となっている。動くものを見る時、人は立ち止まるという習性を利用している。複雑な形をしている金属の棒がたがいにぶつからずに回り続けているのが不思議だった。

【写真：16本の回転する曲がった棒】

撮影：野口 琉也



手前にあるのは星型の迷路で、大人が入っても見えないくらい深く掘られていた。星型なのでゴールするのが意外に難しかった。奥にあるのはネットの森で、子供たちが中に入って遊ぶことができる造形作品となっている。遊びの中に自然に色彩や光の生み出す美しさや造形の面白さを発見することを目的としている。

このように、彫刻の森美術館は子供から大人まで、さらに外国人観光客までにも親しまれていた。



【星の庭とネットの森】

撮影：野口 琉也



【写真：彫刻の森美術館、入口】

撮影：野口 琉也

9. 旅行記

文責：犬島 伸遥

コロナ禍の自粛ムードも終わりを迎え、三年振りの春合宿が行われた。今回の合宿では、自然班と文化班という2つの班に分けて見学をした。そのため、普段は一日目と二日目で役割を分担する旅行記を自分一人で書かなければならず、負担がかなり重い。だが、今回の合宿はとても密度が高かったので、書く内容には困らないはずだ。ということで、前置きでこれ以上文字数を稼ぐ必要もないので、早速本題に入る。初日は8時に新宿駅で集合し、小田急のロマンスカーで箱根に向かった。ちなみに、今回の合宿では箱根フリーパスという超有能クーポンを利用した。このクーポンのお陰で、現地での交通費は全て無料で移動することができた。有能すぎ。

ロマンスカーには初めて乗ったが、席は広く、座り心地も良くて快適だった。車内には自販機があったので、「箱根の森から」といういかにも箱根っぽいお茶を購入した。味は普通のお茶と大して変わらなかった。

【“超有能”箱根フリーパス】

撮影：犬島 伸遥



10時を過ぎたあたりで箱根湯本に到着した。駅は人で溢れかえっていて、移動するのが大変だった。少し前までは考えられない光景だ。日本人だけでなく、外国人の姿も目立った。半分以上は外国人が占めている と言っても過言ではない。駅を出てツアー客の外国人でごった返すロータリーを抜けると、すぐ目の前に絶景が広がり、早速箱根に今自分がいることを実感させてくれた。



【人で溢れかえる箱根湯本】

撮影：犬島 伸遥



【箱根湯本駅側から見た早川】

撮影：犬島 伸遥

最初の目的地は本間寄木美術館だ。早川に沿うように 15分ほど歩くと、ごく普通の一軒家のようなところに到着した。一見美術館には見えないが、中には一階に寄木細工のショップ、二階に展示がある。どうやら職人さんの家をそのまま美術館にしているらしい。展示ではスペイン女王が座った椅子やイギリス大使に贈った棚などが飾られていて、想像より見応えがあった。一階のショップでは寄木細工のグッズが売られていた。伝統工芸品ということもあって全体的に値が張る物が多かった。私は手頃な価格のコースターを 1000円ほどで購入した。この旅行記の執筆中も使っているお気に入りだ。



【寄木細工のコースター】

撮影：犬島 伸遥



【天ぷらそば】

撮影：犬島 伸遥

そのあとは箱根湯本駅に戻り。一旦解散して各自昼食をした。私は同 学年の二人と一緒に駅を出てすぐのところにあった蕎麦屋に入った。観 光客向けの店が並ぶ中では珍しく地元の食堂といった雰囲気のお店で、ロ コミは 2 件しかないうえ星 2.0 だったので少し不安だったが、料理はすぐに出てきたし、味もそれなりに美味しかった。せっかくなので星 5 の ロコミを投稿して星 3.0 に上げておいた。昼食を終えてまた箱根湯本の駅で再集合し、箱根登山鉄道に乗って彫刻 の森へ向かった。

箱根登山鉄道はスイッチバックという列車の進行方向を転換しながら坂 を登っていく方式を使って電車で山を登っていく。彫刻の森まではこのス イッチバックを 3 回行った。スイッチバックのたびに電車を停車させ、運 転手が反対側の車両に移動する。とても忙しそうだった。車窓から見える 景色は絶景で、車内で日本語と英語のガイド音声も流れていた。途中で前 に通ったトンネルを遥か下に見ることもでき、どのくらい登ったのかを実 感できた。



【車窓からの景色】

撮影：犬島 伸遥

40 分ほどして彫刻の森に着いた。彫刻の森美術館には非常に広い敷地 内に散りばめられるようにオブジェが置かれている。開放感があって歩 いているだけでも楽しい。客層は子連れのファミリー客とヨーロッパ系 の外国人が多かった。とても大きい美術館なので限られた時間でどう回るか悩む。とりあえず足湯があったので足湯に向かって歩いた。登山鉄 道はとても混んでいる上、結構揺れる。その中を 40 分も立ったままでいたので、足がとても疲れていた。その足を癒そうと思ったのだ。30 分ほど園内を歩いて足湯にたどり着いた。タオルを持っていなかったのでお土産も兼ねて 100 円という良心的価格のタオルを購入して足湯 に入った。

【足湯で休む筆者】

撮影：犬島 伸遥

足湯で 15 分ほどくつろいだ後、集合時間が迫っていたので急いで入り口に戻った。が、そこには顧問以外誰もいなかった。敷地が広すぎるせいもあってか、部員全員が集合時間に遅れるという異例の事態となった。



最後の目的地は大涌谷。強羅まで登山鉄道で行き、そこでケーブルカーに乗り換えた。10 分ほど乗車して早雲山でロープウェイに乗り換え、大涌谷へと向かった。ロープウェイは 10 人乗りのスキーのリフトのようなもので、全面が窓になっていて素晴らしい景色を楽しめた。



【ロープウェイからの景色】

撮影：犬島 伸遥

大涌谷に着くとすぐに硫黄の匂いがした。外国人観光客で非常に込み合っていて、温泉卵には長い行列ができていた。大涌谷は景色を売りにした景勝地といった感じのところで、温泉卵を食べる以外することがないので暇を持て余した。そこでジオミュージ

アムに入ろうとしたのだが、16 時が閉館時間になっており、ちょうど閉館になってしまいいれなかった。



【煙が立ち込める大涌谷】

撮影：犬島 伸遥



【箱根高原ホテル】

撮影：犬島 伸遥

大涌谷の景色をバックに集合写真を撮った後、ロープウェイに乗って 芦ノ湖を見ながらホテルへ向かった。駅から 10 分ほど歩いてホテルに着いた。箱根高原“ホテル”という名 前の割には合宿所のような外見だが、内装は普通のホテルのような感じになっていて、一般客も宿泊していた。温泉も付いていたので夕食後に ゆっくりと温泉に浸かり、今日の疲れを癒やした。一日目の活動内容は 以上である。

<参考資料>

箱根ナビ <https://www.hakonenavi.jp/hakone-tozan/>

箱根湿生花園 <https://hakone-shisseikaen.com/>

箱根町観光協会 <https://www.hakone.or.jp/552>

箱根関所資料館のパンフレット

http://www.hakoneonsen.com/hot_spring.html

https://www.hakonesekisyo.jp/db/data_inc/inc_frame/fr_data_01_02.html

<https://www.hakonesekisyo.jp/index.html>

<https://www.hakone-oam.or.jp/>

<https://www.hgp.co.jp/hakone/specialcontents/hakone-oam/>

第三章

横浜はじめて物語 (2022年11月1日)



1. 日本丸と横浜開港の歴史

文責：塚崎 瑛登

① 幕末の横浜とペリー

江戸時代の横浜は海側に幕領、内陸部に旗本領が多く点在する人口およそ 10 万人の小さな村だった。そんな中、1853 年にペリーが浦賀に来航し、江戸幕府に対して条約の締結を求めた。そこで幕府は「どんな条約を締結するかどうかは来年までに決定するから来年また来てほしい」などと言い、ペリー一行を香港に一旦退去させた。ペリーは翌年、予定通りに小柴沖(現在の横浜市金沢区)に来航した。

② ハリスと横浜開港

ペリーが幕府と日米和親条約を結んで 2 年程たった 1858 年 8 月 21 日、ハリスが下田に来航。当時の大老、井伊直弼は天皇の許可を得ずにハリスと日米修好通商条約を結んだため、朝廷から反感を買った。この条約で開港した港は箱館・新潟・長崎・神奈川(現在の横浜)、兵庫(現在の神戸)だった。

③ 日本丸(初代)とアジア・太平洋戦争

1930 年に竣工した日本丸は同年にミクロネシアのポナペ島へ初の遠洋航海を行った。その後は、太平洋を中心に訓練航海に従事していた。しかし、アジア・太平洋戦争中は大阪湾や瀬戸内海で石炭などの輸送任務に従事していた。

④ 戦後の日本丸(初代)と朝鮮戦争

戦後は本土ではない場所にいた日本人の住民や兵士を引き揚げた。また、朝鮮戦争では米軍や韓国人避難民の輸送を行った。

⑤ 日本丸(二代目)

1984 年に竣工した日本丸(2 代目)は初代と比べて帆走性能が格段に上がっている。

⑥ 日本丸と氷川丸の違い

戦前から戦時中、日本丸と同じような役割を果たした船に氷川丸がありますが、氷川丸と日本丸では何が違うのかいくつか挙げてみたいと思う。

(1) エンジンが稼働するかどうか

…日本丸も氷川丸も稼働しない。

(2) スクリューがあるかどうか

…日本丸はあるが、氷川丸にはない。

(3) 船舶検査証明書が発行されているかどうか

…日本丸は発行されているが、氷川丸は発行されていない。



【写真：氷川丸(左) 日本丸(右)】

撮影：塚崎 瑛登

2. 氷川丸

文責：長谷川 仁

① 歴史

第一次世界大戦後、欧米では大型客船の建造競争が激化し、それに対抗できる優秀な船の建造は日本でも急務であった。氷川丸はそのような中で造られた船であり、当時の日本船としては破格の費用をかけて建造された。氷川丸を造ったのは横浜船渠（現在の三菱重工業株式会社横浜製作所）で、当時まだ客船建造の経験はなかったものの、資材・技術・設備などを拡大して氷川丸を完成させた。

太平洋戦争が始まると氷川丸は海軍に徴用され、特設海軍病院船となり、終戦までに約3万人もの傷病兵を収容、治療し、日本へと送り届けた。1953年、アメリカと日本の交換留学制度「フルブライトプログラム」をきっかけに、氷川丸は留学生たちを運ぶ船として11年ぶりにシアトル航路に復帰。また、宝塚歌劇団が戦後初の北米公演時に乗船するなど、日米の交流の架け橋としての役割を果たした。

② 内装

(1) 一等児童室

一等船客専用の遊戯室で、ここにはスチュワーデスと呼ばれる子どもの世話をする女性乗組員がいて託児も行っていた。

(2) 一等食堂

一等船客専用のダイニングサロン。マルク・シモン設計の主要な部屋の一つで、特に柱形の左右の装飾や扉のガラス文様は典型的かつ上質なアール・デコとしてそのままの姿で残されている。(※アール・デコ：ヨーロッパおよびアメリカ合衆国を中心に 1910 年代半ばから 1930 年代にかけて流行、発展した装飾の一傾向)

(3) 一等読書室

同じくマルク・シモンによる設計で、柱形と中央の天井灯は竣工当時のまま残っている。

(4) 一等客室

一等客室には冷温水の出る洗面台やスプリングのついたベッド、換気・空調設備も船客が自由に調節できる、当時としては最新式のもが導入されていた。

(5) 一等特別室

一等特別室は、チャップリンや秩父宮両殿下を始め、各国の貴賓や著名人が利用したスイートルーム。この部屋は三代川島甚兵衛のデザインとされ、テーブルと椅子を除き、壁紙など竣工当時の姿のまま残されている。

(6) 船長室

船長専用の居室兼寝室。何か起こった時に素早く対応できるように操舵室から最も近いところにある。また、船長室と操舵室は「伝声管」という連絡用のパイプで繋がっていて、いつでも操舵室の航海士が船長に連絡をとれる仕組みになっていた。

(7) 機関室

氷川丸のエンジンはデンマークの B&W 社で製造されたダブルアクティング・ディーゼルエンジン（1 回の爆発で 2 つのピストンが動く事で、通常のレシプロ機関の倍の働きが出来る）である。8 つの気筒で構成されるディーゼルエンジンが左右に一基ずつ設置されている。これは竣工当時最新のエンジンで、その当時のまま残されている貴重な産業遺産でもある。



【写真：氷川丸の外見】

撮影：長谷川 仁



【写真：操舵室】

撮影：長谷川 仁

3. 日本最古の公園 横浜公園

文責：水谷 颯

横浜は日本で初めて公園が作られた場所である。1866年に発生した横浜の大火により、港のおよそ3分の1を焼失した火災を受け、「横浜居留地改造及競馬場墓地等約書」が結ばれた。最初に、居留外国人専用の公園として1870年に山手公園が開園した。その後、1875年にイギリスの土木技師であるリチャード・ブラントンによって設計された、日本人にも開放された公園が横浜公園である。公園の広さは63800㎡で、東京ドーム約1.3個分の広さとなっている。公園内にはプロ野球などに使用されている横浜スタジアムや日本庭園「彼我庭園」などがある。横浜公園は、園域全体が横浜市の管理となった明治末期、関東大震災からの復興を遂げた昭和初期、そして終戦後の接収を経て、現在の横浜スタジアムが建設された昭和50年代と、三度にわたる大きな改造を経て現在に至っている。現在も園内には、震災復興時の遺産として、公園中央の噴水池や縦溝入りのスクラッチタイルを貼った外周の腰壁、震災時に横浜公園に避難した市民による謝恩植樹記念碑などが現存しており、2007年2月には、日本大通り・山下公園とあわせて国の登録記念物（名勝地）となった。



【写真：園内にある石碑】

撮影：水谷 颯



【写真：園内にある横浜公園】

撮影：水谷 颯

4. 神奈川近代文学館

文責：坂本 佳翼

神奈川近代文学館は、港の見える丘公園の一角にある、神奈川県ゆかりの文学者の直筆原稿や創作ノート、初版本などを収集展示している日本近代文学専門の博物館である。また、日本近代文学の振興及び普及に努めており、130万冊を超える蔵書を持つ図書館でもある。

展示室内は撮影禁止だったため外観の写真のみ掲載する。



【写真：神奈川近代文学館】

撮影：坂本 佳翼

立地は元町・中華街駅から徒歩 10 分とあまり悪くないが、港の見える丘公園の端にあることもあり展示室にはご老人が数名いるくらいで静かだった。ただし今回は本館の閲覧室の様子は見ていないのでそこでは大学生が論文作成などをしていたのかもしれない。展示は、第一展示室で常設展の「神奈川の風光と文学」、第二・第三展示室では企画展の「没後 50 年川端康成展虹をつむぐ人」があった。いずれも神奈川県ゆかりの作家について作品とそのモデルとなった都市についての解説があった。

横浜は開港後異文化の交錯する活気街として栄え、そのエキゾチシズムから多くの文学作品の舞台になっている。大佛次郎は「霧笛」「幻燈」でそれぞれ外国人居留地を取り上げている。中島敦「かめれおん日記」は、自身の横浜高等女学校の教員生活を元にした作品で外国人墓地なども通じて異国情緒豊かな雰囲気表現している。三島由紀夫の「午後の曳航」は横浜の港、海を描いている。また、横浜以外にも神奈川県のみならずさまざまな場所についても展示があった。川崎は岡本かの子「川」、高見順の詩「電車の窓の外は」。湯河原は芥川龍之介の「トロッコ」、剣崎は立原正秋「剣ヶ崎」、鎌倉の夏目漱石「門」「こころ」などで神奈川県に縁があるようだ。

次に特別展の川端康成についてだが、神奈川に関係ある話というより、近代文学者を取り上げて解説するという趣旨の展示だったので簡単にだけ書こうと思う。「伊豆の

踊子」などで知られる川端康成は新感覚派の代表的作家である。新感覚派とはありのままを描こうとするリアリズムの打破を図り、感覚的な新しい美を追求する作家のグループのことで、「雪国」では秋田県の湯沢を、自然の美しさが人の心を一体となり季節とともに流れていくということに影響を受けて舞台にした。また、当時は高価だったカメラを旅行に持って行って撮るほどに写真家でもあったようだ。

解説文だけでなく直筆原稿の複製などもあり、文学を知る一步になることができると思う。興味がある人も相人も楽しめると思うので横浜の中華街付近へ行った際にはついでに訪れてみてはいかがだろうか。

5. 郵船歴史博物館

文責：榎本 眞鑑

郵船歴史博物館は日本の海運業をリードした日本郵船が日本の海運産業の歴史資料を保存・公開し、海事思想の普及を目的として営業している。建物は1936年に建てられた横浜郵船ビルを改装したものである。

<実際に見学して>

主に展示は開国から現在まで辿っていくような形式だった。最初の展示は、開国して日本では欧米諸国に追いつくために郵便や荷物、人を運ぶための船は国の発展に必要不可欠であるということから始まり、日本郵船誕生の話となり、豪華客船の発展、戦争による壊滅からの復興といった形式だった。この中から興味を持った二つの展示を紹介する。

① 豪華客船時代の到来

第一次世界大戦後に全世界が不況に陥って世界恐慌となった。その時、船は貿易だけでなく人々の交流に重要な役割を果たした。世界各国は豪華客船の建造が進むようになった。日本でも浅間丸(左写真)をはじめ建造が進んだ。また、浅間丸は船体設備だけでなくサービスも世界トップを目指した船だった。具体的には、室内装飾は欧米の古典的様式だったり、住宅一戸と同じ間取りをもった部屋だったりと様々な様式を取り入れていた。また、食事はフランス料理のフルコースでテニスコートやプールといった娯楽施設もあり 『太平洋の女王』と呼ばれていた。

② 戦争からの復興

やがて第二次世界大戦が始まり、太平洋戦争も始まった。太平洋戦争では今まで建造した豪華客船が軍用に改造され、たくさんの乗組員も国に徴用され多くの人命と船を失った。戦争に敗れた日本は独立国として認められず船を動かすのにもGHQの許可が必要だったが、1951年にサンフランシスコ講和条約で日本の独立が認められ本格的な復興が始まった。そして時は流れて高度経済成長期が訪れ貿易が盛んに行われるようになり、

燃料や鉄鉱石などの原料を安く大量に運べる専用船が登場し加工貿易の発展を支えた。

このように日本郵船歴史博物館では学校で習う歴史を違う角度から学ぶことができ興味深かった。

【写真：浅間丸】

撮影：榎本 眞鑑



6. 旧横浜港駅プラットホーム

文責：水谷 颯

生糸の輸出最盛期に、横浜駅（現在の桜木町駅）と赤レンガ倉庫の新港埠頭を結ぶ路線が明治43年に完成し、44年に開業した横浜港駅のプラットホーム。当初は貨物輸送だけだったが、旅客需要が多くなったため新港埠頭の脇に旅客用のプラットホームが築かれ、大正9年に横浜港駅として新駅が開業した。日本郵船と東洋汽船（のちに日本郵船に合併）のサンフランシスコ航路出航日に合わせて東京駅からの船車連絡列車も運行されていた（東京発12:30→横浜港着13:15）。船車連絡列車は、ウラジオストクへの外洋航路と連絡するため明治45年、東京駅～金ヶ崎駅（現在の敦賀港）間で運転されたのが始まりとされている。太平洋戦争が勃発する直前、昭和16年に出発した日本郵船のホノルル行きへの連絡が戦前に横浜港駅へと運転された最後の船車連絡列車だったとされている。その後、昭和61年に臨港線が廃止になったため、プラットホームも廃止された。

【写真：旧横浜駅プラットホーム】

撮影：水谷 颯



7. シルク博物館

文責：野口 琉也

シルク博物館は横浜市大榎橋近くに建つ、シルクセンタービルの二階にある。館内は一階と二階で構成されており、一階では飼育している蚕が餌を食べたり、繭を作ったり

しているところが観察できる。また、繭から糸を作り出す糸繰り体験や、糸から布を織る機織り体験もできる。そのほか一階、二階を通して、横浜とシルクに関する歴史や着物などの和装を中心とした絹製品、古代から現代までの復元時代衣装などの利用を展示しており、子どもから大人まで幅広く楽しめる。博物館内では上の写真のように様々な繭が展示されていた。蚕が作る繭には俵型、楕円形、球形、紡錘形などがあり、色は白以外にも黄色、紅色、金黄色、笹色、肉黄色などのあまり知られていないものもあった。特に、2頭以上の蚕が一緒に作るやや大きめの繭には驚いた。

また、長野合宿でも見学した自動繰糸機が展示されていた。長野合宿の際に見た自動繰糸機は実際に稼働していたが、このシルク博物館で見たものは止まっていたため、細かい仕組みなども見ることができた。この機械で生糸づくりの細かな作業が機械化され作業従事者が削減された。昭和30年ごろから生糸織度感知器や自動接着器が実用化され、このような機械が作られた。



【写真：自動繰糸機】

撮影：野口 琉也

【写真：様々な蚕】

撮影：野口 琉也

8. エリスマン邸

文責：雨谷 彰悟

エリスマン邸は、スイス人貿易商のフリッツ・エリスマン氏の邸宅であった。設計は、「近代建築の父」と言われたチェコ人の建築家であるアントニオン・レーモンドがした物であり、A・レーモンドの近代合理主義精神に基づく作風を確立するに至る過程の一端と言える作品になっている。現在は元町公園の旧山手居留地 81 番地に再現された物であり、厨房は喫茶店、地下ホールは貸しスペースとして利用されている。



【写真：エリスマン邸】

撮影：雨谷 彰悟

9. 横浜中華街

文責：犬島 伸遥

横浜中華街は、日本最大かつ東アジア最大の中華街で、500 店以上もの店舗があり、150 年以上の歴史を持つ街だ。中華街の起源は江戸時代に横浜が開港され、外国人居留地として街が形成されたのが始まりとなっている。当時は中国人だけでなく、欧米人も来住していた。

その後、1923 年に関東大震災が起これ、この地区は大打撃を受けて瓦礫と化した。この時に欧米人の多くは帰国したため、中国人中心の街へと変わっていった。戦後にはチャイナタウン復興計画が策定され、「中華街」と書かれた牌楼門が中華街大通りの入り口に建てられたことでこの街は「中華街」と呼ばれるようになり、現在に至る。

10. YOKOHAMA AIR CABIN

文責：水谷 颯

YOKOHAMA AIR CABIN とは、2021 年 4 月に完成した世界最新の都市型循環式ロープウェイで、日本で唯一の常設型の都市索道(都市型ロープウェイ)でもある。YOKOHAMA AIR CABIN は、JR 桜木町駅から横浜ワールドポーターズにある運河パーク駅までの 600m を約 6 分で結んでいる。世界的に有名な照明デザイナーが駅舎、キャビンなどのライトア

ップを設計していて、近未来の建物になっている。料金は片道大人 1000 円、往復大人 1800 円(子供料金は半額)で、コスモワールドの大観覧車セット券も販売されている(セット券は片道チケットとのセットのみで販売)。ロープウェイからはコスモワールドの大観覧車やみなとみらい周辺を見ることができる。ロープウェイの下には歩道があり、新港埠頭から船を使って輸出や輸入をしていた時に使っていた鉄道のレールも見ることができる。最高速度時速 9km で最高 40m まで登るため、新港埠頭の道路を挟んで反対側にある赤レンガ倉庫やその周辺の関連施設もゆっくり見ることができる。



【写真：桜木町駅の乗り場】

撮影：水谷 颯



【写真：汽公道にある線路】

撮影：水谷 颯

11. 横浜発祥

アイスクリーム発祥の地(太陽の母子像) 文責：坂本 佳翼

太陽の母子像は日本アイスクリーム協会がアイスクリーム発祥記念として寄贈されたもので、関内駅近くの馬車道に置かれている。「太陽の母子 製作者 本郷 新 横浜沿革史に『明治 2 年 6 月馬車道通常磐町 5 丁目に於いて町田房造なるもの氷水店を開業す』と誌されています。日本のアイスクリームの誕生です。私達はこれを記念し、このゆかりの地に、モニュメントを建て寄贈いたします。昭和 51 年 11 月 3 日 社団 日本アイスクリーム協会 法人 同 神奈川支部」(碑文)

日本におけるアイスクリームの起源は、1860 年に日米修好通商条約批准のために幕府がアメリカに派遣した使節団に同行した町田房蔵が、迎船フィラデルフィア号でアイスクリームを食べて美味しさに感銘を受け、横浜馬車道で氷水店を開いたことから始まる。ただ当時のアイスクリームは高価であり、市

【写真：太陽の母子碑】

撮影：坂本 佳翼



民の食べ物というより外国人など富裕層が食べるものだったようだ。ただし肝心の像の写真は暗くてぼやけていたので申し訳ないが像の下の碑文だけで御勘弁いただきたい。

クリーニング発祥の地 文責：坂本 佳翼

クリーニング発祥の地は元町・中華街駅から徒歩 5 分のフランス山、谷戸坂にある。この碑でいうクリーニングは西洋洗濯を指し、それ以前の和服の選択とは異なるものだった。「安政六年神奈川宿の人青木屋忠七氏西洋洗濯業を横浜本町一丁目現在の五丁目にて始めついで岡澤直次郎氏横浜元町に清水屋を開業 慶応三年脇澤金次郎氏これを継承し近代企業化の基礎を成した この間フランス人ドンバル氏斯業の技術指導および普及発展に貢献された これら業祖の偉業を顕彰しここにクリーニング業発祥の地記念碑を建立する」(碑文)

横浜開港の折アメリカの乗務員の服を日本古来の灰汁を使った洗濯で洗うと逆に汚れて帰ってきたことから、西洋式洗濯の重要性が認識され、横浜でクリーニング業が発達した。それを記念するのがこの碑である。

【写真：クリーニング発祥の地】

撮影：坂本 佳翼



横浜ボウリング発祥の地 文責：坂本 佳翼

横浜ボウリング発祥の地は元町・中華街駅から徒歩 約 50m の港の見える丘公園にある。「1864 年(元治元年)横浜外国人居留地内に長崎に次ぎボウリングサロンを開場した記録がある。協会発足 30 年を記念し、ここに横浜ボウリング発祥の碑を建立する。平成 7 年 10 月 26 日神奈川県ボウリング場協会(他 4 団体)」(碑文)

【写真：横浜ボウリング発祥の地】

撮影：坂本 佳翼



ここに書いてあるように横浜のボウリング発祥の地であって日本のボウリング発祥の地ではない。日本で初めてボウリング場が出来たのは1861年で、場所は碑文の通り長崎である。港の見える丘公園は元治元年以来フランス政府の借地でフランス領事館が置かれていたこともあり、この地が横浜ボウリング発祥の地とされたのだと思う。

機械製氷発祥の地 文責：遠藤 壮一郎

明治12年にイギリス人アルバート・ウォートレスが谷戸坂近くにジャパン・アイス・カンパニーを設立し、エーテル式製氷機により日本で初めて機械による製氷をおこなうようになった。その後、この工場の経営権は2年後の明治14年にオランダ人ストルネブリックに移り、名称も横浜アイス・ワークスと変わった。その後、製氷所は帝国冷蔵に買収され、関東大震災で被害を受けた後、神奈川日冷社の工場として平成11年まで操業していた。その後工場の跡地は山手迎賓館に生まれ変わりその脇に記念碑が設置されている。



【写真：機械製氷発祥の碑】

撮影：遠藤 壮一郎



近代街路樹発祥の地 文責：遠藤 壮一郎

古代にも平城京でタチバナとヤナギの並木が設けられてはいるが、近代的な街路樹としては横浜、馬車道が最初である。1867年に開港場横浜の馬車道では、各々の商店が競って柳と松を連植した。これが日本での近代的な街路樹の先駆となった。馬車道に植えられた当初の街路樹は、1923年の関東大震災で消失し、現在の街路樹は1977年以降に植栽されたアキニレに代わっている。

【写真：近代街路樹発祥の地】 撮影：遠藤 壮一郎

銀行業務発祥の地 文責：遠藤 壮一郎

香港上海銀行はと日本で最初に銀行業務を始めた銀行である。この銀行は1866年に日本初の支店となる横浜支店を現在では産業貿易センターが建つ居留地62番に開設し、貿易金融業務の提供を始めた。その後、横浜支店は山下町2番地に移転して貿易金融業務の提供にとどまらず、日本政府に対して銀行業や通貨制度に関する助言も行なうようになった。また、香港上海銀行は現在日本で営業を行なっている最も古い銀行である。



【写真：銀行業務発祥の碑】
撮影：遠藤 壮一郎



【写真：西洋理髪発祥の地】
撮影：遠藤 壮一郎

西洋理髪発祥の地 文責：遠藤 壮一郎

1859年横浜港開港後、横浜に来た小倉虎吉らの結髪師は外国船に出入りしていた乗務員の顔剃りをしていたが、日本でも散髪が流行することを感じ、船内の西洋理髪師からその技術を習得していった。そして1869年に小倉虎吉が日本初の西洋理髪床を開業した。

鉄道発祥の地 文責：新井 友翔

この鉄道発祥の地の碑は桜木町駅から100mほど所にひっそりと「鉄道創業の碑」が建っている。その所以は明治5年に横浜～新橋間で開業したことにある。そして2022年10月14日、日本の鉄道は150周年を迎えた。この記念碑は1967年10月16日にできたものである。記念碑は銅で出来ており年季が入っている。日本の鉄道にはイギリスの技術が活躍した。エドモンド・モレルが初代鉄道兼電信建築師長に就任し建設を指揮した。昭和37年にはその偉業を称えて鉄道記念物に指定された。また鉄道発祥の地で知られている品川や横浜だが実は長崎が日本初である。1865年にトーマス・グラバーが商談に持ち込み約400mの距離を、人を乗せて走らせている。



【写真：鉄道発祥記念碑】
撮影：新井 友翔

電信創業の地 文責：水谷 颯

神奈川県横浜市中区の日本大通り沿いに建つ横浜地方検察庁玄関脇に設置されているのが電信創業の地の碑である。1869年（明治2年）、横浜裁判所と東京築地運上所の間に設けられた「傳信機役所」を結ぶ32kmの電信線架設工事が開始され、1870年（明治3年）に業務を開始した。これが日本の公衆電気電信の発祥となった。電信の価格は横浜～東京間で「かな1文字＝銀1分（1厘6毛）、配達は1里＝銀7匁2分」で、欧文の場合には「20字音信＝金1歩（25銭）、住所氏名は6字以内なら無料、配達は2里まで無料」だった。明治初期にはそば1杯が5厘～1銭なので、仮名を4文字打つだけでそば1杯分の値段ということになる。また、東京側（東京築地運上所）も勝鬨橋に近いところに同じような記念碑が立っている。



【写真：電信創業の地の記念碑】

撮影：水谷 颯

日本西洋歯科医学発祥の地 文責：水谷 颯

慶応元年（1865年9月）に、Dr. イーストレーキが横浜に来日し、外国人居留地108番地で歯科医院を開業し、日本における西洋流の歯科医学は、横浜でDr. イーストレーキによって始まった。そのため、彼は日本の“近代歯科の父”と呼ばれている。外国人歯科医師は、日本人を診療助手に雇い、後に彼らは歯科技術医学を学んで歯科医師になった。横浜は、日本の歯科医療が西洋流の近代歯科医学に変わった発祥の地である。横浜市保健センターの前には、3つの関連する石碑や説明板が設置されている。



【写真：横浜市保健センター前の3つの石碑】

撮影：水谷 颯

日本洋裁業発祥の地 文責：遠藤 壮一郎

1863年、イギリス人のミセス・ヒアソンが横浜居留地 97 番地にドレスメーカーを開店したのが横浜の洋裁業の始まりである。その頃から在留西洋夫人は自家裁縫のため、日本人足袋職人・和服仕立て職人を人仕事として雇い、これにより婦人洋服仕立て職人が育った。



【写真：ミセス・ヒアソンの像】

撮影：遠藤 壮一郎

12. 旅行記

文責：市川 洸太

(注) 今回の巡検は二班に分かれて行いました。そのうち、この旅行記は日本郵船氷川丸や横浜開港資料館などの、「横浜の開港」に関連する施設を見学した班のものです。

当初は七月に実施される予定だった本巡検。諸々の事情により延期になったものの、四か月経った今回、時期をずらすことで催行することができた。また、今回の巡検からは高校一年生に一人、中学二年生にも一人の新人部員を迎え、さらに、高一が中心となった新体制での活動となった。この日は、曇天で少し肌寒いくらいの、写真映えは絶望的にしないが、歩くのにはちょうどいい気候。午前 10 時に桜木町駅に集合した地理部の面々は二班に分かれ、それぞれの目的地へ向かっていざ出発！まず、私たち「横浜の開港」班は、横浜西洋館（エリスマン邸）に向かうためにみなとみらい線の馬車道駅へ。そこから二駅、終点の元町・中華街駅で降車し、商店街や公園の中を歩くこと十五分。公園にたたずむ異国情緒漂う建物、これがエリスマン邸のようだ（余談だが、駅から公園への道中たくさんネコを見かけ、かなり最高だった）。

【写真：エリスマン邸】

撮影：市川 洸太

スイス人貿易商の F・エリスマンが 1926 年に建設した邸宅。白を基調としており、明るい印象を受ける。



この周辺の地域は、横浜の開港によって日本で生活するようになった居留外国人の住宅地として開放されていたそうだ。住宅以外にも、学校や病院、墓地までもが整備されていたといい、独自の文化も形成されていたようだ。木と紙でできている家に住んでいた当時の日本人は、この光景を見てどう感じたのだろうか。暖炉の煙突から出る煙を見て、火事だと勘違いしていたりしたら面白い。

【写真：エリスマン邸で見つけたレトロな電話】

撮影：市川 洸太



実際にスマホなどに電話をかけることもできる。タコの顔みたい。

一通りエリスマン邸を見終わり、少し早めの昼食へ。中華街方面に戻り、昼ご飯休憩のために一時解散。正直、中華街で食べ歩きするために横浜まで来たといっても過言ではないくらい楽しみ。中華街のシンボルでもある大きな門をくぐると、先ほどまでとはまるで違った雰囲気漂う。吊り下げられた赤い提灯…店先に並ぶ中華料理の数々…そして、どこか怪しい日本語の売り文句…日本の商店街のような小綺麗さはないが、溢れんばかりの商いの魂を感じる。この日は学校の創立記念日で世間一般は平日だったが、店によっては行列ができるほど賑わっていた。そして中華街に入って一分もしないうちにおいしいそうな食べ物を見つけ、すかさず購入。

どうやらこれは、「大鶏排（ダージーパイ）」という、鶏肉を揚げたものようだ。衣がザクザクで、スパイスの辛みが程よい。身近なところで例えると、コンビニのホットスナックの〇〇チキみたいなのやつに近い。ただ、あれらよりも衣の食感がしっかりしていて、味付けも香辛料が効いており、食べ応えがある。一つ目から大当たりだ。その後もおいしいそうなものを探して歩いていると、「北京ダック巻き」なるものを発見。北京ダックって名前は聞いたことあるけど実際食べたことないなあと思い、実食してみることに。タレが甘めだが、野菜も入っているためあっさり食べられる。小腹がすいたときにちょうどいいかも。

そして最後に食べたのは、ド定番の肉まん。こういうのでいいんだよ、こういうので。

なんだかんだ満腹になり時間もちょうどよかったため、予め決めておいた集合場所に集まり、中華街を後にした。そして次に向かうのは、「日本郵船氷川丸」。



【写真：肉まん年北京ダック巻き】

撮影：市川 洗太



【写真：日本郵船氷川丸】

撮影：市川 洗太

鎖でつながれている姿が封印されているみたいでかっこよくない？と言ったら、厨二かよ…と返されてしまった。

この船は、戦前の1930年に横浜—シアトル間を航行するための貨客船として建造され、かの喜劇王であるチャーリー・チャップリンも乗船したという超スゴイ船。しかし、第二次世界大戦のあおりを受け、貨客船としての運航は中止に。その後、海軍特別病院船として戦地で負傷した日本軍の兵士を日本に輸送し続け、その途中三度にわたって機雷という水中版地雷に触れることもあったものの、沈没は免れた（同時期に造られた他の大型船は戦争によって全て沈没している）。戦後は再びシアトル航路に復帰し、1960年に一線を退くまで運行を続けたというレジェンド級の超大御所船。そんな氷川丸だが、

現在は山下公園の棧橋に横付けされ、当時の船内の様子を今に伝えるために一般公開されている。そして、気になる船内はというと…

超豪華！

それもそのはず、横浜—シアトル間の片道運賃は一等で 500 円。当時は 1000 円で家が建つような時代だったため、この船に乗れるのはごく限られた富裕層だけだったようだ。ちなみに上の写真の左側は一等食堂で、右側は一等客室。隅々まで贅を凝らした特別な造りになっている。また、客室には一等、二等、三等があり、一等、二等と三等の間は自由に行き来ができなかったそうだ。だが、三等とはいっても片道 110～140 円ほどのお金が必要だったため、決して安い旅とは言えなさそうだ。ほかにも、操舵室や機関室などを見学し、当時の海外旅行の様子がわかったところで、氷川丸を後にした。



【写真：氷川丸の船内】

撮影：市川 洸太

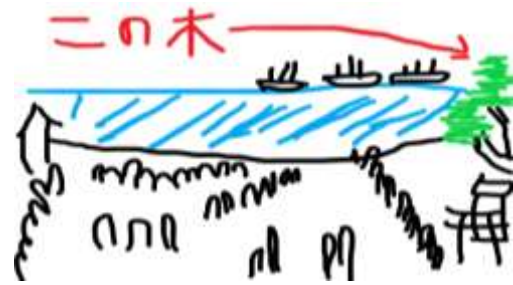
そして、次の目的地は「シルク博物館」。夏合宿で訪れた長野の岡谷は製糸業が盛んだったが、それに関連して、明治の日本の主要な輸出品であった絹のことを深く知るべく、この博物館に向かったまず興味を惹かれたのは、様々な品種のカイコの展示だ。一口にカイコといっても、種類によってカイコ自体の見た目や、繭の色などが大きく異なっていた。また、二階の展示では、絹を利用した衣服を古代のものから近代のものまで見ることができ、カイコは人類の歴史とともにあるのだとわかった。シルク博物館を見学した後は、「開港資料館」に向かった。

ここではその名の通り、横浜の開港についての展示がされているのだが、驚いたのが、この資料館の中庭に生えている玉楠の木（たまぐすのき）というクスノキ。一見何の変哲もない木のように見えるが、実はこの木、黒船が来航し、ペリーが浦賀に上陸した様子を描いた有名な絵に描かれている木なのだ！権利等の問題が面倒くさそうなので、ここにその画像を載せることはしないが、「黒船来航」とネットで調べると一番上に出てくる、あの絵にしっかりと写っている！



【写真：玉楠の木】

撮影：市川 洸太



「黒船来航（模写）」 市川洸太（2006-）

つまりこの木は、日本の歴史における大きな転換点の生き証人ならぬ、生き証木ともいえる貴重な存在だったのだ。テレビでしか見たことのない有名に直接会ったような感動を受けながら、開港資料館に入る。ここで驚いたのは、元々小さな村しかなかった横浜が、開港とともにどんどん発展していき、日本有数の港町になっていったということだ。今の様子からは想像もつかないが、かつての横浜はのどかな漁村で、農民や漁師が暮らしているだけだった。そこに港が整備され、日本で初めての鉄道が敷かれたことで、瞬く間に大都市へと成長していったという。玉楠の木は横浜が巨大な都市になっていく様子を、静かに、見守っていたのかもしれない。そんなことを思いながら開港資料館を去り、次に向かったのは「郵船歴史博物館」。日本郵船が、海運産業の歴史を伝えるために運営している博物館だ。ちなみに先程訪れた氷川丸も、日本郵船が建造した船だ。この博物館の展示では、明治時代の近代化による海運の発達や、第二次世界大戦時に多くの船が空母や病院船に変えられ、激戦の中で沈んでいったこと、また、戦後は再び海運が盛んになり、コンテナの登場などでより運輸の効率が上がったことなどがわかった。船は現在でも天然ガスの輸送や、自動車の運搬などで活躍しており、今後は太陽光発電を利用したクリーンな船の開発を進めるとのことだ。このように、船という観点から日本の近代以降の歴史を見ることができ、非常に興味深かった。そして、今日最後に向かうのは「日本丸」！

1930年に建造された練習用の帆船で、1984年までの約54年間、延べ11,500人もの

【写真：日本丸と横浜ランドマークタワー】

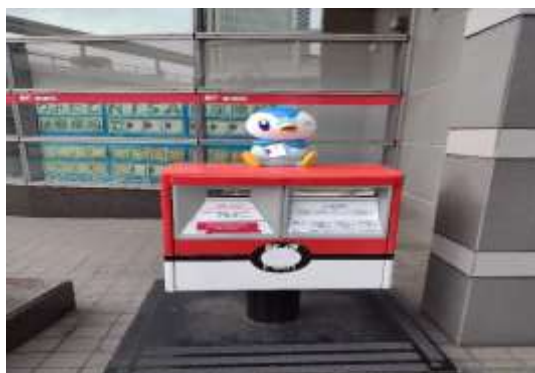
撮影：市川 洸太



実習生を育ててきたというこの日本丸だが、ここでアクシデントが発生！なんと！最終入場の時間を過ぎてしまい、目の前で柵を閉められてしまったのだ！最終入場の時間は16:30。日本丸に到着して、写真を撮ったり、レジユメ（事前に見学場所を調べてまとめたもの。施設の見学の前に担当者が説明を読み上げるというルーティーンがある。）を読み上げていたりしたところ、16:30を過ぎてしまい、入れなくなってしまった。もちろん、時間の下調べが甘かったこちらの落ち度なのは間違いないのだが、受付の人に「もう終わりですか？」と尋ねたところ、そうだといわれ、ドアを目の前で閉められたあの虚しさといったら！ちょっとくらい時間が過ぎてもいいじゃないですか！そこに見学したいと望む人たちがいるんだから！…と心の中で憤ったが、ルールはルール。法廷で戦ったら十中八九負けるだろうし、ネットの珍訴訟まとめみたいなサイトに載せられて、コメントでボロクソに言われるんだろうな…と思い、司法に委ねることは断念した。ここは潔く諦めて、外から眺めるだけで我慢しよう、ということになり、悲しみの中、写真を撮った。なんだか後味の悪い終わり方になってしまったが、これで今回の巡検の全行程は終了！「横浜の開港」について学ぶことができ、とても有意義なものになったと思う（うまいもんも食ったし）。実はこの巡検、前半の方は先生が同伴せず生徒だけだったりしたのだが、特に大きなトラブルもなく進めることができ、その点でもよかったと思っている。高一主体の新体制の中行われたこの横浜巡検だが、今回の経験を活かしつつ、今後もこの意気で頑張っていく所存であります！ということで、ここまで読んでいただき、ありがとうございました！今後とも、地理部及びちりレポをどうぞよろしくお願いいたします！！！！

【おまけ】横浜にはポケモンがたくさん！

※個人的な趣味です。地理部の活動とは一切関係ありません。横浜にはポケモンセンターヨコハマはもちろん、ポケモンのマンホールであるポケふたや、罪なレベルでかわいいピカチュウとイーブイのポスト、全人類を墮とすポッチャマのポスト…



といった具合に、横浜（特に桜木町駅周辺）にはポケモンに関連するものがたくさんあります！特にポケふたとポストは、桜木町駅から徒歩で回れる範囲にありますので、横浜を訪れた際は一緒にこれらのスポットにも立ち寄ってみてはいかがでしょうか！ちなみに僕は、巡検の45分前に駅に着いてポストとポケふたを巡り、巡検が終わってからポケモンセンターに行きました！「地理部って真面目で堅苦しそう…」と思っている方もいるかもしれませんが、こういうことしてるやつもいるんだなーと知ってもらえれば幸いです！以上、完全に趣味のおまけでした！



<参考資料>

横浜市ホームページ

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/machizukuri-kankyo/midori-koen/koen/rekishi.html#:~:>

神奈川近代文学館 <https://www.kanabun.or.jp/about/>

東京湾観光情報局

<https://tokyo-bay.biz/pref-kanagawa/city-yokohama/kn0344/>

YOKOHAMA AIR CABIN <https://yokohama-air-cabin.jp/>

発祥の地コレクション 機械製氷発祥の地 <https://840.gnpp.jp/kikaiseihyo/>
ニチレイこおらす 第3回横浜で発祥した機械製氷

https://www.nichirei.com.jp/koras/ice_history/003.html

ニッポン旅マガジン 近代街路樹発祥の地 <https://tabi-mag.jp/kn0479/>

発祥の地コレクション 近代街路樹発祥の地 <https://840.gnpp.jp/kindaigairouju/>

発祥の地コレクション 銀行業務発祥の地 <https://840.gnpp.jp/ginkogyomu/>

全国理容生活衛生同業組合連合会 西洋理髪発祥の地を訪ねて

<https://www.riyo.or.jp/vol-16>

日本旅マガジン <https://tabi-mag.jp/kn0516/#:~:>

歯の博物館 <https://www.dent-kng.or.jp/museum/ja/hanohaku11/>

日本洋裁業発祥顕彰碑

<https://www.silkcenter-kbkk.jp/museum/>

https://www.jtb.co.jp/myjtb/card/travel_life/column/article290.asp

https://hamarepo.com/story.php?page_no=1&story_id=3129

第四章

鎌倉と江の島の自然 (2022年12月22日)



1. 長谷寺

文責：水谷 颯

正式名称は海光山慈照院長谷寺（かいこうざんじしょういんはせでら）で、奈良時代の736年に開創され、1200年以上の歴史がある鎌倉有数の神社である。聖武天皇の自治下にある勅願所という天皇・上皇の命令により、鎮護国家・玉体安穩を祈願する神社として定められた神社である。木彫仏としては日本最大の9.18mの高さを誇っている。神社の敷地はとても広く、一部の通路からは相模湾を見ることができた。巡検日は大雨で巨大木彫り像への道がわからず、木彫り像は見ることができなかった。もともと開山されたのは大和国（奈良県）の初瀬（現在の桜井市、読み方ははせ）で、そこで発見された巨大な樟の霊木から二体の観音像が作られた。そのうち一体は大和長谷寺の観音像となり、残る一体が衆生済度の願いが込められて海に流され、その後三浦半島に流れ着いた。その観音像を移動させ、建立されたのが現在の鎌倉にある長谷寺である。



【写真：長谷寺の入口】

撮影：水谷 颯



【写真：通路から眺められる相模湾】

撮影：水谷 颯

2. 宇賀福神社

文責：長谷川 仁

鎌倉幕府を開いた源頼朝は、長い戦乱によって苦しくなっていた国民の生活を憂い神仏の加護を願って日夜祈りをささげていた彼の夢枕に現れた老人のお告げの場所に岩窟を掘らせ、そこに宇賀福神を祭った。その水を使って供養を続けると国は豊かになったということが現在の宇賀福神社の起こりだと言われている。その後1257年、当時の執権であった北条時頼はとある日に人々がこの神社を参拝することを勧めた。そうして参拝しに来た弁財天を信仰する者がここで持っている金銭を洗ったことが銭洗弁財天と呼ばれるようになったきっかけと伝えられている。



【写真：宇賀福神社の岩窟】

撮影：長谷川 仁

3. 鎌倉歴史文化交流館

文責：田畑 裕理

平成 29 年 5 月に個人住宅を改築してできたのがこの鎌倉文化交流館だ。この博物館施設は歴史的に貴重な遺産を展示している他、鎌倉の歴史を体験し学び交流できる場所としてできている。ブースは主に 4 つあり「通史展示」「中世展示室」「近世・近現代展示室」「考古展示室」がある。また、本館と別館に分かれており、本館にはエントランスの他、考古展示室以外のブースがある。別館には考古展示室と VR で永福寺を見ることが出来る交流室などがある。

通史展示室は原始・古代から近代に至るまでの鎌倉の歴史を映像展示物や実物展示物などでわかりやすくまとめているところだ。一方の中世展示室は考古資料と写真パネルを中心に中世都市として発展した鎌倉の様子と武士の営みを紹介しているところとなっている。ここでは、地形模型に映像を投影するジオラマ・プロジェクションマッピングがあり、より理解が深まりやすくなっている。ま

【写真：左：通史展示室 右：中世展示室】

撮影：田畑 裕理



た、近世・近現代展示室は政治都市としての役割を終えた鎌倉が観光地として新たな地位を確立するまでが紹介されている。以上が本館のブースとなっていて、本館だけでも鎌倉の醍醐味を味わうことができる。別館には考古展示室があり、考古展示室には鎌倉で発掘された出土品などが展示されている。今回は「大河ドラマ」を関連付け、北条氏展という企画展を同ブースで開いており北条氏にまつわる出土品などが数多く展示されていた。

このように鎌倉歴史文化交流館はただの博物館ではなく鎌倉の歴史を知るのに役立つ展示となっているので鎌倉の歴史に詳しくない方でも安心して行くことができる。

4. 小町通り

文責：野口 琉也

小町通りとは鎌倉駅東口を出てすぐ始まり、鶴岡八幡宮まで続く商店街のことである。かつては瀬戸耕地と呼ばれる農地で 1889 年に国鉄横須賀線鎌倉駅が開業すると市街化が進んだ。鎌倉時代に商いが認められていたのは、若宮大路東側の小町大路であり関東大震災以前は現在の東急ストアの付近に数件商家があったが、その多くが被災し小町通りに集団移転した。今では伝統的なお土産屋やファッショングッズ、飲食店など幅広くショッピングや食事が楽しめるようになっている。小町通りの始まりには大きく立派な鳥居がそびえ立っており、そこを通ると多くの店が並んでいた。この鳥居から先が瀬戸耕地と呼ばれていたと思うと歴史を感じた。また、この日は悪天候だったにも関わらず、多くの観光客で賑わっていた。それは鎌倉駅の近くにあって、誰でも気軽に行くことができるからではないかと思った。農道として使われていたこともあって、鶴岡八幡宮まで一直線の道であった。商店街には、「まめや」や「豊島屋」の鳩サブレーなどの伝統的な店や、お土産などが売っていた。



【写真：小町通り前の鳥居】

撮影：野口 琉也



【写真：小町通りの商店街】

撮影：野口 琉也

5. 江の島

文責：長谷山 悠斗

江の島は神奈川県藤沢市にある周囲 4km、標高 60m ほどの陸繋島であり、三浦丘陵や多摩丘陵と同様に第三紀層の凝灰砂岩の上に関東ローム層が乗る地質である。湘南海岸から相模湾へと突き出ているため、対岸と橋で繋がっているため、車でも徒歩でも簡単に渡ることができる。小田急線の片瀬江ノ島駅や、江ノ島電鉄の江ノ島駅、湘南モノレール江の島線等を利用して、気軽に電車でもアクセスしやすいのも魅力だ。古くから参詣・遊山の地として、神奈川県指定史跡・名勝、日本百景に選ばれているが、現在はおしゃれなお店もたくさんある観光地として人気のスポットである。

島の周囲は切り立った海蝕崖であり、特に波浪の影響を強く受ける島の南部には下部には海蝕台が発達している。1923 年の関東地震の隆起で海面上に海蝕台が姿を現し、隆起海蝕台となった。ここは観光客の休憩や磯遊び、磯釣りの場となっていて、稚児ヶ淵がその代表だ。海蝕崖の下部には断層線に沿って波浪による侵食が進み、海蝕洞が見られる場所があり、「岩屋」と呼ばれている。さらに侵食が激しくなると、海蝕洞が崩壊して、大きな谷状の地形となる。江の島の中央部には南北から侵食が進んで島を分断するような地形があり、「山二つ」と呼ばれている。東部を「東山」、西部を「西山」と呼んでいて東山の北東部には北西 - 南東方向の平行する 3 本の断層と、それに直交する断層があると想定され、複雑な地形になっている。これほどに険しい地形をしていることから、かつて修行の地とされていたが、冒頭に紹介した通り、現在は全国的な参詣地として、人々に愛され続けている。



【写真：江ノ島シーキャンドルから見た風景】

撮影：長谷山 悠斗

6. 稚児ケ淵

文責：吉田 駿平

稚児ケ淵は神奈川県藤沢市湘南海岸の江ノ島の南西に位置する、海底の隆起と波の侵食によって岩谷の周辺に出来た岩場である。海底は関東大震災の時に隆起したものである。建長寺高德庵の自休和尚に見初められた白菊という鶴岡八幡宮の僧坊相承院で学んでいた稚児が身投げをした事が名前の由来になっている。富士を眺める絶景からかながわの景勝 50 選の一つに選ばれていて多くの観光客が訪れる。夕暮れに見える景色はとて美しく綺麗だった。潮の満ち引きにより海面が上昇し波が入ってくるため満潮の際には稚児が淵に行くことができない。



【写真：稚児が淵から見た相模湾の様子と波食棚】

撮影：吉田 駿平

7. 江ノ島神社

文責：池田 鴻平

江ノ島神社は奥津宮、中津宮、辺津宮の三社からなる神社である。奥津宮は、三女神の一柱である多紀理比賣命(たぎりひめのみこと)を祀っている神社である。岩屋(龍神伝説発祥の地)に一番近い奥津宮は、明治時代まで「本宮御旅所」と呼ばれていた。また現在の奥津宮は 1841 年に焼失し、翌年に再建したものである。

中津宮は、三女神の一柱である市寸島比賣命(いちきしまひめのみこと)を祀っている神社である。中津宮は、853 年に慈覚大師によって創建されたもので「上之宮」と呼ばれていた。また現在の社殿は 1996 年に改修されたもので創建当時の朱色が鮮明な社殿を再現したものである。

辺津宮は、三女神の一柱である田寸津比賣命(たぎつひめのみこと)を祀っている神社である。1206 年に鎌倉幕府三代将軍源実朝によって創建され、1675 年に再建、1976 年に改修を行われ、現在の社殿となったのである。高低差のある江の島では、一番下に位置していることから明治時代までは「下之宮」と呼ばれていた。



【写真：辺津宮】

撮影：池田 鴻平

8. 江ノ島サムエル・コッキング苑と江ノ島シーキャンドル

文責：遠藤 壮一郎

イギリス人貿易商サムエル・コッキング氏が 1880 年に江ノ島に屋敷を構え、その後江ノ島神社の供養菜園を譲り受け、三年の歳月をかけ約 10000 m²の和洋折衷の庭園を創設した。これが「コッキング植物園」と言われ、中でも大温室は総面積 660 m²で、当時は日本一の大きさだった。庭園には、園路、築山、池、花壇のほか、彼が貿易商人であったため世界各国から収集した珍しい植物が植え込まれた。この中には現在も順調に生育しているものがあるが、サムエル・コッキング氏が 1914 年に没した後「コッキング植物園」は 1923 年の関東大震災で建物の大半が崩壊した。その間土地所有者も転々と変わったが、1948 年に藤沢市がこれを買って整備し 1949 年 11 月に「藤沢市立江ノ島植物園」として開業した。2003 年 4 月、江ノ島電鉄株式会社の開業 100 周年記念事業による展望灯台の建て替えに併せ、大々的に再整備され「江ノ島サムエル・コッキング苑」として生まれ変わった。今は苑内には南洋の植物や四季の草花が植えられていて、南国ムード溢れる植物園である。

また、「江ノ島サムエル・コッキング苑」と一緒に建て替えた展望灯台は「江ノ島シーキャンドル」という名前が変わり、【景観・自然への配慮・公共的な利用価値の追求・地域の観光振興】を基本コンセプトに建設された。ガラス張りの展望フロアや屋外展望台があり、富士山などのワイドな眺望が楽しめ江ノ島のシンボルとして親しまれている。



【江ノ島シーキャンドルと江ノ島サムエル・コッキング苑の植物】

撮影：遠藤 壮一郎

9. 旅行記①

文責：市川 洸太

ちりレポをご覧の皆さん、こんにちは。地理部副部長かつ三連続旅行記担当の市川洸太と申します。こちらの「旅行記」は、巡検の一日を部員の目線から記録したものとなっています。他のちりレポの内容より気楽に読んでいただけたらと思いますので、箸休め程度の気持ちでも見ていただければ幸いです！なおこの旅行記は、タイトルにもある通り二班に分かれて見学したうちの、主に西側（長谷寺や鎌倉大仏など）を回った班のもので、東側の班の旅行記については、初ちりレポにして旅行記担当の新人部員、高校一年佐々木君が執筆しておりますので、そちらもぜひご覧ください！またこのちりレポには、訪れた見学地について部員が実体験も交えながらまとめたレポートが掲載されておりますので、詳しく知りたいと思った場所や施設についてはそちらも読んでいただくとよりお楽しみいただけると思います！ということで、一通り宣伝も済んだところで本編をどうぞ！

~~~~~

12月22日、午前9時15分——。集合時間の9時を過ぎても未だ到着しない部員を待つ地理部一行の頭上には厚い暗雲が垂れ込め、ただでさえ凍えそうなこの冬至の日に非情にも冷たい雨を降らせていた……。



▲この日の鎌倉駅。天気のこともあり、かなり閑散としていた。

そう、この日の鎌倉は生憎の雨。しかも極寒。『こんな巡検は嫌だグランプリ～気候部門～』があったら文部科学大臣賞くらいは受賞してそんなコンディションだ。しかしこれは、見学地に他のお客さんが少ないということでもある。ピンチこそチャンスとはよく言ったものだ……と、そんなことを考えているうちに部員も集まった。ということで二班に分かれ、満を持して巡検へいざ出発！西側班がまず向かうのは「長谷寺」。そのために江ノ電に乗り、のんびり揺られながら長谷駅に到着。

▶今回乗車した江ノ島電鉄、通称「江ノ電」。間近に海が迫る車窓の眺めも楽しみの一つ。江ノ電自転車ニキ事件でも有名。ちなみに江ノ電ニキは江ノ島駅の近くでタコス屋さんを経営しており、事件後めっちゃくちゃ繁盛したらしい。



▲境内の散策路は、鎌倉を一望できる高台へ続く。天気さえ良ければッ……。

この長谷駅から 5 分ほど歩いたところに目的地の長谷寺がある。長谷寺は奈良時代の 736 年に開創されたと伝わる、鎌倉有数の歴史ある寺院だ。この長谷寺には日本最大級（高さ 9.18m）の木彫仏である十一面観世音菩薩像（じゅういちめんかんぜおんぼさつぞう）があり、こちらは写真撮影が禁止だったため画像を載せることはできないが、とても立派で神々しい印象を受けた。また、長谷寺は様々な花々が一年を通して見られることでも有名で、特にアジサイが美しいという。雨の勢いだけなら梅雨顔負けなんだけどな～と思いつつながら長谷寺を後にし、次に向かうのは「高德院」！高德院といえば、やはり有名なのは鎌倉の大仏。

奈良の東大寺に次ぐ大きさの大仏として有名なこの鎌倉大仏だが、1252年に造立が始まったということ以外、詳しいことは分かっていないようだ。ただ調査によると、完成当時には存在していた堂宇（大仏を囲うための建物）が天災によって破壊されており、今のような露坐の形になったことが分かっている。いやー、大仏様も雨の中ご苦労様です……ということでも高徳院を見学し終えた地理部一行が次に向かうのは、「大仏切通し」！



「え？？？ちよっ、ちよっと待て！！切通しって何？？？急に知らん言葉出してくんのかやめて！！て！！！」……となっておられる方、まずは素数を数えて落ち着いてください。

「あっ、はい。2……, 3……, 5……, 7……, 9……9？」……どうやら落ち着いてくれたみたいです。ということで切通しの説明をば……。「切通し」というのは、山や丘を切り拓いて人や馬が通れるようにした道のこと。山に三方を囲まれた鎌倉において、この切通しは交通と防衛の要であったそう。ならば実際に足を運んで、当時の人の気持ちを知るのが筋なんじゃないか！？と考えた地理部は、こんな天気になるとはいざ知らず、行程に「切通しを歩く」という項目を愚かにも追加したのであった……。といってもこの時点で雨はかなり小降りになっていたため、まあ行けるっしょ！と検討に検討を重ねた末、切通しへ。

？？？「チリ部！あれをしてみろ！」

地理部「ええええええええ！？！？！」

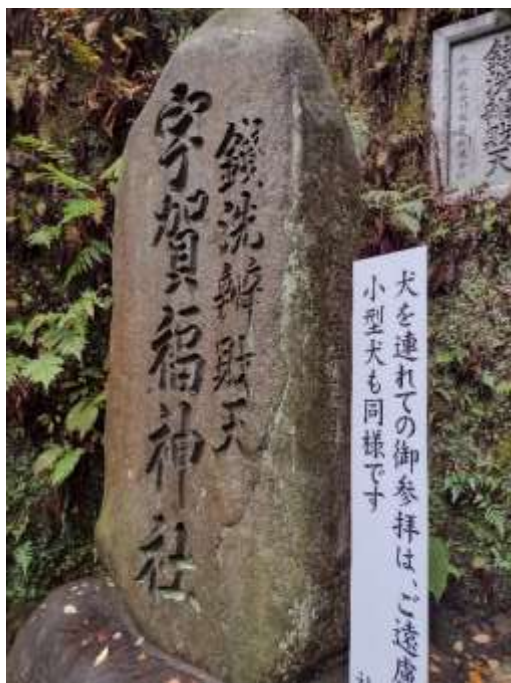
ナレーション「そこで地理部が目にしたものとは！？」

**「割とガチの山道！！！！！」**



**「マジ倒木！！！！！」**

見たらわかる。ガチのやつやん。軽い気持ちで臨んだのが最期、雨でぬかるんで足元が悪かったこともあって、かなり苦戦する地理部一行。道中、「ココス」（ここ滑るよ！の意）や「下り坂 46」（傾斜に注意！の意）といった、今後日の目を見ることは決してないであろう、しょうもなさすぎる造語も駆使しながら、30分ほど歩いてようやくこの切通しを抜けることができた。いやー、昔の人はこんな道を通らないと鎌倉に来れなかったのか……。これは攻められにくいわけだ。しかも今のような運動靴がない時代だから、きっと草履を履いて、しかも和服でこの舗装されていない道を歩いていたんだろう、と考えると、大変な時代だったんだな〜と想像できる。そんなこんなで何とか無事に切通しを踏破した我々は、「銭洗弁財天宇賀福神社（ぜにあらいべんざいてんうがふくじんじや）」へ。



▲周囲を山に囲まれるこの神社は「隠れ里」とも呼ばれているそう。境内の俗世離れ感が個人的にめっちゃ好き。この宇賀福神社では「銭洗」の名の通り、小銭を洗うのが名物となっているのだが、この神社はもともと源頼朝が夢の中で授かった神のお告げ通りにつくったものであり、その後5代執権の北条時頼がここに湧く水で銭を洗うと様々なご利益があると言ったことで、参拝客もそれに倣ってお金を洗うようになったそう。ということで我々も実際に小銭を洗ってみることに。鎌倉五名水にも名を連ねる銭洗水でお金を洗っていると、澄んだ水と綺麗になっていく小銭を見ることでなんだか清々しい気分になることができた。気持ち新たに出発した地理部の面々は、続いて「鎌倉文化交流館」を目指す！10分ほど歩いて到着した文化交流館は2017年にオープンした、かなり新しい施設。鎌倉の歴史や風俗について深く知ることができる……。のだが、実はこの施設の建物、ノーマン・

フォスター氏という、ドイツの国会議事堂のデザインも手掛けた、世界的な建築家の方が設計した個人住宅をリノベーションしたものなのだ！（調べていただければわかるのだが、ドイツの国会議事堂は超センス溢れる構造である。）道理でオシャンティーな造りになってるのか〜と思いつつも、こんな立派な家を個人で所有していた人がいるとはにわかに信じがたい。そう思わせるほどに大きくて凝った造りだった。……といった感じで鎌倉歴史文化交流館を見学し、午前中の行程は終了！ひとまず鎌倉駅に戻り、お昼休憩のため一時解散。午後は江の島を見学するため、1時間15分後に江の島で集合ということになった。ということで他の班員と別れた高一グループは、昼食を求めて先に江の島に向かうことに。やっぱ海鮮系食べたいよな〜と話していると、江ノ島の駅前にいい感じのお店があるとの噂を聞きつけ、そのお店に向かうことになった。「喜食屋」って名前らしいんだけど、どこにあるのかな〜と江ノ島駅を出ると、まさかの超駅近。改札を出てから30秒で入店することができた。席についてメニューを眺めていると、ここで衝撃の事実が発覚！なんと午後の行程を考えると、昼食に割けるお金が数百円しかないことが分かったのだ！このお店では少なくとも1000円は無ければ何も食べられない……。どうにか当部編集長の河合君にお金を立て替えてもらい（BIG KANSYA!）、アジフライ定食を食べることができた……。



▲今回お邪魔した喜食屋さん。ボリューム満点なアジフライ定食(1200円)の他に生シラス丼や海鮮丼なども。ちなみにこのお店、めっちゃ美味しくて超アクセスいいので、江の島に行かれた際にはぜひ！喜食屋さん、ごちそうさまでした！さて、腹ごしらえも済んだところで集合場所へ……って全然時間ねーじゃん！と今更ながら気づき、そこからかなり急いで歩いたのだが、集合時間に少々遅れてしまった……。これに関しては申し開きの余地もないのだが、おそらくもう一方の旅行記で佐々木にこのことがディスられている予感がするので弁明すると、私共は最速で江の島に向かい、最速で店に入って最速でご飯を食べたんです！でも間に合わなかったんです！決して許してほしいとかそういうことではないが、言われっぱなしのままなのも癪に障る。といった経緯でご説明した

次第であります……。なんて、社会人の必殺技「平謝り」はここらでおしまいにして、ここからは東側班と合流し、江の島の見学へ！  
なお、行程の都合上、ここから先の見学地は東側班と同じ（鎌倉歴史文化交流館は共通だったけど…）になるため、旅行記の内容も多少重複してしまうかもしれません。その場合は読み比べる楽しみが増えた！と前向きに捉えていただくと精神衛生上望ましいと思われまふ。そうです。そういうことにしておいてください。……ということでもまずは江の島シーキャンドルに向かいつつ、道中の江島神社も参拝することに。



▲江島神社の「朱の鳥居」。後述のエスカレーターを使えばこの階段を上る必要はない。

ちなみに江島神社は辺津宮（へつみや）・中津宮（なかつみや）・奥津宮（おくつみや）の3つの社殿に分かれており、江島神社のご祭神である三姉妹の女神をそれぞれの宮で祀っているそうだ。よって正しい参拝方法は全ての宮をお参りすること。また、この3つの宮を簡単に巡るために、島内には「エスカレーター」という有料の設備が3か所に分かれて設置されている。一体どんな設備なんだ……！？とお思いの皆さんのために端的に説明すると、要は「上りのみのエスカレーター」である。……期待させておいた手前、申し訳ないが、360円課金すると若干楽できる、それ以上でもそれ以下でもない。ちなみに「エスカレーター」というネーミングは、「通常エスカレーターには上りと下りがあるが、このエスカレーターには上りしかないため『エスカレーター』はどうか」という提案の元に付けられたものらしい。いや、やかましいわ！しかも開業当時の1959年には神奈川県警の吹奏楽団を起用したテレビCMを放映し、「江の島エスカターの歌」まで製作したらしい。いや、ネーミング気に入すぎだろ！！そして開業当時はエスカレーター自体が珍しい時代だったこともあり、靴を脱いで乗ろうとしたり、助走をつけて飛び乗ろうとしたりする利用客もいたらしい。いや、みんなしてはしゃぎすぎだろ！！……と話題の尽きないエスカレーターだが、予算の都合上僕と書記長の吉田君は石段を自らの足で上り、他のブルジョアの方々はエスカレーターを使うことに。しかし、なんと先に上まで到着したのは徒歩組。それほど急いだわけでもないのに、10秒ほどリードして上に到着した。まあ、あくまで負担を減らすための設備だから……と、本来こんなに量を割くようなものでもない気もするエスカレーターを骨の髄まで楽しみつくしたところで、まずは最初の辺津宮を参拝。次の中津宮へいざ行かん！……とその前に、せっかくなので御朱印を頂いておこう。最近御朱印帳を手に入れて、お寺や神社ではできるだけ頂くようにしてるんだよなー。って、ムムム……。このことも向こうの旅行記でディスられてる予感……。どうせ「お金



借りておいて御朱印もらうとかwww」  
みたいなこと書かれてるんだろうな  
……。これは反論させてほしい！まず、  
御朱印って一生ものなの！その辺のス  
タンプラリーとは訳が違うんだよ！て  
かお金も翌日きちんとお返ししたし！  
ったくこれだから最近の若いのは……  
って危ない危ない。あと少しで「全ての  
不都合を年齢のせいにする悲しきモン

スター」に墮落するところだった……。そもそも同い年だし。なんなら佐々木の方が誕生日早いし。ということで、みなさんも「年の功第一主義」に成り下がらないように、どうか人間の形を保ってくださいね！……何の話だったっけ。そうそう、次は中津宮に行きます！（ちなみに僕が御朱印を頂いている間、誰一人として待っていてくれなかった。）また石段を上り、比較的標高の高い場所にある中津宮。ここでもしっかり手を合わせ、次に目指すのは「江の島シーキャンドル」！あ、奥津宮はもっと島の奥側にあるので、このあとに向かいます！それではまずシーキャンドルへ。シーキャンドルとは、江の島の最も高い場所にある江の島灯台の、展望台としての呼び名のこと。要は江の島全体を見渡せる展望台。展望フロアの高さは地上約42mで、海拔にすると100m以上もあるという。ここで、地理部の滅多にない地理要素を一つ……。そもそも江の島という島は、地理的には「陸繋島（りくけいとう）」と呼ばれ、その字の如く、陸地に直接繋がった島である。なにで繋がっているかという、「陸繋砂州（りくけいさす）」、別名「トンボロ」という砂の地形。川から運ばれてきた土砂が堆積してつくられる「砂州」という地形の派生版だ。ちなみにこの陸繋島で有名なのは函館。上の写真はシーキャンドルから撮影したものだが、手前の江の島と奥の陸地が砂によって繋がっている様子が……橋で分かりにくいな……。

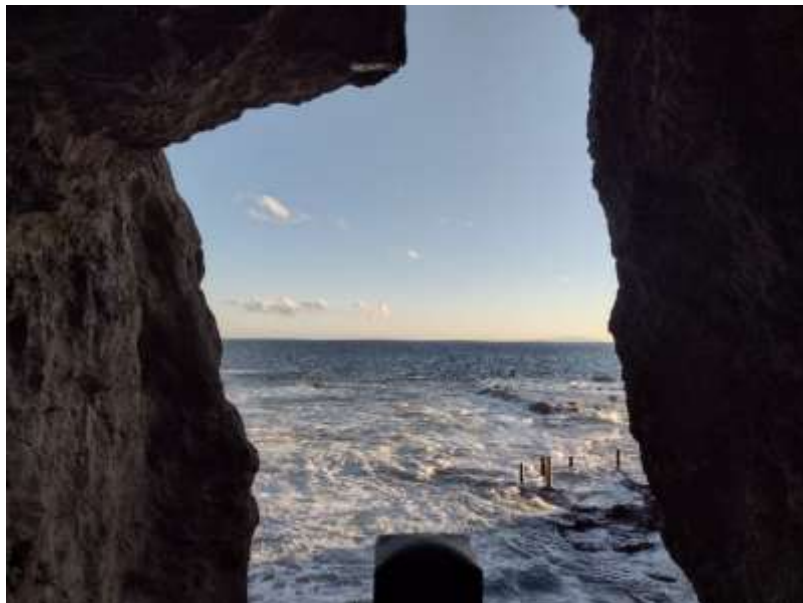
まあ江の島は、陸繋島といっても潮が引いた時しか砂州では繋がっておらず、この写真を撮った時は陸繋砂州の大部分が海中に沈んでいたんですけどね……とこんな感じの地理っぽい話がこの後ももう一つ出てきます。それでは皆さん、覚悟の準備をしておいて下さいッ！いいですねッ！

▶シーキャンドルの外観。上りはエレベーターだが、下りは螺旋階段で降りる。ん？上りは楽だけど帰りは人力……？これと同じような話、さっきも聞いたような……？（この場合のネーミングは「エレベーター」になるのかな。）





というわけでシーキャンドルを徒歩で降り、最後に向かうのは「江の島岩屋」！……とその前に忘れずに江島神社の奥津宮にも参拝し、いざ岩屋へ！今日最後の見学地「江の島岩屋」は、これまた地理的に特異な地形で、「海食洞（かいしょくどう）」と呼ばれる、波の侵食によってつくられた洞窟だ。



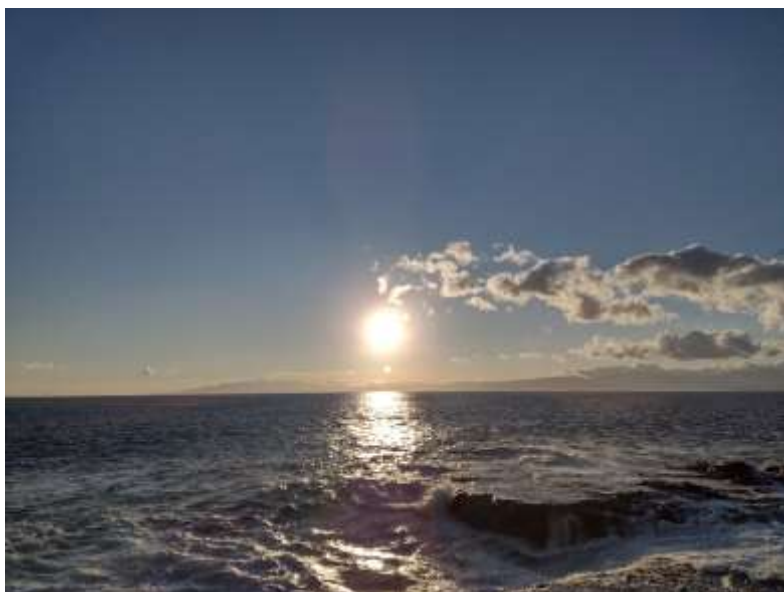
▲岩屋の内部から撮影した写真。壁面が波の侵食によって荒々しく削り取られているのがわかる。

また、岩屋への道中見ることができる切り立った崖は「海食崖（かいしょくがい）」と呼ばれ、これも波の侵食によってつくられた地形だ。



▲左右どちらも海食崖の写真。険しく切り立っている様子が見て取れる。

そしてもう一つ紹介したいのが、「波食棚 (はしょくだな)」(または「海食棚 (かいしょくだな)」。こちら江の島の岩屋周辺で見られる地形で、例によって波の侵食によって形成される。



▲きれいな夕日……なのは間違いないが、注目すべきは手前の平らになっている部分。これを波食棚と呼ぶ。

ここまで紹介してきた「海食洞」、「海食崖」、「波食棚 (海食棚)」は「岩石海岸」と総称される、岩石が侵食されることによって形成される地形で、「陸繋島」でもある江の島でこれらの地形が見られるというのはなかなかレア。なんなら東側班が午前中訪れた「由比ヶ浜」は「砂浜海岸」だし、江の島近辺では海岸で発達する地形を数多く見ることができる。こんな感じで地理の知識が多少あると、何気ない風景も違った観点から楽しめるようになる……かも？……ということで、これで巡検の全行程は終了！今回の巡検では大仏を見たり、ガチ切通しを歩いたり、おいしいご飯を食べたり、地理部というだけあって地形に焦点を当ててみたり (ただ「地理」にはその土地の文化や風習などの広い意味が含まれるので、普段の活動が「地理部」らしくないわけではないと思っているが) ……、とにかく満足感のある巡検となったと思う。最後は江ノ島駅の方面に向かい、希望者は湘南モノレールに乗って大船駅で解散となった。(この湘南モノレール、懸垂式モノレールと呼ばれるぶら下がったタイプのモノレールなのだが、言いようのない浮遊感があって落ち着かなかった。調べてみたら「ジェットコースター」なんてあだ名をつけられてた上に、会社公認のキャッチコピーにもなって面白かった。それを自分で名乗ったらダメだろ。)

~~~~~  
てなわけで、ここまでお付き合いいただき誠にありがとうございます！ちなみにこの旅行記、7000文字くらいあります。旅行記書くたびに文字数の自己ベストを更新し続けて

ます。というか、こんな長文かつ駄文をお読みいただき本当に感謝しかありません！あ、そういえば口語調に書いたところは正しい日本語からあえて外して書いてるので、wordの文章校正に引っ掛かりまくって色とりどりの下線が入り乱れてます！個人的には、それらを見逃してでも堅くなりすぎないように書いたつもりなのでご了承ください……！それでは江の島からの帰り際に見た夕日を見せてこの旅行記の幕引きとしたいと思います。ここまでお読みいただき、本当にありがとうございました！！



……あ、余白ができたので江の島で見かけたネコの写真貼っておきますね。



▲エスカレーター乗り場での一枚。



▲シーキャンドル入り口での一枚。

こういう日常の小さな癒しが、社会の荒波に揉まれる現代人を生き長らえさせているんでしょうね。いや、マジで。

終

10. 旅行記②

文責：佐々木 秀真

はじめまして、元大型新人の市川洸太“大”先輩とちょうど1年遅れで入部した、超大型新人の佐々木秀真です。今年年始8日目に足を大怪我し、現在は所属していたバレーボール部と地理部を兼部という形にさせてもらっています。(バレー部はしばらく休ませてもらっています)今回は初めてちりレポを書くということで、旅行記という大役を買って出てしまいとても不安な朝が来てしまった。そんな不安を感じたのか、天気はあいにくの雨、巡検当日はちょうど冬至で、外は薄暗く、肌寒い朝だった。私は一抹の不安を抱えながら集合場所の鎌倉駅西口に向かった。駅を出ると雨がザーザー降りて凍えるような寒さになっていた。10分前に着いた私は天気に文句を言いながら、市川大先輩の天気予報を聞きながら、他の部員の到着を待った。

今回私たちは午前、鎌倉の東と西の2つの班に分かれ、午後は全員で江ノ島を回るという流れだった。私たち東班はマップを片手に出発し、鶴岡八幡宮へ向かった。途中、若宮大路の道路の真ん中にある歩道を通って行った。道路の真ん中に二の鳥居という大きな鳥居があることで有名な通りだ。

【写真:鎌倉駅】



【写真:二の鳥居、奥に伸びる若宮大路】

通りをまっすぐ行くと大きな鳥居が見えてきた。ここは三の鳥居と言って、鶴岡八幡宮の入り口に立つ大きな鳥居だ。



【写真:三の鳥居、奥は鶴岡八幡宮】



【写真:土砂降りの鶴岡八幡宮】



【写真:小町通商店会】

三の鳥居をくぐり、鶴岡八幡宮に到着した。雨が少し強くなり、風も強かった。中に入ると、大きな池が左右に2つ、真ん中には本殿へと続く道が伸びていた。

本殿でお参りをした後、本殿左奥の宝物殿を見学した。その後鶴岡八幡宮の敷地内に併設されている大河ドラマ館を見学した。館内は大人気の中放送終了した、鎌倉殿の13人の展示がされていた。写真を撮ったり、見学したりしているうちに集合時間となったので、三の鳥居の下に集合した。次の目的地である鎌倉歴史文化交流館を目指すため、行きとは違い、小町通りを通過して鎌倉駅に向かった。小町通りは大宮大路と並行に鶴岡八幡宮に伸びる通りであり、小町通り商店街のある通りだ。私の目は売られていた鳩サブレに釘付けになってしまったが、時間も迫っていて買うことはできなかった。

鎌倉駅から20分ほど歩くと昔ながらの民家が立ち並び、奥には木が生い茂る崖が見える場所に鎌倉歴史文化交流館があった。ここは鎌倉の西側に両足を突っ込んでいるが、鎌倉に行くなら外せないと思い、東班もおとづれることとなった。詳しい内容は担当部員のレポートを読んで欲しいのだが、プロジェクトマッピングや動画など詳しい展示がされており、鎌倉の歴史について理解を深めることができた。興味があるならぜひ行って見て欲しい。鎌倉歴史文化交流館を出ると、太陽が顔を出していた。空を覆っていた雲が一つもなく、朝の寒さが嘘のように暖かくなっていた。晴れに気分を良くしながら、私たちは若宮大路へ向かい、道路の真ん中にそびえ立つ二の鳥居のところを再び辿り着いた。朝は曇っていたので、ここでもう一度写真を撮った。ここで二、三ときたら一はないのか?と疑問に思った方もいるだろう。もちろんある。一の鳥居を目指し、私たちは若宮大路を南下していった。またもや道路の真ん中にそびえ立つ一の鳥居を横目に見ながら和田塚へと向かった。



【写真:快晴!】



【写真:快晴の二の鳥居】



【写真:一の鳥居】



【写真:なんの変哲もない和田塚】

和田塚は鎌倉幕府の侍所の長官だった和田義盛が殺害された場所である。和田塚に到着したのはいいのだが、和田塚には石碑があるだけで何もなかったため、大畑先生の解説を聞き、2分ほどで和田塚を後にした。

そしてみんなお待ちかねの由比ヶ浜へと向かった。由比ヶ浜の砂浜に降り立ち、私たちは西へと歩いていった。途中、海に落ちそうになったり、小さな川をみんなでジャンプして飛び越えたり、とハプニングはあったがみんな楽しそうに歩いていた。20分ほどで砂浜を離れ、長谷駅へと向かい江ノ島電鉄で江ノ島駅に移動した。

ここで、解散し昼食を取ることにしたのだが、店があまりなく、ほとんど全員が駅前の喜食屋という海鮮料理のお店に吸い込まれていった。少し遅れて西班牙の面々も同じ店に吸い込まれていた。私はここで刺身定食を頂いた。値段は少々弾んだが、サーモンと



【写真: 広大な由比ヶ浜】



【写真: 喜食屋、刺身定食】

カンパチが非常においしかった。

昼食後は集合場所に向かおうとしたが、途中で美味しそうなプリン専門店があり、思わず買い食いしてしまった。カラメルとカスタードが絡み合っただけでスイーツエデンを形成していた。頬が落ちるほどおいしかった。少し時間が押しすぎてしまい急いで江ノ島へと向かった。しかし集合場所には部長の姿はなかった…。5分ほどで全員が集まり、全員での江ノ島巡検が始まった。江ノ島の商店街を通り過ぎると鳥居が見えてきた。鳥居の右には何やら券売機とエスカレーターがある。もちろん課金してチケットを購入し、江ノ島エスカーと言うエスカレーターに踏み込んだ。無課金勢は鳥居をくぐりそのまま階段を登っていった。エスカレーターはクラゲやイルカのプロジェクトンマッピングが映



【写真: 江ノ島エスカー内部】

されていて幻想的な空間だった。エスカレーターから降りると参拝する場所と御朱印場があった。市川大先輩は御朱印マニアらしく、部長に借金しながらも御朱印を貰っていた。もちろん置いていった。階段を何段も登るとサムエルコッキング苑という南国風の植物園に辿り着いた。実はここはちょうど今期世界中で人気を博しているボッチ・ザ・ロックというアニメでも登場しており、もちろん1ファンである私は写真を撮りまくったのだ。実は内心テンションが上がりまくっていたのだ。サムエルコッキング苑の中にある江ノ島シーキャンドルという展望灯台が最初の目的地である。

シーキャンドルの展望台までエレベーターで上がり、屋上展望台までは階段で上がった。展望台は海に囲まれていて綺麗な景色が広がっていて、海が水平線の向こうまで無限に広がっているように感じられた。海の声が聞きたかった。



【写真:サムエルコッキング苑】



【写真:無限と広がる海】

10分ほど滞在し、展望台から降りた。次に稚児が淵と江ノ島岩屋に向かった。稚児が淵は下調べ段階で私の推しスポットであり、テンションがさらに上がっていた。稚児が淵は眼前に広がる波食棚と背後にそびえ立つ海食崖を間近で見ることができる。波食棚、海食崖は高校1年生の1学期に地理で学習する内容なのだが、先生に質問された時、高1である私と部長は答えられなかったのが恥ずかしかった。簡単に説明すると波食棚と海食崖は海の浸食作用によって削られた地形が隆起したものである。私は海の力の偉大さを感じたのだった。

その後江ノ島岩谷と呼ばれる海食洞へと向かった。海食洞も先と同じで海の侵食作用で削られて崖にできた横穴で、洞窟である。そして江ノ島岩谷に足を踏み入れた私が最初に思ったことはやはり、「海の力ってすげえー」だった。まるでディズニーランドのスプラッシュマウンテンの待ち列のところと同じような光景が広がっていたのだ。

少し歩くとランタンが渡された。洞窟内は照明があると書いても薄暗いためランタンの灯りを頼りに先に進んだ。

洞窟の奥に進むにつれ天井が低くなり、高身長組は苦勞していた。奥まで行き、Uターンして出口に向かうと明らかに人工的に作られ、イルミネーションで彩られ、ライトア



【写真:波食棚】

ップされた通路に出た。彼女と来たら盛り上がるなとしみじみと感じたのだった。洞窟を出た私はどうだったかというところの頂点を通り過ぎ、疲労困憊でベンチに座っていた。そんなところを河合大大先輩に激写されたが、何か言う気力もなかった。その後稚児が淵



【写真:江ノ島岩谷内部】

のところで集合写真を撮り、巡見は終了となった。全員で湘南モノレールの駅まで向かった。かなり速度が出るモノレールとして有名なのだが、疲れすぎてそれどころではなかった。終点の大船で解散した。



【写真:湘南モノレール江ノ島駅】

今回の巡検は午前午後で行き先が違ったので、行く場所を詰め込みすぎたかなと思う。初めての旅行記に緊張したが、巡検を心から楽しむことができよかった。旅行記を書き終えて今夜はぐっすりと眠りたいと思う。

<参考資料>

鎌倉長谷寺ホームページ <https://www.hasedera.jp/>

鎌倉歴史文化交流館のパンフレット

江ノ島サムエル・コッキング苑の由来の碑

<https://tabichannel.com/article/906/komachidori>

<https://tabichannel.com/article/906/komachidori>

<http://enoshimajinja.or.jp/>

<https://enoshima-seacandle.com>

<https://www.fujisawa-kanko.jp/spot/enoshima/11.html>

<https://www.fujisawa-kanko.jp/spot/enoshima/12.html>

第五章

大宮の地域性 (2023年2月12日)



1. 大宮の交通

文責：野口 琉也

埼玉県最大の都市である大宮には明治時代に始まった、鉄道と製糸という二つの大きな産業があった。これが大宮の発展の礎となった。また、大宮は武蔵国の一宮ともいわれる氷川神社の門前町として、特に江戸時代以後には中山道の宿場町として古くからの交通の要衝だった。現在の JR 高崎線は、1883 年に日本初の私鉄である「日本鉄道」の第 1 期線が開通したが、当初大宮駅は設置されなかった。衰退を懸念する地元の要望もあり、1885 年に現在の JR 宇都宮線である第 2 期線が開通するにあたって、その分岐駅として「大宮駅」が開設された。

大宮駅には写真のような大きなロータリーがあり、多くのバスやタクシーの乗り場となっていた。また、駅内には東北新幹線やニューシャトルなどと JR 在来線だけでなく多くの電車が通っているため、大宮駅は大きなターミナル駅となっているということが分かった。大宮駅周辺は飲食店やデパートなどの商業施設が多く、たくさんの観光客で賑わっていた。交通の要衝となっているだけあって観光客だけでなく、大宮に住んでいるや乗り換えるために利用している人もいた。



【大宮駅前のロータリーと商店街】

撮影：野口 琉也

2. 大宮公園

文責：遠藤 壮一郎

大宮公園は大宮駅の東北約 1.5km に位置しており、日本のさくら名所 100 選や日本の都市公園 100 選に選ばれている。大宮公園は明治 6 年の太政官布達を受け明治 18 年に氷川公園の名称で誕生した。開園に向け、土地の実測や規則の制定等の作業が進められた。構想作成の過程では、専門家として招いた東京の庭師・佐々木可村の白鳥池周辺の松林を伐採する案に再考を促す一幕もあった。当初、管理には県勧業課があたり管理費を捻出するため、二万尾の鯉の養殖や料亭への借地、伐採木の払い下げなどが行われた。

その後、明治 24 年 9 月から一時管理は大宮町に移ったが、財政的な配慮により明治 31 年から再び県営公園になった。

大正10年に日本の公園の父とされる本多静六博士などによって「氷川公園改良計画」が立案された。その内容は桜の植栽を始め、向山（現埼玉百年の森）付近を拡張し大運動場（現双輪場）などを整備する計画だった。昭和期になり本格的な公園整備が進められ、現在は野球場やサッカー場などが建設され、本多博士が構想した「スポーツの殿堂と赤松と桜の公園」として、埼玉県で一番利用者の多い県営公園として親しまれている。

【写真：大宮公園】

撮影：遠藤 壮一郎



3. 大宮盆栽美術館・大宮盆栽村

文責：田畑 裕理

大宮盆栽村とは、元々東京の団子坂に住んでいた植木職人が大正12年（1923）に発生した関東大震災をきっかけに大宮に移り住んで形成された植木職人の村である。また、近年は世界盆栽大会が開かれるなど国内外の盆栽家から”BONSAI”の聖地として認められるほどとなった。大宮盆栽美術館（以下、美術館）は、そうした盆栽村の歴史や盆栽の形成美などを詳しくまとめ、発信していく場所である。下記は美術館の詳しい説明である。

美術館の入口は日本の民家のような作りになっておりとても情緒があり美しい。中に入ると一際目立つところに盆栽がある。この盆栽はそれぞれの季節に合わせた「季節の一鉢」で見ている者の心を癒してくれる。また「ロビー」には他にも受付がありここで館内に入るのに必要な入場券を求めることができる。入場券を買くと盆栽の鑑賞方法をパネルで紹介している「プロローグ」に入ることができる。鑑賞方法を確認し次に向かうのは「コレクションギャラリー」である。ここでは美術館が所有するコレクションとともに盆栽に関する解説パネルがある。パネルには盆栽の種類と形態など非常に興味深い内容が書いてある。また驚くことにコレクションは季節に合わせて週替わりで選ばれているものでどれも優美である。ただ、注意点として「コレクションギャラリー」ないの写真撮影は禁止されているため見惚れてしまっても撮影は控えなければならない。

次に「中庭」である。「中庭」は「コレクションギャラリー」から外に出るとあり、美術館のコレクションである数多くの盆栽が飾られている。盆栽はどれも美しく多くの盆栽がある光景は圧巻である。また、こちらは「コレクションギャラリー」と違い撮影が

許可されているため気に入った盆栽を写真に収めることができる。

このように、大宮盆栽美術館は盆栽愛好家から盆栽を全く知らない人まで楽しめる施設となっている。ぜひ、盆栽に興味を持った人はいてみるといいだろう。

【写真：盆栽美術館の中庭の様子】

撮影：田畑 裕理



4. 鉄道博物館

地理編 文責：河合 道祐

鉄道博物館とは埼玉県さいたま市大宮区大成町にある日本旅客鉄道(JR)の創立 20 周年記念事業として前年に閉業した交通博物館に替わる施設として 2007 年の鉄道の日に関業した鉄道専門の博物館である。施設内は車両・歴史・科学・未来・仕事の 5 つの展示内容に分けられている。このうち車両のフロアには 36 両もの車両が展示されている。

このレポートでは鉄道と地理の関係について記していきたいと思うが、範囲が広すぎるので鉄道博物館のある大宮に絞っていきたい。現在、さいたま市大宮区は「鉄道の町」「製糸の町」という風に呼ばれている。まず、なぜ大宮が「鉄道の町」と呼ばれるようになったのか。それは 1885 年に大宮駅が高崎線と東北本線(宇都宮線)の分岐駅として開業することが始まりだ。この当時の大宮は、他の駅と同じようなごく一般的な駅で、新幹線が全列車停車するような駅ではなかったという。先程「1885 年に大宮駅が高崎線と～」と述べたが、実は高崎線は大宮駅開業の 2 年前の 1883 年に開通していて、宿場町でもなかった大宮には駅がなかったのだ。そのようないわば弱小だった町が主要 2 路線の分岐駅として開業したのはなぜなのかというと、当時東北本線(1885 年開通)が、どこで高崎線と分岐するかが問題となり、浦和・大宮・熊谷の 3 案が有力だった中、地元住民の必死の誘致運動と予算や速達性の観点から大宮が選ばれたからである。また大宮に広大な土地を持っていた人が、大宮駅の北側の土地を提供したことで、そこに大宮工場(現在の大宮車両所)が建設されたからでもある。

このように大宮が交通の要所となっていくと、次第に企業や工場が集まってくるようになる。そこで大宮に多く集まったのが製糸工場である。地理部では 2022 年の夏合宿で「糸都」と呼ばれる岡谷や、また秋には生糸が多く輸出されていた港町横浜を訪れていたが、その岡谷のある長野県から横浜の港まで運ぶコストを削減するために、大宮に製糸工場が多く長野県から移ってきたのだ。これが大宮が「製糸の町」といわれる所以である。

このようにしてみると大宮が、鉄道(交通)と製糸業(産業)が密接に関わりあっていることがわかる。同様な例は大宮だけに限らず他の都市にもみられることだ。実際、2023年の春合宿で訪れる箱根は交通と自然地理が深く関わりあっている。皆様もぜひ、旅先などで交通と地理の関係について考えたり調べたりしてみたいはかがだろうか。

物流編 文責：池田 鴻平

日本の貨物列車は1873年9月15日から運行が開始され、当時は15両編成の貨物列車が毎日2往復して貨物を運んでいた。その後、鉄道網の発展や貨物量の増加で1921年に同じ方向へ向かう貨車を集め同時に運ぶ貨車集結輸送方式が導入された。高度経済成長期には、貨物輸送の近代化に向け、貨物駅の新設、増強、貨物の積み下ろしを省力化するため板に貨物を載せて輸送するパレット輸送やそれに対応した屋根のある貨物車である有がい車の開発などが行われた。更に、貨物列車とトラックでの貨物の積みかえをスムーズに行うため、コンテナ輸送の研究も進み、1959年にはコンテナ専用列車”たから”号の運行が始まった。

その後は、高速道路により貨物列車の需要が減少し、貨物列車の高速化をしてほとんどの列車は75km/hで走行するようになった。1970年代になると需要はさらに減少し、コンテナ輸送へのシフト、貨車集結輸送方式から拠点間直行輸送方式への転換が進められた。しかし、状況は改善せず民営化し、国鉄は”日本貨物鉄道株式会社”(JR貨物)となった。JR貨物はコンテナ車の新型車両の開発を進め、1987年には110km/h、2003年には130km/hで走行可能なコンテナ車の運行を始めた。また、2017年IT-FRENS&TRANCEシステム(IT技術を駆使したもので輸送の予約や貨物の配達状況の確認などが即座にできる)の取り組みを開始した。近年は地球温暖化防止の為、輸送をトラックから列車や船等にシフトするなどCO2排出量を減らす”モーダルシフト”を進めている。



【1970年代から運行している車両(右：EF66
左：コキ50000)】

撮影：池田 鴻平

5. 旅行記①

文責:安藤 隼太郎

2月12日の日曜日、私たち地理部員は大宮へ巡検に訪れた。本旅行記ではその日の事を私の視点から書こうと思う。

まず、朝の10時に大宮駅構内の豆の木広場での集合となった。私の端末では駅構内を歩いているのに現在地が駅の外になっているというGoogleマップでは恒例の不具合が起きたが、難なく集合することができた。その後、私の所属する班は駅を出て大宮公園、氷川神社へと向かった。

そうして大宮公園についたわけだが、最初に氷川神社を訪れ、一緒に行動していた水谷君、遠藤君、新井君とおみくじを引いてみみた。私自身はそれなりに良いとされる吉が出た。

確か新井君が「平」というものを出していた気がするが…平？その場でググってみると普通の神社では平が入っていないらしく、広島の大島神社や京都の伏見稲荷大社、本氷川神社等の一部の神社でしか引けないとのこと。ある意味大吉より喜ぶべきである。(運勢は末吉や中吉あたりらしい)

その後は公園内を巡った。簡潔かつ私の主観では大宮公園は池を小さくした井の頭恩賜公園のような公園だと思う。その後、駅前に戻り昼解散となった。大宮ではスタミナ丼が名物となっており食べてみようと思ったが時間が短かったゆえチェーン店に入ってしまった。毎回毎回私は巡検地名物のものを食べようと思ってもチェーン店に入っている気がする。店員と話せないタイプのコミュ障なのは結構面倒である。

集合後、さいたま新都心駅へと移動して造幣局へ向かった。ここではたくさんの記念貨幣などが展示されていた。そして一時間ほど見学した後、最後に大宮駅に戻り、ニューシャトルに乗って鉄博こと鉄道博物館へと向かった。父親と鉄博を訪れた小一の時の記憶では博物館前の横断歩道がめちゃくちゃ長かった気がしたが、博物館は駅直結であった。存在しない記憶なのかもしれない。鉄博では幾多の鉄道のモデルや車両等の展示がされていた。一通り見た後は、足が疲れていたので屋上の売店でアイスを食べた。この時点での活動時間は五、六時間程度だが、巡検では基本ずっと歩いているので夕方には結構疲れていることが多い。

最後に大宮駅に戻り、解散。総括するといい一日だった。

以上で、私の旅行記を終わります。私自身初めて書く旅行記で至らない部分しかありませんが、最後まで読んでくれた方々本当にありがとうございます！もっと面白い旅行記を読みたいという人は先輩らの旅行記を読んでみてください、本当に面白いですよ。これからも地理部員として責任を持ち、頑張りたいと思う。

6. 旅行記②

文責：水谷 颯

中二として初めて旅行記を書くことになりました。地理部2年目の水谷です。今まで中二は旅行記を書いたことがなかったと思いますが、同じ班になった安藤君の誘いを受けて旅行記を書くことにしました。今回の大宮巡検では部員が半分ずつになるようにして分け、大宮駅を中心に文化や自然について調べました。いつもと同じ中二の遠藤君、安藤君、新井君、近藤君と一緒に班で行動しました。まず最初に向かったのは大宮氷川大社です。ここは全国の氷川神社の総本社であるということもあり、多くの観光客を中心に賑わっていました。巡検日は関東でも積雪があった2月10日の二日後だったため神社の敷地内にも雪が残っていました。着いてから参拝をして、中二全員でおみくじをすることにしました。おみくじは100円でした。全員で結果を見せ合うと大吉が数名、吉などが出ていて、自分は「平」というものを引きました。「平」は他の中二も引いている人がいました。「平」とは吉と凶の中間にあるもので、一般的に出る確率は約2%とされているそうです。日本でも「平」が出る神社は多くなく、京都府の伏見稲荷神社や広島県の厳島神社など全国で9つの神社でしか出ないそうです。次に氷川神社の隣にある大宮公園に行きました。大宮公園は園内に小さい遊園地のようなものと無料で入れる動物園がありました。小さい遊園地は明らかに中学生向けのものではなかったものの、ゴーカートや飛行機のようなものに乗って回転する乗り物がありました。中二ではじゃんけんに負けた二人が飛行機に乗る遊具に乗ることにして、中学生は一人200円で乗らない人で割り勘をしました。乗った人は「先輩とかに見られてて恥ずかしかった。」と言っていました。全員で大宮公園内を見学したあと、徒歩で大宮駅に戻り、昼食となりました。

昼食後、班員で大宮駅からさいたま新都心駅へ電車で行きました。さいたま新都心駅ではさいたまスーパーアリーナに向かうと思われる人がとても多く、混んでいました。駅から徒歩10分で造幣局博物館に着きました。埼玉にある造幣局では記念硬貨を中心に作っているという説明を受けました（全国では大阪と広島にあり、新500円玉などが製造されているそうです）。造幣局博物館では自分の硬貨の古さを見られたり、大量の硬貨が入った袋を持って重さを体感できるスペースがありました。さらに奥へ進んでいくと硬貨の歴史や歴代の記念硬貨を多く見ることができました。博物館のお土産コーナーでは日本の城の硬貨などが1万円前後で発売されていて、高いものでは10万円を超えていました。さすがに1万円の硬貨は高いと思ったので、新品の1円玉から500円玉までがそろったセットを買ってみようと思ったものの、なんと硬貨の値段の10倍以上である7700円で、買うのは諦めてしまいました。その後電車に乗って大宮駅へ戻り最後の見学地である鉄道博物館に行くためニューシャトルに乗って移動しました。鉄道博物

館では着いてすぐにみんなで手を振っている電車が通っていたので何か調べてみたらJR東日本のクルーズトレイン「四季島」というものでした。館内では何十両もの車両が展示されていて、昔の車両から今走っている車両まで様々なものを見ることができました。いろいろな車両を見学した後南館へ行き、外に出てのんびりしました。小腹が空いていたので館内にあるレストランで、新幹線で提供されているカチコチのバニラアイスを食べました。久しぶりに食べたバニラアイスがとてもおいしく感じました。その後電車の動くシステムなどを見られる体験館へ行った。体験館には中学生でも楽しめるような遊びも多くありました。そして見学時間が終了となり、鉄道博物館を出ました。

初めての旅行記はいつものちりレポより難しかったです。また旅行記に挑戦したいと思います。最後まで読んでくださりありがとうございました。これからも地理部の一員として頑張ります！

7. 旅行記③

文責：市川 洸太

※この旅行記は、さいたま市立博物館や盆栽博物館などの施設を見学した班のもので、正直二つの班の見学地に大きな違いはありませんが、それぞれの班に二つずつ旅行記があるので、計四つを色々読み比べてみるとより楽しんでいただけたと思います！

朝10時、JR大宮駅の東西自由通路にある「まめの木」というオブジェの前に集合した地理部の面々。なんと珍しいことに、時間通りに全員が集まっている……！？行程表を見ていただければわかる通り、地理部のタイムスケジュールは遅刻してくるヤツがいる前提で構成されている。もちろん電車の遅延などの不測の事態に備えるためのリスクヘッジとして設けられた時間だが、そういうのとは別にポンコツ遅刻をかます輩が多々現れる。この前の横浜巡検の際は、某部長が乗り換え時に反対方面の電車に乗ってしまうという事案が発生。部長がこんな調子なので、他の部員が遅れてくるのは致し方ない……と思われたが、前述の通り今回は全員が時間までに集まっていた。雪でも降るのか……？と思いきや、事前に購入しておかなければならなかった鉄道博物館のチケットを失念する部員が約二名。しかも両方とも高一かい！当日に買っても割高になるだけなので、昼休憩の時間にコンビニに走れば済むことではあるが、それにしても平常運転すぎる。どうやら雪の心配はなさそうだ。そんなこの日は抜けるような青空が広がる、絶好の巡検日和。早速二班に分かれ、それぞれの目的地に向かっていざ出発！まず我々が目指すのは「造幣さいたま博物館」。そのためにさいたま新都心駅まで電車に乗り、徒歩で博物館に向かう。ここで訪れたさいたま新都心駅。正直今までは「いや新都心でwww埼玉が都心を名乗るなんて100万光年早いんだよ！（しまった！光年は時間じゃない！距離だった!）」……と思っていたが、実際行ってみると道路や建物が綺麗で広々とした

公園もあり、とても住みやすそうだった。また、駅前にはコクーンシティ (COCOON CITY) という大型商業施設もあり、多くの人が買い物を楽しんでた。ちなみにこのコクーンシティ、直訳すると「繭の街」という意味だが、これはかつて大宮が製糸業で栄えたことに由来する。製糸業といえば富岡製糸場がある群馬県や、2022 年度に地理部が夏合宿で訪れた長野県の諏訪などが有名だが、ここ大宮は鉄道の開業によって横浜まで生糸を輸送しやすい場所として注目され、1900 年ごろから製糸所が次々に移転してくるようになったそう。その後東京の大都市化が進むにつれ、郊外の宅地化も行われていく。大宮もその例に漏れず住宅地として開発されていくのだが、その中で工業都市から商業都市への転換が図られ、大宮駅前に広大な工場を持っていた片倉製糸の大宮製作所は 1971 年に操業を停止し、跡地には商業施設がつくられることとなった。その後の再開発などでできたのが、このコクーンシティってわけ。それにしても、長野といい横浜といい、地理部で訪れた場所にまつわるエピソードで面白い。戦前の日本にとって製糸業がどれだけ重要な産業だったのかが垣間見える。……ってまだ一つ目の見学地にもたどり着いてないんですけど～！まあ急いでもしょうがないからね。いつも何かに追われる現代人には、「時間」という束縛から離れることが必要なんですよ……。と、そんなことを言ってる間に「造幣さいたま博物館」に到着。



▲交通費を 10 円単位でケチる佐々木君。節約する時は節約して来たるべき戦いに備えている。

2016 年に造幣局東京支局がさいたま市に移転し、造幣局さいたま支局ができた際に同時オープンした、この「造幣さいたま博物館」。そもそも造幣局という施設では、1 円玉や 100 円玉をはじめとした硬貨の製造や勲章・褒章の製造などを行っている。ちなみに 1000 円札やみんな大好き 10000 円札といった紙幣の製造は国立印刷局という、全く別の施設で行われているらしい。また一つ賢くなったな……。んで、ここでは実際何ができるのかというと、お金の歴史についての展示を見たり、硬貨の作り方について学んだりすることができる。また、硬貨の健康状態を診断してくれる機械があったり、大量の硬貨が入った袋を持ち上げることができるコーナーがあったりと、いろいろな体験もできる。なお、この硬貨を持ち上げるコーナーの袋は 10 k g を優に超えるものばかりなので、舐めてかかると痛い目を見ること必至。硬貨は十数 k g もあるのに数万円分の価値だったりしてコスパが悪いため、盗みに入るなら絶対に印刷局に行った方がいい。あ、一応言っときますが、印刷局でお金を盗んでもお札に書いてある番号が押さえられるので、

その紙幣を使った瞬間盗んだ金だとバレて即逮捕されるらしいです。お気をつけあそばせ。……まあそんな法の外の話はいいとして、早速次の目的地に向かいます！さいたま新都心駅に戻り、電車で大宮駅へ。ここから歩いて目指すのは「さいたま市立博物館」！



さいたま市の歴史や文化について学ぶことができるこの施設。常設展示では旧石器時代から現代までの歴史を通時的に見ることができるのだが、部員が最も食いついていたのは昔のおもちゃで遊ぶコーナー。今のようにプラスチック製ではなく、紙や木で作られたおもちゃに興味津々だった。そんなさいたま市立博物館を後にした地理部だが、時刻は12:30になろうとしている。そろそろ昼食の時間かな～ということで、一旦昼休憩に。といっても大宮って特に何か有名な食べ物があるわけでもないし、何食べようかな……と悩んでいると、そこにこんなメッセージが。

??? 『ひのでや』っていうお店がオススメだよ

む！何奴！？曲者だ!!! 出会え！出会え!!! ……って、元地理部の齋藤君じゃないですか!!! 大宮在住の齋藤君、今日が大宮巡検であることを聞きつけてアドバイスしてくれたらしい。それじゃせっかくだし、例の「ひのでや」に行ってみますか！調べた限りだとラーメン屋さんみたいだけど……あ！あった！早速入店。券売機で券を買ってカウンター席に着く。注文したのは「冷やしラーメン」(980円)。その名の通り、この店オリジナルの冷たいラーメンのようだ。この日は2月とはいえ、日差しがあってかなり暖かい。その上色々なところを歩いて回っているので、意外と暑くなってくる。しかも前のちりレポの部員紹介の欄に書いたが、僕は猫舌かつ麺がすすれないという、生まれながらにしてラーメンに嫌われた人間。ただ、ラーメンが僕のことを嫌っていても僕はラーメンが大好きなので、熱くないラーメンがあるというなら是非食べてみたい。そして一緒に入店した吉田君はノーマルな「ひのでやラーメン」(980円)を、佐々木君は

トッピングが豪華な「特性ひのでやラーメン」(1280円)をそれぞれ注文。日本料理店を源流に持つというこの「ひのでや」。ダシや旨味を生かしたラーメンが特徴だというが……。



▲「冷やしラーメン」(980円)。ランチタイムには帆立の炊き込みご飯がサービスで付いてくる。

こちらがやってきたラーメン。スープを凍らせた氷が入っており、これによって冷たさを維持しているようだ。それでは早速いただきます！……お！さっぱりしていて美味しい！スープがかなりあっさりした味付けな上に柚子の皮が入っているため、爽やかでとても良い！後半寒くて凍えながら完食したが、あっつい夏に食べたらめっちゃ涼しくなれること間違いなし。また、猫舌的な観点からも食べやすくて凄く良い。猫舌の悩みとして、熱いと食べられないのでとりあえず冷ますが、すると今度は冷めすぎて美味しさが半減してしまうということがある。しかしこのラーメンは元から冷たい前提で作られているため、猫舌でも100%の味を楽しめるのだ！また、冷ますのに時間がかかって一緒に来た人を待たせてしまうという、永遠(とわ)の苦悩についても問題なし！その美味しさもさることながら、猫舌的にもありがたいラーメンだった。他の二人も完食し、美味しかった……と貧弱なボキャブラリーで感想を述べながら店を後にした。「ひのでや」さん、ごちそうさまでした！それじゃあ腹ごしらえも済んだことだし、集合場所の「武蔵一宮 氷川神社」に向かうぞ！氷川神社といえば板橋にも同じ名前の神社があるが、この「武蔵一宮 氷川神社」はそれらの氷川神社の総本社(一番おおとの神社)であり、氷川を名に持つ神社は大宮を中心に280社以上あるという。そもそも「大宮」という地名は「大いなる宮(=神社)」を表しており、この「武蔵一宮 氷川神社」がその由来となっている。地名になるほど大きな影響を及ぼしている氷川神社だが(板橋にも氷川町がある)、実は地理部が最近訪れたある場所とも関わりがあるらしい。それが横浜巡検の際に見学した「日本郵船 氷川丸」という船。勘の良い方ならお気付きかもしれないが、「氷川」という言葉が共通している！実はこの船は氷川神社から名が付けられて

いるのだ。そのため船内の神棚には氷川神社の御祭神が祀られており、装飾に氷川神社の神紋である「八雲」が用いられているそう。ちなみに、日本郵船の他の船の名前に関しても神社名から取られたものがあり、それぞれの船内にはその神社の御祭神が安置されているという。いや～、実際に氷川丸に行った身としてはこの関係について気付いておきたかったけど、お恥ずかしながら予想だにしませんでした……。なお、横浜巡検の際のちりレポには氷川丸に関する詳しい情報が載っていますので、そちらも是非お読み下さい！（私、不肖ながらそちらでも旅行記を執筆させていただいているので、宜しければ読んでいただくと幸いです……！）



▲境内の入り口である「三の鳥居」。この日は参拝のために列ができるほど多くの人で賑わっていた。

昼休憩を終えた部員も集合し、早速神社の奥へ向かう。お参りをした後は……御朱印を頂こう！……って結構並んでるな……。けどせっかくご縁があったんだから、ここで諦めるわけにはいかない！結局 15 分ほど並んで御朱印を頂くことができた。ただ他の方々を待たせてしまった……。時間も押してるのにすいません……。前の鎌倉・江ノ島巡検の時は御朱印を頂いている間に皆が待ってくれなくて悲しかったが、待ってもらうのもそれはそれで申し訳ない。難儀ですね、人間って。……よし！鬱屈としていても仕方ない！次の目的地を目指すぞ！次に向かうのは「大宮盆栽美術館」！ただ盆栽美術館に行く前に、氷川神社に隣接している「大宮公園」にも寄っておこう。この大宮公園、現在ある県営公園の中では最も古い上に、敷地内にはサッカー場・野球場・陸上競技場・

水泳競技場・弓道場・小動物園・児童遊園地・日本庭園……と、大方の娯楽が揃っている。守備範囲広すぎだろ！老若男女を種々の遊戯で楽しませる気かい！！しかもその広さは67.8ha（東京ドーム14.5個分）と、こちらも伊達じゃない。……って、え？その東京ドームに換算するやつ全然分かりやすすくない？……じゃあ世界一小さい国であるバチカン市国1.5個分ってのどう？……まだ分かりにくい？あー！もう分かったよ！もしこの土地の値段が全部銀座の一等地の地価（5300万円/㎡）と同じだったら、36兆円（日本の2023年度国家予算は114兆円）になるっていうのでピンとくる！？…あ、くるんだ。なんで？？？……まあいいや。とにかく、この大宮公園を抜けて「盆栽美術館」に向かいます。……あ！今、「盆栽とかwww」ってバカにしたらだろ！そういうのホントによくないからな！食わず嫌いするな！ちゃんとピーマンとかも食べろ！ちなみにへタが五角形じゃなくて六角形のものを選ぶと苦味が少ない傾向があるといわれているぞ！参考にしろよな！！……えーっと、盆栽美術館の話でしたっけ。というか、そもそもなんで大宮に盆栽の美術館があるのかってことだけど、もともと大正時代くらいまでは東京都文京区の千駄木にある団子坂という場所に植木屋が多く集まっていたらしい。しかし1923年に関東大震災が起こると、それをきっかけにもっと広くて空気の綺麗な場所に移動しようということになり、今の大宮周辺に盆栽業者が村を作ったそう。そのため、このあたりには盆栽町という地名が残っている。これは別名とか愛称ではなく行政上のれっきとした地名なので、ハガキを書くときに「埼玉県さいたま市北区盆栽町〇〇-〇〇」としなければならない。全国を探しても、ここまでレアな地名というのはそうないんじゃないか。あくまで体感上での話だが、この盆栽町には手入れが行き届いた庭付きのお宅が多いような気がした。やはり植木屋がルーツにある地域のため、庭の手入れには気を遣っているのだろうか。

盆栽町を過ぎると、目的地である「大宮盆栽美術館」が。よし！早速見学するぞ！まずは盆栽の基礎知識を「コレクションギャラリー」で学ぶ。なるほど、一口に“盆栽”といっても、盆器や水石などの要素が組み合わさっているのか〜。それに、枝を針金で矯めたり、ハサミで剪定したりしながら育てていくのね〜。他にも樹種や形態の違いなんか重要な要素になるみたい。それじゃあ、ある程度盆栽について造詣を深めたところで盆栽庭園に行って、実際に様々な盆栽を鑑賞するぞ！

こんな立派な、ザ・盆栽という風格のものや、



▲五葉松「千代の松」。写真では伝わりにくいですが、高さが1.6mもあり存在感がすさまじい。

めちゃくちゃ飛び出している盆栽、



▲五葉松「青龍」。名前まで含めて個人的に好み。佇まいが勇ましさに満ちている。

石から生えている盆栽……



▲五葉松。まさか石から生えている盆栽があるとは思わなかった。

など、それぞれに個性があり、期待を遥かに超える面白さだった。その後見学を終えた地理部一行が受付で目を付けたのは、「盆栽だー！！」というサイダー。このユーモアが妙にハマったのか、皆こぞって飲んでいた。



▲「盆栽だー！！」を飲む部員たち。ユーモアはこれくらいの温度感が丁度いいのかもしれない。

「盆栽だー！！」で体力を回復した地理部が次に向かうのは「見晴公園」！……と言いたところだが、時間が押しているため今回は断念。見沼代用水という、水田開発のために江戸時代につくられたため池を見る予定だったが、これはまた別の機会にということで……。それじゃあ最後に行く予定だった「鉄道博物館」に向かうぞ！そのためにまずは土呂駅へ。



▲土呂駅前のロータリー。盆栽をイメージした木が生えていた。

大宮駅で乗り換え、鉄道博物館駅まで埼玉新都市交通伊奈線（ニューシャトル）に乗車する。このニューシャトル、なかなか珍しいタイプの電車で面白い。まず、電車といっても鉄のレールの上を走るのではなく、ゴムタイヤでコンクリートの道を走っている。そのため、通常の電車とは大きく乗り心地が違う。また、東北・上越新幹線の高架の張り出し部分を走行しており、普段なかなか見られない景色を見ることができるのだ。



▶鉄道博物館に行く際に利用したニューシャトル。レールが無く、通常の電車とは異なっているのがわかる。

そんなニューシャトルに乗ってやってきたのは、「鉄道博物館」！



▲てっぱくといったらこれ！という写真。中に入れる車両もあり、ここだけで一日中楽しめるボリューム。

特に鉄オタとかではない僕でさえテンションが上がってしまう、この鉄道博物館（てっぱく）。かつて活躍した車両の展示やミニ列車の運転体験、電車の仕組みに関する展示など、正直 1~2 時間では楽しみきれないほどの規模を有している。小さい子供はもちろん大人でも楽しめるような展示がたくさんあり、とても面白かった。まだまだ行けていない施設や展示もあるため、時間の余裕がある時にまた来たい。てっぱくを時間いっぱい楽しんだ地理部はもう一つの班と合流し、大宮駅で解散となった。今回の巡検では鉄道の街としての大宮や、氷川神社の門前町としての大宮、盆栽の街としての大宮など、大宮という街の様々な側面を見ることができ、とても有意義なものとなったと思う。また、過去に訪れた松本・諏訪や横浜などとの関わりも多く発見でき、地理部ならではの学びができたのではないかと思う。読者の皆様においても、この旅行記、ひいてはこのちりレポを通じて何か得るものがあつたならば幸いだ。それではこの辺で当大宮巡検の旅行記は締めくくらせていただこうと思います。ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました！

【おまけ】大宮でもポケモン！

こちらは、鉄道開業 150 周年を記念して JR 東日本の駅で行われている「#ポケジェニック」の一つ。ちなみにお忘れ物の欄のモンスターボールの日付が 10/14 となっているのは、1872 年の 10/14 に鉄道の開業式が行われたからだそう。鉄道好きにとってもポケモンファンにとっても垂涎ものの「#ポケジェニック」だが、公式サイトによると実施期間は 2023 年の 3 月下旬までとなっているため、当ちりレポが発行される頃にはすでに終

了してしまっているかもしれない。その場合は……ごめんなさい！だよな、オーロンゲ。

▼オーロンゲの どげざづき！



▼きゅうしよに あたった！

……とにかく完全に趣味のおまけでした！みなのものも、良きポケモンライフを！

終

8. 旅行記④

文責：吉田 駿平

朝 10 時大宮駅に集合、今回は珍しく遅刻者が出なかった。しかし部員たちの模範となるべき部長が事前に告知されていた鉄博のチケット購入をすっかり忘れていた模様。1人コンビニで買うこととなった。電車で一駅進み 10 時 35 分、さいたま造幣局博物館に到着した。造幣局は四年間地理部に所属している私も初めて行くので非常に楽しんでいた。展示コーナーの前に実際に貨幣が入った袋が置いてあり、最も重かったのが 100 円玉で 10 万円ほどだった。10 万円程度で両手で持つのがやっとだったのだから、金は命よりも重いというのはあながち間違いではないのかもしれない。展示では貨幣の製作過程や偽造の対策などが展示されていた。非常に高度な対策だったのでいくら金に困ったとしても偽造だけはしないようにと思った。その名の通り貨幣しか作っていないと思っていたがそうでもなく、勲章の作成も行なっていることがわかった。本来なら工場見学ができるはずだったのだが当日はやっておらず見る事が叶わなかった。また電車で大宮に戻りさいたま市立博物館に向かった。道中、市川、佐々木と昼ごはんの話となり、近くに住んでいるらしい元地理部員の斉藤シュウマの情報により美味しいラーメン屋の情報を手に入れることができた（ありがとう幽霊部員）。さいたま市立博物館ではさいたま市の過去から現在に至るまでの様々なものが展示されていた。中 1 で歴史担当が大

畑先生だった人には懐かしい石棒も展示されていた。中でも米俵は凄まじかった。米俵を持ち上げる場所があったのだが最大まで入れたものでないにもかかわらず一瞬持ち上げるのがやっとなほど重かった。高一全員チャレンジしたが皆同じような結果となった。昔の日本人の身体能力は半端じゃなかった。そして移動を挟み待ちに待った昼休憩。斉藤から教えてもらったラーメン屋に行った。オシャレで落ち着いた雰囲気のお店だった。ラーメンも美味かったがここでラーメンのスープを飲むか飲まないかの話となった。2対1で飲む派に軍配が上がった(二人ともなんで私よりも痩せているんだい?) 昼休憩も終わり巡検再開と行こうとしたが来ない、後輩が来ない。もう一方の班の方では部長がサイゼリアで頼んだメニューが遅れたため、集合時間を変更していた。(こんな暴挙が許されていいのだろうか?) そんなこんなで滑り込みで後輩たちは間に合い、氷川神社へといった。いつものお賽銭とおみくじであったが、このおみくじが普通とは違っており平吉というものが入っていた。市川が御朱印帳を押してもらっている間、佐々木とターゲットの友をやっていた。わからない問題の方が多く自分の勉強不足を痛感した。お次は盆栽美術館へ行った。元々皆あまり興味がなく、計画時でも優先度の低いものとして扱っていたが、入れておいてよかった。盆栽といってもさまざまな種類がありイメージの盆栽が盆栽の中では種類のうちに過ぎないと知った時は驚いた。盆栽だーというサイダーも売っておりかって飲んだ。鉄道博物館では疲れてきており、座席に座るための口実に列車の中に入りまくり休憩をした。途中で別の班とも合流した。長谷山は鳥に糞をかけられていた。(運のない男だ)道中、アバターを作る機械があったのだが佐々木とふざけて作っていたらとんでもないモンスターが生まれた。しかもその作ったアバターはその機械に保存されるらしくそのモンスターが私として野に解き放たれた(悪夢だ)。そんなこんなで巡検は無事に終わった。鉄道博物館のような大きな施設に行くのはひさびさであり存分に楽しむことができた。

<参考資料>

大宮公園の歴史

<https://www.pref.saitama.lg.jp/omiya-park/oshirase/h30/history-omiya.html>

大宮公園 <https://www.pref.saitama.lg.jp/omiya-park/>

「大宮盆栽村の誕生～100年のあゆみ」さいたま市大宮盆栽美術館 令和3年3月31日

「大宮盆栽美術館のパンフレット」さいたま市大宮盆栽美術館 2022年10月

<https://kokomachi.sumail.com/mu-omiya/122>

<https://toyokeizai.net/articles/-/249813>

<https://diamond.jp/articles/-/287382>

<https://toyokeizai.net/articles/-/249813?page=2>

第六章

上野・浅草を巡る (2023年6月4日)



1. 浅草概要

文責：齋藤 秀真

浅草は隅田川や東京最古の寺である浅草寺の影響で古くから栄えた地域だが、1656年に吉原遊郭が浅草三谷町に移転してくると、江戸随一の遊興地としてさらにその存在感を増した。明治時代には劇場が次々と建設され文化の最先端の町としての地位を確立。1913年に関東大震災が起きると六区は焼失し遊興地としての側面は失われたが、日本で初めて映画館を建設するなどして最先端の町であり続けた。しかしテレビの台頭により映画館は減少していき、今となっては映画館の数は0。最先端といったイメージは持たれずにいる。現在の浅草は、風情あふれる古き良き日本らしい建物が多く現存し、三社祭や隅田川花火大会などの大規模なイベントも開催されるため、日本人だけでなく外国人に人気だ。実際、巡見時も仲見世通りでは着物を着たり人力車に乗ったりして楽しむ外国人観光客を多く目にした。仲見世通りには土産屋や食べ歩きグルメの店が立ち並び、歩くのも一苦労なほどの大勢の人が。一方で、一本道を外れホッピー通りに出ると昼間からお酒片手にのんびりと語り合う人々が、そして、もう少し奥に進むと若者向けのおしゃれな店の数々。花やしき通りには遊園地。少し散歩をするだけでここまでの非日常感や様々な衝撃を与えてくれる。年齢や国籍関係なく楽しむことができるこのごちゃごちゃ感こそが現在の浅草の強み、最大の良さだと感じた。



【写真：混雑する仲店通り】

撮影：齋藤 秀真

2. 隅田川

文責：遠藤 壮一郎

<位置関係> 「隅田川」は、東京都の東部を流れる全長23.5kmの一级河川である。荒川の分流であり、北区の岩淵水門で荒川から分かれ、北区、足立区、荒川区、墨田区、台東区、江東区、中央区内を蛇行し、最終的に東京湾に注いでいる。現在では、隅田川という表記で統一されているが、明治時代以前は住田川や角田川、墨田川など色々な書き方が混在していた。

<墨堤の桜> 第8代将軍徳川吉宗が植樹した「墨堤の桜」は、都内屈指の桜の名所である。墨堤とは、枕橋辺りから木母寺辺りまでの隅田川東岸の土手のことを指す。隅田川は江戸時代には今より水量が多く、頻繁に氾濫していた。そこで、徳川吉宗が、後に

「墨堤」と呼ばれる堤を築き、桜 100 本を植えて行楽地化を図った。一説には花見客が歩き回って土手を地固めさせる狙いだったといわれている。ちなみに、墨堤沿いにある「長命寺」の門番をしていた山本新六が、1717 年、土手の桜の葉を樽の中に塩漬けにしたもので餅を包み、長命寺の門前で販売したのが桜餅の元祖である。

<花火大会> 1732 年、「享保の大飢餓」により多数の餓死者が出た。将軍吉宗は翌年、犠牲の慰霊のため隅田川で水神祭を催した。その時に花火を上げたのが「日本最古の花火大会」といわれ、後々に続く「両国の川開き」という花火大会になった。名前に「両国」とあるように、元々は両国橋の上流付近で打ち上げられていたが、あまりの交通渋滞のために、さらに上流の「桜橋～言問橋間」（第一会場）と、「駒形橋～厩橋間」（第二会場）で打ち上げられるようになった。現在は「隅田川花火大会」と呼ばれており、約 2 万発もの花火が夜空を彩っている。

<隅田川に架かる橋> 隅田川には江戸時代、幕府が防衛上の理由でわずか 5 カ所の橋しか作ることを許可していなかった。「千住大橋」と「両国橋」と「新大橋」と「永代橋」と「吾妻橋」の 5 つである。しかし現在は、千住大橋から勝鬨橋までの間に全部で 16 の橋が架かっている。

「千住大橋」は、1594 年に架橋された隅田川の最初の橋である。千住大橋は松尾芭蕉が「奥の細道」の旅の始まりの句を詠んだ場所で、橋のもとには記念碑が建っている。

「両国橋」とは、「武蔵野国と下総国」の二つの国を結ぶ橋という意味である。相撲の「国技館」の場所は、戦前はこの橋の下流側の両国 2 丁目に、戦後は蔵前 2 丁目・両国横網 1 丁目とこの橋の上流側にあった。

「新大橋」は、元々は木橋だったが、1912 年に鉄橋化された。この新大橋は、1923 年の関東大震災で隅田川の橋の中で唯一落橋しなかったために多くの人が助かり、お助け橋とも呼ばれた。

「永代橋」は 1698 年に架けられた橋だが、これは現在より 150m ほど上流にあった。1774 年に木橋として架けられた「吾妻橋」は、1887 年、隅田川では最初となる鉄橋に架け替えられた。明治の近代化を象徴するトラス式の橋は、新たな東京名所として錦絵や絵葉書のテーマとなった。都の「隅田川著名橋の整備」事業により、橋の欄干や橋灯の色は、近くにある「浅草寺」や「雷門」を思わせる赤で統一された。

現在隅田川には、さらに「清洲橋」や「中央大橋」、「佃大橋」、「勝鬨橋」、「駒形橋」、「厩橋」、「蔵前橋」など、個性的な橋が並んでいる。

【写真：隅田川西岸から東京スカイツリーを望む】

撮影：遠藤 壮一郎



3. 隅田公園

文責：薛 文森

① 概要

隅田川の両岸にあり、隅田川と北十間川の交差点に当たり、河川舟運にとって好都合な場所にあった。江戸幕府の徳川吉宗が堤を民衆に開放したことがルーツで、大正の関東大震災の帝都復興事業の一環、震災復興公園として整備された。幅約1kmあり、また戦災で家族を失った人たちが働いていたことから名づけられたアリの街や、江戸時代に隅田川を往来していた竹屋の渡しなど、歴史的に貴重な碑が建てられている。

② すみだリバーウォーク

隅田公園の台東区側とそよ風広場を結ぶ長さ160メートルの橋。隅田川の水面や運航中の船を眺めることができるほか、東武伊勢崎線が間近に見える。

【写真：すみだリバーウォーク】

撮影：薛 文森



③ 水戸徳川家小梅邸跡

水戸徳川家の江戸下屋敷・小梅邸の庭園を改修してできた池泉回遊式庭園。明治8年(1875)宮中花宴として明治天皇の小梅邸行幸がされていて、関東大震災の発生により小梅邸は一時灰燼に帰したものの、単なる広場には無い、日本庭園の木々や池が人々を救

ったと考えられ、震災復興により復元されます。しかし、第二次世界大戦の爆撃により再度被害を受け、さらに首都高速建設の際に南側の池が埋め立てられてしまい、規模が縮小してしまっ



【写真：水戸徳川家小梅邸跡】

撮影：薛 文森

④ 北十間川

隅田川と旧中川結び、東京都墨田区、江東区を流れる全長3.24kmの運河。隅田川から分かれ、横十間川を南に分け、墨田区と江東区の区境を東西に横断し、旧中川へと注いでいます。江戸時代に開削され、江戸城の築城、城下町づくりの物資を運び入れた当時の物流の非常に重要な運河の一つ。



【写真：北十間川】 撮影：薛 文森

⑤ 東京ミズマチ

2020年6月に完成、接する東京スカイツリータウンの東京ソラマチと合わせ、水辺の街であることをわかりやすく表す名前。ディスティネーション型水辺空間開発であり、国内外の宿泊需要に対応するコミュニティ型ホテル、公園と川の環境と一体化した新業態のレストランや、スポーツと一緒にカフェが楽しめる開放的な施設など14店舗が出店。

【写真：東京ミズマチ】

撮影：薛 文森



4. 雷門

文責：池田 鴻平

門の表に風神と雷神が祀られているのは有名だが、裏にも神様が祀られており、右には「金龍」の「天龍」の龍神像が祀られている。またこれら四神は浅草寺の護法善神として、伽藍守護・天下奉平・五穀豊穰の守り神とされている。

金龍像と天龍像は龍神を男女2体に擬人化したもので、金龍像は裏から見て右側に奉納されている。また金龍像は裙(くん)を履き、胸飾をつけ左手に銀珠を持つ女神像である。像は白色を中心に彩色が施され、材料には木曾檜が用いられている。天龍像は裏から見て左側に奉納されている。また天龍像は皮の腰鎧をつけ、右手に独鈷杵(とっこしよ)左手に金珠を持つ男神像である。青色を中心に彩色が施され、材料には木曾檜が用いられている。因みに金龍像は274cmで200kgある。天龍像は293cmで250gである。



【写真：(左) 天龍像 (右) 金龍像】

撮影：池田 鴻平

5. 仲見世商店街

文責：野口 琉也

台東区浅草の仲見世は、浅草寺の参道に栄えた商店街である。現在はこの商店街自体が人気の観光スポットとなり、日本だけでなく海外からも毎年多くの観光客で賑わっている。雷門から宝蔵門までの約250メートルに合計で89店舗が軒を並べており、さまざまな和菓子と工芸品が売られている。人形焼や雷おこしに、金平糖、ぬれおかき、羽子板、かつらにかんざしと、数えきれないほど多くの品がある。



【写真：仲見世商店街】

撮影：野口 琉也

写真のように雷門から一直線に店が並んでいた。2年前に行ったときとは異なり、新型コロナウイルスによる規制も明け始めたことでどの店も多くの観光客で混雑していた。店の看板は英語で書かれているものもあり、海外からの観光客にも対応できるようにしていた。また、食べ歩きをしている人も多く、そのような観光客が浅草に活気をもたらしていた。店の入口には赤色の提灯や、「仲見世」という文字の看板が並んでおり、これらの日本らしい装飾が施されていることもこの仲見世商店街の魅力の一つなのではないかと考えた。

6. 谷中銀座

文責：市川 洸太

谷中銀座は、台東区谷中にある、昭和20年(1950年)代から続く商店街である。170mほどの長さに60余りの店が立ち並び、その下町の風情溢れる景色は国内外で評判となっている。また、この谷中銀座で有名なのが「夕やけだんだん」という階段で、その名の通り夕焼けの名所として知られる。この付近の下町エリアである、谷中・根津・千駄木を指して「谷根千」と呼ぶこともあり、谷中銀座と合わせて下町散策の中心となっている。



【写真：夕やけだんだんから望む谷中銀座】撮影：市川 洸太



【写真：下町の雰囲気が残る谷中周辺の風景】

撮影：市川 洸太

7. 神田明神

文責：市川 洸太

神田明神は千代田区外神田にある神社であり、正式名称は「神田神社」である。大己貴命(おおなむちのみこと)(だいこく様)、少彦名命(すくなひこなのみこと)(えびす様)、平将門命(たいらのまさかどのみこと)の三柱を祭神として祀っている。なお、かつて徳川家康が関ヶ原の戦いに臨むにあたってこの神田明神で祈祷を行ったところ、神田祭の日である9月15日(これは旧暦であるため現在は異なる)に見事勝利を収めたということから、江戸時代には徳川家をはじめ庶民からも「江戸総鎮守」として篤く信仰を受けた。明治時代には、東京近郊の主な十二社である准勅祭社(じゅんちよくさいしゃ)にも



【写真：随神門】

撮影：市川 洸太

選ばれ、明治天皇が参拝したこともあった。その後は関東大震災や第二次世界大戦時の空襲による被害を受けながらも、その度に再建され今に至る。アニメ文化の発信地である秋葉原が近いこと、アニメの舞台となることも多く、現在ではアニメ好きから聖地として巡礼されることもある。神田明神側も積極的にアニメ等とコラボしており、神田祭でコラボの授与品を販売したり、「アニソン盆踊り」と題したイベントを開催したりと、時代の流れに合わせた姿が印象的である。

8. 湯島聖堂

文責：吉田 駿平

湯島聖堂は1660年に5代将軍徳川綱吉が儒学の振興のために湯島の地に建てられた聖堂であり、「儒学の創設者」として知られている「孔子」を始め孟子、顔子、曾子が祀られている霊廟である。1797年に幕府直轄学校として「昌平坂学問所」を開設、明治維新に湯島聖堂は幕府から新政府へ所轄が移り大学となるも1871年に廃止され代わりに文部省が置かれることになった。1872年に東京師範学校、1874年に東京女子師範学校が設置された。これらの学校はのちに筑波大学、お茶の水女子大学となった。1922年に国の史跡に指定されるも翌年の関東大震災により入徳門と水屋を残し全て焼失した。1935年に寛政時代の状態を模した形で鉄筋コンクリート造りで再建された。これにより、入徳門や水屋とほかの建築物を比べてみるとその差は歴然である。境内には、孔子の銅像がある。聖堂内では他の孟子、顔子、曾子、子思の銅像など焼失したものを復元したものが飾られており、復元の工程を記したものも展示されている。



【写真：湯島聖堂】

撮影：河合 道祐

9. 旅行記

文責：長 遙人

こんにちは。6月2日（巡検2日前）に卓球部から間一髪滑り込みで地理部への入部を果たした高校2年の長です。この度、僕にとって最初で最後（！？）になるかもしれない巡検の旅行記を書くことになりました。といっても、「旅行記」が何なのかよく分からぬままに、自ら進んでこの当番になってしまったため、あとで旅行記は文章を多く書き、割と大変なものだということを知った時は、過去の自分を恨みました（あの時

やんと周りに聞いておけばよかった…。)。ですが、僕は卓球部（しかも部長）という立場を投げ捨ててまでこの地理部に入ったわけです。それくらいの重責を背負わないと意味がない！……と自分に言い聞かせ、涙目になりながら旅行記の執筆を始めました。

（以下、旅行記の内容です）

6月4日の朝9時過ぎ、最後の一人が待ち合わせ場所である上野駅・翼の像前に到着し、全員が無事に揃った。予定時刻から若干の遅れはあったが、それを見越して行程表も少し余裕をもって作られていたので、全く問題なく巡検がスタートした。若干のミーティングを挟んだ後、早速部員たちは上野班と浅草班の二手に分かれ、それぞれが最初の目的地に向かった。僕たち浅草班は東京メトロ銀座線に乗り、最初の目的地である隅田公園へと進んだ。

隅田川に着いた浅草班一行は、隅田公園からすみだリバーウォークを通過してスカイツリーを目指した。

【写真：隅田川とスカイツリー】

撮影：長 遙人



（隅田川、けっこう汚い・・・？）

すみだリバーウォークを通った時の感想だが、写真にもある通り、隅田川が汚れている。後にネットで調べてみると、それでも昔よりはマシになっているらしく、ちょっと驚いた（昔の隅田川、どんだけ汚いんだ）。また、スカイツリーに向かう道中、不思議なモニュメントを発見した。

【写真：謎のモニュメント】

撮影：長 遙人

これは、「『ササエル』GTS 観光アートプロジェクト」というもので、G=東京藝術大学、T=台東区、S=墨田区が連携して浅草と東京スカイツリーの周辺地域の魅力を発信する、というものなんだそう（ネット情報）。突然現れたおかしな像に、皆写真をつい撮りまくってしまった。

こんな話で盛り上がっているうちに、スカイツリーの下あたりまで来た。



【写真：スカイツリー】

撮影：長 遙人

(下からだとてっぺんが見えない。さすが 634m！)

スカイツリーの下にある東京ソラマチのほうに来ると、さすがに外国人観光客の姿が多く見られるようになってきた。最近ではコロナも落ち着いてきたのでそのおかげかな～、とか考えながらスカイツリーの中に入ると、なんと入場待ちの長蛇の列！（まあ、休日の日中

なので当たり前だが）。長くなるかなーと思ったが、事前に前売りのチケットを購入していたおかげで意外とスムーズに通過。すぐに列に並ばされ、そのままエレベーターで一気に地上 350mまで急上昇！（気圧の変化によるものかは分かりませんが、耳が変になる「あの現象」が起きたような、起きてないような）地上 350mの展望デッキからは東京はもちろん、千葉など少し遠くのほうまで見渡せた。



【写真：スカイツリー展望デッキから千葉方面】 撮影：長 遙人

(よく見ればディズニーも見える?)

展望デッキまでいくと、とうとう外国人観光客だらけになった。スカイツリーは世界中から沢山の人が訪れる、世界でも有数の観光地であることを、身をもって体感した。また、展望デッキ内にはガラス床のゾーンがあり、なかなかの怖さでもう行きたくないと思ってしまった。（実をいうと、そのときこのガラス床のゾーンでカップルがきゃあきゃあやっており、その光景を見たときに生粋の男子校生である僕は強烈なストレスを感じたため、もう行きたくないと思ってしまったのかもしれない……。悲しい）そうこうしているうちに予定の時間が近づいてきたため、エレベーターで下に降りて、そこから昼食のためにいったん解散した。

解散後、高2の4人は東京ソラマチ内にあるつけ麺屋「六厘舎」で昼食をとることにした。だがしかし、日曜日の昼間ということで東京ソラマチはかなり混雑していて、この店も同様に、かなり混んでいた。そこで、急遽予定を30分後ろ倒しにすることを決め、その旨をLINEで全員に共有した。（さすがに 昼食 → スカイツリーから雷門まで移動 を1時間で行うのは無理だった。計画ミス！）20分ほど並んでようやく注文できるところまで進み、お腹を空かしながら「つけめん」を頼んだ。



【写真:つけ麺屋六厘舎の『つけめん』】

撮影:長 遙人

麺は太麺で、スープは豚骨系。写真を見ると分かるが、海苔の上に何か粉末が乗っている。これは魚介系・煮干しの粉末で、これを混ぜるとまた違う風味が楽しめるというものだった。つけ麺自体あ

まり食べたことがなかったが、結構おいしかったのでまた食べたいと思った。昼食を済ませた後、4人は急いで雷門に向かった。

若干の遅れは生じたが、無事に全員が雷門前で集合することができた。ここからはまた解散し、各自で雷門の見学をした。



【写真:雷門】 撮影:長 遙人

(外国の人が多かったな～)

スカイツリーと同じく観光客が非常に多く、さすが日本を代表する観光地だなと思った。雷門を通過して仲見世通りに入ると団子、雷おこし、人形焼などなど、様々なものが売られていて、食べ歩きしている人も多く見られた。仲見世通りを抜けると浅草寺があ



【写真:浅草寺本堂】

撮影:長 遙人



【写真:本堂内の天井】

撮影:長 遙人

り、そこもたくさんの人で賑わっていた。僕たちは「神社に来てやることといえば1つしかない!」と思い、おみくじに直行した。3人が引いたところ、なんと3人とも凶だった。怖いです。(このせいでこの後の巡検は常にビクビクしながら回ることになりました。) 3人揃っておみくじを結んだところで、浅草寺の本堂へ向かった。本堂の中も人で埋め尽くされており、なかなか前に進めなかった。本堂の天井には龍や天女?が描かれていた。(後で調べてみると龍→龍之図、天女→天人之図といわれるものでした) お賽銭を終えた後は、次の集合場所である「浅草きんぎょ」に向かった。



【写真：金魚すくい中の様子】



【写真：店前の看板】

撮影：長 遙人

「浅草きんぎょ」は金魚すくいと金魚雑貨の専門店でお祭り商店街・西参道の入り口近くにある。すべての場所で書いているような気もするが、ここも例に漏れず混んでいた。「浅草きんぎょ」を30分ほど楽しんだ後、伝法院に向かった。が…………

なんと伝法院に入れなかった!なぜかというところ、そもそも伝法院は一般公開されている期間しか入場できず、さらに伝法院は2028年まで工事中らしく、絶対に入ることができない状況だったのだ。仕方がないので浅草班は再度集合したところで、我らが顧問、斎藤先生の迅速な決断により、急遽かっぱ橋道具街の方を回ることになった。



【写真：浅草公会堂にある著名人の手形】

撮影：長 遙人

(完全に僕の趣味なので読み飛ばして頂いて結構ですが、写真右下の手形の八代亜紀さんは映画『ファインディングドリー』に「八代亜紀」役で出てます。役に立たないプチ情報でした)

浅草公会堂の横を通って手形を流し見しつつ、かっぱ橋道具街に向かった。



【写真：『ニイミ』のシンボルの巨大コック】 【写真：かっぱ橋道具街入り口？】

撮影：長 遙人

かっぱ橋商店街には包丁、調理器具、食器など、プロが使うようないろいろな道具が取り揃えられていて、とても興味深かった。先生曰く、外国の方に人気で、外国の方を連れてくるととても喜ばれるそう。また、見上げると、皆さんが一度は見たことがあるであろう「ニイミ洋食器店」のシンボルであるあの巨大コックを見ることができた。（なぜこのようなものを作ったのだろうか？）

かっぱ橋道具街を見終わったところでついに巡検の全行程が終了し、一日の疲労を抱えながら、歩いて朝の集合場所であった上野駅・翼の像前まで戻った。終了予定時刻の16:00を少し過ぎたところに浅草班、上野班ともに解散場所まで集合することができた。最後は部長の「ちりレポを書くまでが巡検です。お疲れさまでした！」というどこかで聞いたことがあるようなないような言葉で今回の巡検は幕を閉じた。

ということでこの旅行記は終わりますが、いかがだったでしょうか。僕の感想としては、事前に調べてきた場所はもちろんですが、思いがけないところから新たな発見を得ることが多くあり、これが巡検・フィールドワークの良さだなと思いました。そろそろ「ちりレポ」の提出の時間が迫ってきたので、この辺で失礼させていただきます。最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

<参考資料>

<https://www.sankei.com/article/20220919-RFXSGEXG2VJUXFLFRPLCN30XWU/>

<https://www.mizu.gr.jp/kikanshi/no57/03.html>

<https://san-tatsu.jp/towns/81438/>

<https://geo.8984.jp/mansion/tokyo/plat/townguide/1655/>

https://www.chiikishigen.metro.tokyo.lg.jp/introduction/details/Introduction_31.html

<https://www.city.koto.lg.jp/103020/bunkasports/bunka/bunkazaisiseki/kenzobutsu/17343.html>

<https://parknavi.info/sumida#f>

<https://tokyo-trip.org/spot/visiting/tk0660/>

<https://zuito.hatenablog.com/entry/20170614/1497459473>

<https://www.tokyo-mizumachi.jp/>

<https://www.fashion-press.net/news/58775>

https://www.google.com/url?sa=t&source=web&rct=j&url=http://www.asakusa-nakamise.jp/&ved=2ahUKEwi0xczRz6v_AhXGp1YBHfoGD6gQFnoECDwQAQ&usg=A0vVaw0NAKrTcJMzIuw2qZ2QrpWZ

https://www.google.com/url?sa=t&source=web&rct=j&url=https://jp.hotels.com/go/japan/nakamise-shopping-street-tokyo&ved=2ahUKEwi0xczRz6v_AhXGp1YBHfoGD6gQFnoECDoQAQ&usg=A0vVaw2UyYe8COpOPEI Iabnvqazc

https://www.google.com/url?sa=t&source=web&rct=j&url=https://e-asakusa.jp/information/1352&ved=2ahUKEwi0xczRz6v_AhXGp1YBHfoGD6gQFnoECDkQAQ&usg=A0vVaw146BG87Ub1XV9CSN2sifRX

第七章

付記



2023（令和5）年度 地理部員紹介

【難関大学目指し孤軍奮闘中!!】

◎高校3年生：坂本 佳翼

【先輩に続け!!現役部員】

◎高校2年生

○A組 市川 洸太（副部長）

○B組 齋藤 秀真

○C組 犬島 伸遥（動画編集）

○D組 長谷山 悠斗（部長）

○E組 吉田 駿平（書記）

○I組 河合 道祐（編集長）

○I組 佐々木 秀真

◎高校1年生

○E組 鈴木 統介

○E組 雨谷 彰悟

○F組 平塚 雄人（副部長）

○G組 池田 鴻平

○H組 榎本 眞鑑

○H組 野口 琉也

◎中学3年生

○A組 近藤 琉生

○A組 塚崎 瑛登

○B組 水谷 颯

○C組 新井 友翔

○E組 田畑 裕理

○F組 遠藤 壮一郎

○G組 安藤 隼太郎

○G組 薛 文森

◎顧問

○大畑 由生

○村田 祐介

○齋藤 譲司

2022 年度地理部・写真部 春合宿要項

日 程 3月30日(木)～3月31日(金) 1泊2日

宿泊場所(旅館名): 箱根高原ホテル

住 所 : 〒250-0522 神奈川県足柄下郡箱根町元箱根164

行 程 往路3月30日 はこね5号 新宿駅発8:31 → 箱根湯本駅着10:17
復路3月31日 はこね64号 箱根湯本駅発17:02 → 新宿駅着18:28

集 合 **小田急新宿駅 南口改札 8:00(厳守)**

(甲州街道の方の改札, JR線の南改札を出て右側です。)

解 散 小田急新宿駅 西口地上改札付近 18時30分頃

合宿中にかかる費用: **総額 6,000円程度**

(内訳) 施設の入館料等・・・¥2,000程度 2日間の昼食代・・・¥2,000程度

その他お土産代など・・・¥2,000程度

(現地交通費は箱根フリーパスを利用します。)

緊急連絡先 : 大畑携帯××× 齋藤携帯×××

持ち物

健康保険証写・上記合宿中にかかる費用・生徒手帳・筆記用具・帽子・水筒・2日目の着替え・雨具(レインコートと傘を両方準備すると◎)・常備薬・洗面用具・感染症と熱中症対策用品・デジカメやスマートフォンなど記録できるもの・**レジュメ・フィールドノート・体温計**

留意点

・持ち物について:

行程中は全ての荷物を持って行動することになります。荷物は最低限にまとめ、身動きがとりやすいようにして下さい。キャスター付きバッグは禁止です。

・服装について:

私服で構いません。いつもの巡検と同様、「脚」を使った調査です。動きやすい服装, 履き慣れた靴で参加して下さい。

・感染症対策について:

感染症対策については、以前にお知らせした通り、学校の宿泊行事での対応に準拠します。昼食時は一時解散をしますが、昼食は感染症対策を行っている店を選び、黙食をお願い致します。合宿当日の朝に検温を行い、体調がすぐれない場合は無理をしないようお願い致します。また、合宿中も毎朝検温を行いますので体温計を持参して下さい。

2023 年度地理部 夏合宿要項

日 程 8月2日(水)～8月4日(金) 2泊3日

宿泊場所(旅館名): 民宿「かみの家」

住 所 : 〒981-0412 宮城県東松島市宮戸字月浜 16-1

行 程 往路8月2日 やまびこ 205号 東京駅発 7:44 → 仙台駅着 10:05

復路8月4日 やまびこ 150号 仙台駅発 16:44 → 東京駅着 18:48

集 合 JR 東京駅 **「銀の鈴」広場 7時20分** (厳守)

(**改札内の地下中央通路**にあります。事前に場所を確認しておくこと。)

解 散 JR 東京駅 八重洲中央口付近 19時00分頃

合宿中にかかる費用: **総額 10,000 円程度**

(内訳) 市内見学の交通費・・・¥3,000 程度

施設の入館料等・・・・・・¥2,000 程度 (笹かま体験は1人¥1,000 かかります)

初日と3日間の昼食代・¥3,000 程度

その他お土産代など・・・¥2,000 程度

緊急連絡先 : 大畑携帯××× 齋藤携帯×××

持ち物

健康保険証写・上記合宿中にかかる費用・生徒手帳・筆記用具・**帽子・水筒**・2日分の着替え・**濡れても良い格好(漁業用、体操着が無難)**・雨具(レインコートと傘を両方準備すると◎)・タオル類・常備薬(乗り物酔いしやすい者は酔い止め薬など)・洗面用具・熱中症対策用品・デジカメやスマホなど記録できるもの・**レジュメ・フィールドノート**

留意点

・持ち物について:

初日と最終日は、全ての荷物を持って行動することになります。荷物は最低限にまとめ、身動きがとりやすいようにして下さい。キャスター付きバッグは禁止です。

・服装について:

私服で構いません。いつもの巡検と同様、「脚」を使った調査です。動きやすい服装、履き慣れた靴で参加して下さい。

・熱中症対策について:

2日目の午前に漁業体験、午後に語り部さんとのフィールドワークがあります。水分補給が出来る準備を万全に整えて下さい。**被災地は思っている以上にお店も自販機もありません。**高気温で、フィールドワークの実施が難しくなった場合、途中で中止し、宿へ引き返す可能性があります。

合宿中の行程

〔8月2日〕

東京駅 7:44 発⇒やまびこ 205 号⇒仙台駅 10:05 着

仙台駅 10:29 発⇒仙石線⇒本塩釜駅 10:58 着

12:00～12:50 **松島湾 語り部クルーズ**

13:00～14:30 **昼食 + 松島自由散策**

松島海岸駅 15:10 発⇒仙石線⇒野蒜駅 15:28 着→送迎バス→宿 16:00 頃着

〔8月3日〕

6:30～7:30 **漁業体験「かご漁」**

宿 10:30 頃発→観光バス→道の駅「硯上(けんじょう)の里おがつ」11:40 頃着

12:00～13:00 **昼食 + 施設自由見学**

道の駅 13:00 頃発→観光バス→旧大川小学校 13:30 頃着

13:30～15:00 **大川小学校語り部**

旧大川小学校 15:00 頃発→観光バス→宿 16:20 頃着

〔8月4日〕

宿 8:40 頃発→送迎バス→野蒜駅 9:24 発⇒仙石東北ライン⇒仙台 10:00 着

10:00～16:00 **仙台市内自由散策**

再集合場所：JR 仙台駅 **新幹線中央口改札 16時20分**（厳守）

仙台駅 16:44 発⇒やまびこ 150 号⇒東京駅 18:48 着

各種担当

- 松島湾語り部クルーズ：丸文松島汽船
- 漁業体験「かご漁」：奥松島体験ネットワーク
- 2日目の昼食：雄勝観光物産交流館「伝八寿司」
- 大川小学校語り部：3.11 メモリアルネットワーク
- 2日目の観光バス：ジャパン交通

おわりに

今号で第 21 号となります、機関紙「ちりレポ」はお楽しみいただけましたでしょうか。今回のちりレポでは大宮、鎌倉・江の島、横浜、上野・浅草の 4 つの巡検に加え、箱根での春合宿、仙台・松島での夏合宿といった具合に、相当ボリュームな冊子になっていることと思います。……というのも、かくいう僕はこの 6 つの中の 4 つで旅行記担当になっているんですが、それらを足し合わせただけでも 40 ページを超えているんですよ……。我々高校 2 年生は今年度（2023 年度）の文化祭で引退という形になるので、結構気合入れて書いたつもりです。もちろん他の部員も、締め切りに追われ、時に期限を踏み倒しながらも担当部分を書き上げて来てるわけなので、この「ちりレポ」がそんな努力の上に成り立っている冊子であるということは言うまでもありません。

ところで、去年の第 20 号の「おわりに」で「新入部員がいなくてヤバみ」という旨を書いた覚えがあるんですが、依然として中 1 は入部してくれていません……。割と「運動部を退部した後に余生を過ごす居場所」として地理部が存在している面は否めないんですが、これを読んで下さっているキミ！キミだよ！……目をそらすんじゃない！……とまあ、在校生然り、城北を志望してくれている受験生然り、地理部はいつでも入部を受け付けていますので、この「ちりレポ」を読んで興味が湧いた！とか、いろんな場所を自分の足で歩いてみたい！とお考えの方は水曜日または金曜日に高校棟 5 階の社会科ゼミ室まで足をお運びいただくと幸いです！

ということで、僕個人としてはちりレポに携わる最後のタイミングってことで名残惜しいんですが、あんまり冗長に書き連ねても仕方ないので、そろそろ締めたいと思います。それでは、最後になりましたが、この「ちりレポ」を発行するにあたって大変お世話になった巡検・合宿先の関係者の方々、日頃の生活を支えてくださっている保護者の方々、活動の裏側でもご尽力いただいている顧問の先生方、この冊子を手に取り読んで下さった読者の皆様、そして地理部員。この場をお借りして心からの感謝を申し上げます。本当にありがとうございました！また、今後とも当地理部に変わらぬご愛顧を賜りますようお願い申し上げます！

2023 年 9 月 30 日

城北中学校・高等学校 地理部副部長 市川 洸太

城北中学校・高等学校地理部 ちりレポ第 21 号

発 行 日：2023 年 9 月 30 日

編 集 者：河合 道祐

編集責任者：大畑 由生・齋藤 譲司

発 行 所：〒174-8711 東京都板橋区東新町 2 丁目 28 番 1 号

城北中学校・高等学校 地理部

印刷製本所：〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3 丁目 11 番 24 号

共立速記印刷株式会社